
有恋歌

三木こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有恋歌

【Zコード】

Z2935T

【作者名】

三木一いつ

【あらすじ】

自称超常現象研究家、年上美人の恋歌さん。そんな彼女に振り回される童顔少年有理君。吸血鬼と異能力、二人は自身の異常を治療する術を探すため、オカルト現象に挑み続ける。彼らの行き先に待ち構えるは、超能力、心霊現象、なんでもござれ。一人は探求の先にどんな答えを導き出すのか！？

短い時間で読み進められる、一話完結の連作短編形式です。

プロローグ

首筋が疼いた。

大学からの帰り道、何も考えず、ただただ無心で歩く。ふと顔をあげると、前方に一人の女性が待ち構えていた。いや、正確には待ち構えていたかなんて知りようもないけれど、直感的にそんな感想を抱いてしまった。

雑居ビルに囲まれたどこにでもある街道での出来事。なのに、どこか現実離れしたようにふわふわと身体が浮いていきそうになる。

「……ねえ、君」

長く、綺麗に伸びた黒髪。その中からのぞく整った顔立ちが妖艶な空気を纏つてこちらを射ぬく。

それだけで僕は動けなくなっていた。首筋が汗ばみ、敏感になつた感覚がジンジンと自己主張を始める。

「……ねえ、ねえ君」

本来なら高く澄んだ綺麗な声も、今となつては僕の耳を浸食する捕食者の囁きでしかなかつた。なんとか動かせるのは指先だけで、懸命にぐーとぱーを繰り返す。

「……ちょうどいい、ほしいの」

女性は近づき、成熟した大人の色香を放ちながら、僕の頬に手を当てた。

それだけで僕はビクつき痙攣して、彼女の瞳から視線を逸らせない。こんな世界は知りはしない、きっと彼女は僕が歩んできた19年の人生とは似ても似つかない世界の住人だ。

「……いた、だきます」

最初に感じたのは痛み。

そしてじわりと広がる甘い香り。

血と、女と、異世界感とでも言えばいいのか、どうしようもない

違和感が僕の中へと広がり続ける。

彼女は、僕の首筋に顔を埋めたまま妖艶に笑つて いるようだつた。見なくてもわかる。

それぐらい今の僕は敏感で、過敏で、感覚的になつて いた。やがて彼女は満足し、首筋に宛てがつて いた柔らかな唇を離すと、顔をあげ至近距離でこちらを見つめてくる。

それだけで、理由はいらない。

おそらく僕はすでに、この時点で、彼女に捕らえられていた。

まあ、簡単に……至極極端で俗物的で、なんの余韻もなく、一般的な解釈をするならば、きっと僕はこの時彼女に、恋をしたのだった。

一歌（1）

超常現象なんてクソ喰らえというのが彼女の口癖だった。

始まりはいつも突然に、例えば一本の電話からだつたりする。よくいえばアンティーク、悪くいえば時代遅れの産物である黒い回転ダイヤル式の電話機がけたましく音をならした。

時刻は夕時、いつものように縁側でのんびりとくつろいでいた僕は、小さくため息を吐き出しながら、会話器に向かつて放たれる言葉の数々に聞き耳をたてる。

「 いつ？ ああそなんだ。それで？ ほんとに？ わかつた、了解。それじゃあ」

よく通る澄んだ声はこの古びた日本家屋では筒抜けのよつな物のだった。

会話の内容はいつものような業務連絡で、特に変わった言葉は出てきていない。どうやら、我社……超常現象研究所としては珍しく、比較的まともな仕事にありつけるらしい。

もつとも、事務所の玄関の脇で忘れられた看板に記載された長つたらしの名称なんて、僕たちもお密さんも誰も使つてはいなければ。

縁側から日本庭園を眺めながらゆつくりと緑茶をすする。なんとも風流で心が落ち着いた。

けれど、そんな安息の日々は長くは続かないことを、僕は経験から察知している。いうなれば今のは最後のほほんタイムといったところだろう。

「 有理君、出番よ、私たちのね」

「 恋歌さん。いつもながら説明が適当ですね」

恋歌さん。僕のバイト先の上司、あるいは先輩にあたる人だ。

恋を歌うなんて乙女ちっくな名前をしてはいるが、それが本名か

どうかは怪しいものだ。一軒の日本家屋を貸し切つて、事務所兼自宅としているのがこの平屋で、僕は大学の近くにアパートがあるといつのに、ここに入り浸るのが習慣化していた。

まあ助手として、少なくないバイト代をもらつてはいるのだけど。「説明なんて後からついてくるのだから問題ないわね。さつさと車に乗り込む、現場は待つてはくれないのだからね」

「日が沈みましたね……」

僕の最後の咳きが、暗がりに溶け込んでいく。時間も18時を回つたぐらい。春にしては随分今日は暗くなるのが早い気がした。長い黒髪の女性がすらりとのびた手足をばたつかせ、一階建ての平屋を走り回る。

あわただしく身支度を整える恋歌さんを横目で見ながら、僕も足に力を入れ立ち上がつた。けれど、男の身支度なんて簡単なもので上着を羽織り、携帯や財布を入れるための小さなショルダーバックを肩にかけるだけで準備は完了してしまつた。

最後に洗面台の鏡を覗き込むと、猫毛な髪と無表情な童顔が映りこんでいた。

「先に出て車のエンジンかけておきますね」

いつものことなので気にはしないが、恋歌さんは自室に閉じこもつたまま出てくる気配はない。

女性の身支度は色々と大変なのだろう。……僕も知識でしか知らないけれど。

ガラガラと音をたてながら玄関を出て、日本庭園に侵入気味の駐車場まで足を運ぶ。これまた使い込まれた藍色の軽自動車にキーを差し込み、エンジンをかけた。

「まあ、僕の免許はAT限定だから運転はできないけどさ」

誰もいないのに咳いてみたりした。

我ながらカツコがつかないつたらありやしない。これは夏休み辺りにMT車への免許切り替えを考えるべきだろつか。

「お待たせ。どう、綺麗でしょ？ 当たり前すぎて訊くまでもない

「ほど」「て」「て」

「そうですね。恋歌さんはいつも通りお綺麗ですよ」

「なんか有理君……。そつけなくない？ お姉さん、傷つくよ」

「僕がそつけないのは昔つからですよ。嘘はつきませんけどね」

「恋歌さんにとっての仕事着というよりコートフォームなかもしない、白のワイシャツと黒のスカート、そしてストッキングと伊達メガネ。」

「見してできるの」風なチョイスだが、袖先や脇所に存在するヒラヒラやふわふわがただの趣味だということを主張していた。

ちなみに伊達メガネを要所要所で取り出すのが、最近の恋歌さんのお気に入りらしい。

年上の綺麗なお姉さんたる恋歌さんの、着るもの付けるものが一々似合ひすぎていて、僕は毎回心の中で、色々なフェチズムを開拓させている。最近は、少しばかりメガネ萌えに目覚めそうになつていた。

「見とれてる？」

「見とれてますよ。いつも」

「有理君。そういう台詞はもう少し恥じらいながら言つてくれないかな？ せつかくの年下属性が台無しだと思わない？」

恋歌さんがぼやきながら、右座席に乗り込む。

そして車のギアを華麗な手さばきで操り緊急発進。

「さて行きましょうか」

「僕はどこに、なにをしに行くのかすらわからないんですけどね。ドライブに出かけるのも悪くない。」

もつとも、僕にとって恋歌さんとのドライブは毎回行き先不明で始まるのだった。

一歌(1) (後書き)

そんなわけで、始まりました、有恋歌。
簡単に説明しますと、有理君と恋歌さんがくつかけやべりながらオカルト現象に挑んでいくようなお話です。たまに戦ったり、推理のようなことをしたり、恋愛っぽいことをしたり……。

各話は短編程度の長さで完結し、連作形式として繋がって行きます。話数が進むごとに伏線? っぽいものも回収していくならと思います。

一話、一話はそれほど長くはない、サクッと読めるかと思いますので、よろしければお手通しぐださいませ。

一歌(2)

「すつ」にわね。あるとこひまあるもんだわ。こんなお屋敷つて
わ」

「なんだか恋歌さんと来る場所はなんちやらサスペンス劇場の舞台
みたいな所が多い気がします」

軽自動車のくせにやたら速い車で20分ほど走った先、僕たちが
訪れたのはバカでかいお屋敷だった。

洋風のたたずまいのまま、横にも縦にも長いお屋敷がただっぴろ
い庭園の中にぽつりと存在している。恋歌さんの家も風流な日本家
屋でそこそこ良いお金がかかつてゐるはずだが、この場所はきっとそ
れ以上だろう。

お金の使い方が真逆というか、口は派手な方向に走つてしまつ
たようだけれど、僕としては少し寂れただぐらいの日本の屋敷の方
がワビサビがあつてよいと思う。

「こりつしゃいませ。お待ちしておりました。わたくし井上と申し
ます」

バカでかい洋館に圧倒されていると駐車場までお手伝いさんが出
迎えにやってきていた。名前を尋ねられることもなく本人確認が完
了したのか、執事服に身を包んだ初老の男性が頭をさげ玄関までの
案内を開始する。

「有理君。すごいわね、執事よ、執事」

「ついついセバスチャンと呼びたくなりますね」

「真顔でボケるのは止めてくれない？ とてもシユールだわ」

僕としてはくすりと笑えるナイスジョークを繰り出したつもりだ
つたが、どうやら無表情すぎたらしい。

「私もメイドさんでも雇おうかしら。好条件だせばひとつかりそ
なものだけど」

「僕なら応募しませんね。もしくは一週間で辞める自信があります

「いえ、ひつかかるわね。有理君はいつまでも私と一緒にいたいみたいだから」

「それはそうですね。僕はモノ好きなので、メイド服を着せられないかぎりは付き合いますよ」

さりげなくメイド服に対する予防線をはつておいた。

例えばこの屋敷でメイドやら執事に感動した恋歌さんが家に帰つてから僕にそれを求めるなんていうのは、ありがちな展開だつた。

「それではどうぞ、お待ちしておりました。恋歌様に、有理様」

「どうもありがとう」

「すいません、おじゃまします」

玄関から館の中に足を踏み入れる。

ベタな螺旋階段なんかが存在していた。そして、床に敷き詰められたジユータンは一目で高級なものだと判別できる。

ところで、僕たちのことは名前でしか呼ばれなかつたが……なるほど、この業界ではそんな感じで通じてしまつ所まできてしまつたらしい。

「すつごいわね。こうこう派手なのつて一度は体験してみたいつていうのが乙女心つてところかしら、お姫様みたいなベットとかさ」
本名かまではわからないが、恋を歌うなんて乙女チックな名前をした成人女性がうつとりとした風に咳いていた。

「なに? 私みたいなおばさんがこんなこといつてちやダメかしら?」

「いえいえ、恋歌さんはまだまだお若いですよ」

恋歌さんはタチの悪いことに地獄耳かつ読心術の達人だつたりする。ポーカーフェイスな僕の心が読めるのだからきっとそういうことなんだろう。

「この部屋にて旦那様がお待ちです」

廊下をしばらく進み、大きな部屋の前につくと、執事さんが優雅に扉を引いた。

ゆつくりと室内に足を踏み入れると、優しそうな顔をした中年男

性がこちらを向いた。

「これはこれはようじゅそいらつしゃいました。わたくし、この屋敷の主人の富城家永と申します」

「いらっしゃませていただきます」

富城さんと恋歌さんが大人の対応で挨拶を交わす横で、僕も子供ながらに頭を下げながらちらりと室内を眺め回した。

思ったよりも家具やデザインはシンプルで、綺羅びやかに装飾された屋敷の中にしては少々地味なぐらいの装飾だった。

「はつは、少々地味ですか。他の部屋と違っこは私の趣味よりな装飾なもので」

「いえ、そんな……。僕もこいつの部屋の方が落ち着きます」
ついつい室内の装飾にたいする感想が顔に出でてしまったのか、富城さんにフォローされてしまった。

成金というイメージを持つていたがどうやらこの館の主人さんは中々に常識的な感性をお持ちのようだ。

「すいませんうちの子が……。って、別に実の子供とかそういうことではないんですよ。断じて、ただの助手みたいなものですから」妙におばさん臭い反応に自分自身ショックだったのか、恋歌さんは自分で自分をフォローしていた。

大人にも色々な人間がいるのだつた。

「思っていたよりも普通の人で安心しました。これなら家の娘をうまくせできます」

富城さんは優しげに微笑ながらも、どこか影のある表情で椅子から立ち上がった。

「それでは」案内します。娘のところまで……」

一歌（3）

「すでにおわかりのことだと思いますが、私達はあくまで研究者というか物好きというかヘタの横好きみたいなものなので、あまり期待はなさらないでくださいね」

「いえいえ、お一人の噂は聞き及んでいますよ。別にプレッシャーをかけるわけではないんですが、今の私には頼る相手がいるだけです」

貴重なのです」

その言葉にはどんな意味があつたのだろうか。

大概僕たちが訪れる場所は手遅れになりかけの状況が多い。今回にいたつてもそうだったのか、富城さんは疲れた表情ながらも、胡散臭い僕たちみたいな連中に期待をよせてくれているようだつた。

「ずいぶんひどいみたいね、娘さん」

富城さんの後をついて歩きながら、恋歌さんは僕の耳元に近づくと小さな声で話かけてきた。

整つた顔がすぐそこで、女性特有の柔らかくて良い匂いがして、ついつい胸がドキドキと高なつてしまつ。

「そうですね。恋歌さんを信じるとかよっぽどですよ

「有理君は厳しいわね。褒め言葉だと受け取つておくわ

恋歌さんの表情が微妙に強ばつていた。

僕たちがイチヤイチヤと話しているうちに、田的の部屋についたようだ、可愛らしい装飾で彩られた扉の前で富城さんが振り返つた。

「こちらが娘の部屋です。嫌われてしまつたのか私は一緒に入れませんが、どうか娘の力になつてやつてください」

富城さんが丁寧に頭を下げる。

世間一般でいうところの良い大人がこれほどまでしてくれるというのは、まだまだガキと呼ばれる僕みたいな人間からすると思うところがあつた。

なんだか嬉しいもあるし、仕事にたいするモチベーションや責任

感もあがるというものだ。

「わかりました。力になる、といつのも大げさですが私達にできることがあります、精一杯させていただきます」

富城さんが娘さんの部屋から離れていくのを見守りながら頭を下げる。恋歌さんもやる気になつていてるのがさつきの台詞からも伝わってきた。

「……力になるつてこつのは言に過ぎよね。結局私達も自分のために来てるわけだし」

うん、きっと責任感やプレッシャーに押しつぶされそうなんだ、さすがのこの人もさ。と、思おつとしたけれどよくよく考えてみると恋歌さんのそんな姿は想像できなかつた。

「それじゃあさつと行きましょうか」

「ちょっと待つてください。深呼吸するんで」「真顔で緊張してゐるのかね。ま、年頃の女子の部屋だもの、精々楽しみなさい」

何を楽しめというのだろうか。

おつさんみたいなボケをスルーしながら、恋歌さんの後ろについて部屋に足を踏み入れる。

一見して女の子の部屋だというのが見て取れる。ピンクっぽい壁紙に、ジュー・タン、そして部屋の中央に位置するのは漫画みたいなお姫様ベットだった。

ベットの上から垂れているレースみたいな薄いカーテンの裏側に人のシルエットが見えた。

「こんばんわ。娘さん……つていうのはおかしいね。富城さん、でいいですかね？ 良ければ名前の方も教えてくれるかな？ つて、他人に名乗る前に自分からつてことで私は恋歌ですよよろしく

「あ、僕は有理です。よろしくです」

すらすらと長つたらじい自己紹介をこなす恋歌さんに続き、僕もどもり気味の声をあげる。

えらい違ひだったが、まだまだガキな僕としては所詮はこの程度

なんだろ？

「……あの、霞美です」

霞美さんはベットのカーテンに隠れたまま声をあげる。小さな、か細い感じの声だった。

「じゃあ霞美さん。カーテン開けてもいいかな？」

「はい」

カーテンの裏側でシルエットがゆっくりと惑いながらも頷いた様子が見えた。

「え？ あ、……はい？」

しかし霞美さんの素顔を覗く前に室内に異常が発生していた。慌てて変な声が出てきてしまう。

家具を伝つて異常な振動が感じ取れた。地震かと思つて隣の恋歌さんを見ると直立不動のままじつと霞美の方を見つめているだけだった。

その姿から、ああこれは地震じゃないんだなと理解しながら、周りに意識を張り巡らせる。

「これって、なんていうか、ベッタベタにポルター・ガイストとかいうやつですかね」

「だつたら面白いとか思つてたけど状況的にそうみたいね。建物は揺れていないもの」

真剣な表情で恋歌さんが瞳を細める。

室内にあつた家具 タンスや衣装ケースやらが浮いている。まだユラユラと宙に浮いているだけで、動きに指向性までは発生していないようだ。

「霞美さん。これってあなたの力なの？」

「え、あの……私は、私は別に……」

怯えた震えた声が聞こえる。霞美さんがベットの中で布団を抱きしめるような姿が見えた。

「逃げましょか有理君。今はただ浮いているだけだけど、よくよく見ると部屋のアチラコチラに重たいものが叩きつけられた痛々し

い後がついてるわよ」

「なんだかきちんと見ると面白いですね、これ。物理学とか完璧無視ですよ、これ」

モノが何の理由もなく浮くというのは中々に面白かった。
僕が学校でならつた知識なんていうのはまったく効果もなく、超常的な外的要因が働いているわけだ。超能力とかハンドパワーとか、そういう世界だった。読み切り漫画の主人公なら使えても不思議はないんだろうけれど。

「有理君、バカいってないでさつさと動く。それじゃあ霞美さん、また後でうかがいますね」

恋歌さんは満面の笑顔を霞さんに向けながらドアを閉めた。
部屋から出た後でドスンと重たいものが叩きつけられる音がした。
どうやらポルターガイストは終了し、宙に浮いた家具が落ちたようだ。

「す、」いっすね。僕、驚きました」

広々とした廊下でシミジミと呟いてみたりする。

「有理君、そういうのはもっと驚いた顔でいうものよ

恋歌さんはあきれたようにため息を吐いていた。そういうあなたは家具が宙に浮く不思議空間でいつも通りの仁王立ちだったじゃないですか、という言葉は一応飲み込んでおいた。

この程度で心を乱してしまう僕が純粹なんだらう。

「さつて、これはこれは案の定というか話に聞いた通り、私達の領分な不思議で幻想的な事件になってきたわね」

恋歌さんは言葉のもつ胡散臭さとは裏腹に、楽しそうに笑いながら腰に手をあて指をパチリとならした。

「……なんでしょうか恋歌様」

執事さんが現れた。

「かあー、ありがとうございます執事さん。いつも打ち合わせておいてよかつたわ。見て、この有理君の驚き顔。珍しいのよこの表情」
驚きますよそりやあ、でもちょっぴり呆れてもいます。

「恋歌さんのそういうところ、可愛らしさとは思いますけど」

「さて、執事さん。少しばかりゆっくりできる部屋を貸していただけるかしら。ついでに事情聴取というか、情報提供もお願いできますかね」

僕の愛の言葉は軽く流れ、恋歌さんがイキイキとし始めた。なんだかんだで、彼女は趣味でこいつことをしているのかもしれないと思いながら、僕は小さく嘆息するのだった。

一歌(4)

「というかよくよく考えたら僕たちいきなりあんな危ない部屋に入りましたけど、一言いってくれてもよかつたですよね？」

「私は知っていたからね、有理君も知ってると思つたんでしょうね。思い出したように尋ねてみると、恋歌さんは当たり前でしょ、という顔で返事をしてくれた。

それって騙されたつてことじやないですか、という言葉は飲み込んでおく。考えてみれば僕が情報弱者な状況は常日頃からあふれかえつてるパターンでしかなかつた。

「しつかしさすがドでかいお屋敷ね、紅茶とお菓子が美味しいすぎるわ」

「そうですね。僕は日本茶の方が好きですけど」

客間として僕たちが通された一室には小さな机とチェアにタンスとベット、というシンプルな感じで家具が置かれていた。そのチェアに腰掛け慣れない光景にそわそわしながらも上品に紅茶をすすつたりする夜の一幕。

簡単な夕食をいただいた後のティータイムだつた。ちなみに、食事を簡素なものにしてもらつたのは正直早く帰りたかったのと、呑気に腹を満たしているほど暇じゃなくなつたからだ。

時間が時間なのか、屋敷内もどこか静かで家事をまかされているお手伝いさんたちもその大半が仕事先から開放され、家路についたようだ。残つているのは身内のようなかなり近しい世話を任せている人だけらしい。

「さて、恋歌さんそれでわかつたんですか？」

「なにがよ。あんな超常現象に理由なんてあるわけ？」

「ニヤニヤした顔で質問を投げ返されてしまった。

「僕は信じてるんですよ。この世の現象にはすべて理由があるって

恋歌さんの言葉を」

ついつい真面目な顔になってしまった。

「わかつたわかつた、ゆつくりと説明してあげるわよ。その変わりきつちりと治療に協力すること」

なにか良からぬ雰囲気が感じ取れたけれど、仕方なく僕は頷いた。恋歌さんと一緒に、屋敷に出入しているお手伝いさんの話を数人分聞いたが僕では真相に辿りつけなかつた。霞美さんのポルターガイスト現象に原因があるのなら知りたいというのが、人間的好奇心というものだと思う。

「じゃあ霞美さんの部屋につくまでにちょっとだけ話しておこうかしら。ってこいつ探偵っぽい振る舞いは好きじゃないわ。私は決してそんなものではないし、そんなものとは似ても似つかない存在のはずなんだから」

客間を出て恋歌さんに連れられるままに霞美さんの部屋へと向かう。広大で似たような間取りの続く屋敷内をすいすいと移動する恋歌さんはさすがだった。

「じゃ、さつそく質問ね。有理君、霞美さんがどうして家具なんて持ち出して私たちを威嚇してきたと思う？ ややこしいから彼女が超能力的な力を手にしているという仮定での話でいいわよ」

「なんですかね。やっぱり人に怯えているとか、トラウマがあるとか」

「うーん普通すぎる解答ね。それが正解だとすると、なぜ彼女は私たちが部屋に入ってきてベットの近くによつて話かけるまで何もしてこなかつたのかしら」

たしかにそういう部分で僕の解答は破綻している。

対人恐怖症とかの結果、あんな力をふるつてきたのなら僕たちが彼女の部屋に普通に案内されたのもおかしな話だし、無理やりに入つていたとして無事に帰つてこれた意味がわからない。

「ヒントあげる。乙女にとつてはとても重要なことよ」「きっとそれ、重要なヒントっぽいんですけど。僕は乙女じゃないので理解できない気がします」

ついつい意地悪三昧の恋歌さんにとげとげしい口調で返してしまつた。

理解している人と、理解していない人という図式だとこうやって僕は集中攻撃にあつてしまふのだった。気持ちがほんの少しばかりさざぐれても仕方ないというものだ。

「ま、今からいやでもわかることだと思つけどね」

話している間に霞美さんの部屋の前についたらしく、見覚えのある扉の前で恋歌さんが足を止めた。

「有理君。耳貸して」

「いやな気配がしますけど了解しました」

耳元でそつとささやかれる。

ところでなぜこんな場所で内緒話をしているんだろう、誰かに聞かれる可能性もあるというのだろうか。

「まじで、ですか……」

「そ、しつかり治療してあげなさい」

作戦を伝授された僕は、満面の笑みを浮かべる恋歌さんに見守られながら扉をノックした。

一歌（5）

「あの、すいません。夕方遅くに訪ねた有理ですけれど、よかつたもう一度会つてくださいませんか？」

返事はない。

というよりも扉が開くまでは音で判断するしかないんだけれど、僕の感覚では室内は静かなものだつた。寝ているのか無視を決め込まれてしまったようだ。

たしかにあんな物騒な現象を巻き起こしてしまったかもしれないんなら、結果的に人に会いたくなくなるのもわかる。

「というわけで私の特技が役立つわけね。まったく鍵を開けるにもそれなりの苦労があるつてのに……、お屋敷 자체のセキュリティが完璧に近いからこいついう個室単体には手を抜き気味なのが助かるわ。私みたいな素人にはアンティーケな取っ手しか開けられそうにないからね」

恋歌さんは泥棒みたいな道具を取り出し、僕にはよく分からぬ動作で鍵穴をこねくり回していた。

怪訝な視線で恋歌さんを見る。

「ほら、一時期流行らなかつた？ サブプライムローンとか」「それをいうならサブターン回しだと思います」

僕の視線に気づいたのか、恋歌さんから話題をふつてきた。ついつい冷ややかな態度でそれに返事をする。僕の記憶が確かなら恋歌さんのしている行為はサブターン回し的な方法ではないと思つ。

今さら驚くほどでもないんだろうけど、まったくこいついう特技はどうかと思うんだ、常識的な人間として。

「さて開いた。この力ちりつて音が達成感をそそるわね」

「……恋歌さん。まあいいですけど、では行きます」

表情を引きつらせながら、不法な手段で扉を開ける。

できるだけ音をたてずに侵入すると、室内は電気はついたまま、

夕方に訪れた時のように霞さんはベットのカーテンの内側に腰掛けているようだ。

「だ、誰！ どうして……」

さすがに驚いているのか、大きめな声が漏れ聞こえてくる。

うん、イメージが掴めそうだ。

「綺麗な声ですね。できればもっと聞かせてほしいのです」自分でもすんなりといえたことにちょっとびり驚いた。普段から冷静を心がけていたのがこんな所で役に立つたのかもしれない。

「……っえ？」

露骨に警戒が緩んだのがわかる。

それでも僕が彼女のベットに近づくたびに異変の気配が迫つてくるのがわかつた。室内を注意深く見てみると家具がほんの少し揺れ始めている。

「すいません突然！ どうしても一目見たかったもので……、失礼、しますよ」

ゆつくりと緊張しながらカーテンをめくる。

「いや、いや……！」

とたんに部屋の中の家具が一斉に踊りだす。夕方とは違つ、より不規則な動きで慌てたように宙を行き来し始める。すごいもんだ、いるところにはいるといつか出来る人には出来るといつか。

ふと、この手の能力に憧れを覚えてしまう。

週刊漫画雑誌的にはあの手の力を使いこなしてみたいという願望もある。

今はそんな心の変化は押さえ込み、ただなすべきことをするために真っ直ぐと霞美さんの素顔を見つめた。うん、なんとかなりそうだ。

「なぜ嫌がるのですか？ こんなにお綺麗なのに、いつまでも見ていたいぐらいです。おっと、突然失礼でしたかね」歯の浮くような台詞だった。

僕つてば役者にでもなれるかもしれないな、と内心思いながらも

熱い視線はそらさない。

「僕は嘘はつかないんです。柔らかそうで透き通るような肌、整つた目鼻立ちはお父様似ですかね」

「あの、それって」

「何度もいいますよ。僕は嘘はつきません。思つたままのことをいつているだけですから。だからもつと自信をもつてくださいね」

最後に取つておきの笑顔をお見舞いしてみると、霞美さんは照れたように頬を染めうつむいてしまつた。

それと同時に部屋中の家具がその場に落ちる音がした。中々の轟音なせいか人がこの部屋に向かつてくる慌ただしい足音が聞こえてくる。

「それではちよつと失礼します。後片付けが残つてゐみたいですか

ら」

部屋の入口付近で意地悪な笑みを浮かべる恋歌さんを見てみると、わかつてますよ、というアイコンタクトが帰つてきた。

霞美さんの憧れを壊さないようになつて、できるだけ優雅な動作で部屋から去る。

「……それじゃあ最後まで聞かせてくださいよ。僕はきちんと協力したんですから」

「ところで有理君。あの笑顔は反則だと思つわよ。以後封印ということ」

微妙に頬を染めながら恋歌さんは早口でまくしたてた。僕としてはさつさと事の真相を説明してほしかつたんだが、まあ珍しい表情が見れたからよしとしておいつ。

一歌(6)

「それにしても、有理君つて役者むいてるのかもね。普段無表情な
せいか意識して丁寧に表情を変えられるみたいだから」

褒め言葉のはずなのにまつたく嬉しくなかつた。

霞美さんをお手伝いさんにまかせ、僕たちは最初に訪れた宮城さ
んの私室へと通されていた。時刻は日付が変わる少し前、けれど屋
敷内はどこか明るい雰囲気に満ちているようだ。

「いやー、ほんとうにありがとう。まさか久しぶりに娘の顔を見る
ことができるとは……しかもあんな笑顔。ほんとうに、ほんとうに
感謝の気持ちで一杯だよ」

感謝されるのは素直に嬉しかつたけれど実際それほどのことをして
たという自覚もないのに、なんだか申し訳なくもあつた。

「いえいえ、私はただ自分の知的好奇心から治療を試しただけです
から。今回に至つては乙女の味方もできたみたいですし、こちらこそ
感謝したいぐらいです」

よくわからない理論だったが、なんだか恋歌さんはとても満足気
だった。

特に乙女の味方というのが気に入つてゐるのか、何度も小さく咳
いているのが聞こえる。

「いえ、ですがなんというかなぜ急に……とは思つてしまします。
何人かの人間が娘を助けようと挑みましたがなんの変化もなく……
むしろひどくなつていつたぐらいですから」

「そうですね。私は探偵ではないので推理を披露するほどエンター
ティナーではありませんが、簡単に説明させていただきましょう」
部屋の中にいた館の主人たる宮城さんを始め、お茶の用意をして
くれた数名のお手伝いにざわつきが広がつていく。

恋歌さんは胸ポケットから伊達メガネを取り出し装着すると、不
敵な笑みを浮かべながら語り始めた。

「つまり娘さんは人に顔を見られることを極度に怖がっていたのです」

霞美さんはあんなに綺麗だというのに、贅沢な悩みだった。おかげで僕は恥ずかしい台詞を惜しげもなく披露するはめになつたのだ。多少恨みたくもなる。

「勿体無い話ですね。うら若き乙女が……。けれど、乙女だからこそなのかもしません。思春期の纖細な心が踏みにじられてしまつたのは……」

「それってつまり」

僕が思わず聞き返そうとした言葉は、恋歌さんのアイコンタクトによつて遮られた。

「つまり、例えば、例えばですけれど、娘さんに近しい人間が顔に対するコンプレックスを植え付けていたとかですね。真相まではわかりませんが」

けれど、恋歌さんの話を聞く限り犯人はひとりしかいない気がした。

娘さんの部屋でポルターガイスト現象が発生するようになつてからも唯一彼女と顔をあわせていた人間は、ひとりしかない。彼女の身の回りの世話をしていた側近のお手伝いさんだ。

偶然なのか故意なのか、そのお手伝いさんもこの部屋にいる。彼女は狼狽し、顔を伏せジュータンを凝視していた。

一応メイド服だつたりするわけだけど、僕は個人的に彼女をメイドさんと呼びたくはなかつた。彼女の年齢のせいもあるけれど、美的感覚的に抵抗があつたのだ。まあ女性の好みなんて人それぞれだとは思うけれど。

「後はわかりません。娘さん自信がポルターガイストを起こしていったのか、自然発生なのか、他の誰かの仕業なのか。事実として彼女は自分に会おうとする人間を危険にさらし続けてしまつたことで、深刻なコンプレックスを根付かせていったようですけれど」

僕みたいなナヨナヨした男の台詞で霞美さんが救われたとは思え

ない。ただ応急処理ぐらいにはなつていほしいと思つ。

資産家の令嬢で容姿端麗という出来すぎなプロフィール。妬まれるには十分すぎる。

まあ、こんなお金持ちな屋敷のことだ。原因さえわからば後は専門的な人たちがなんとかしてくれるだろう。

能力を使ったのは、本人か、それ以外の人か。そんなのはきっと些細な問題だ。僕たちにとつては今日の体験そのものが貴重な財産となる。

「では私はこれで、人間の気持ちにはあまり興味がないので、後の処理はおまかせしますわ」

恋歌さんはあつさりと踵を返すと屋敷を後にするよつた部屋を出た。それにつられて後を歩き出した僕の後ろで騒がしい声が聞こえる。

たしかに、怒声やヒステリーな声を聞くのはあまりいい気分ではなかつた。

一歌(7)

「有理君。なんだっけ、この世の現象にはすべて理由があるだっけ。昔それと同時に私がいつた言葉、覚えてるわよね？」

「理由がないのは人の心ぐらいなものだ。ですか……」

屋敷の玄関を抜け駐車場へと向かう最中、僕は恋歌さんの言葉に納得せざるを得ない。

人の心の複雑怪奇さは特になんの理由もなく行動を決定し、ひどく簡単に人を傷つける。それらすべてに理由や原因を求めるというのはナンセンスなかもしない。

「やつぱりその言葉も信じないとですか……。ベタベタな女の嫉妬だつたとか、いじめだとかそんなんで納得してちゃダメですかね」僕はどうやらかといふとこっちの言葉は信じたくはなかつた。

人の思考すらも理解したいなんて傲慢なことを心のどこかで思つてしまつてゐるのかもしない。

「そうね、それじゃあ一つだけ質問」

恋歌さんは意地悪なだけれどとびっきり魅力的な表情で微笑みながら僕の猫毛な頭を撫でた。

「有理君が私のこと好きなのって理由がある?」

容姿が綺麗だからとか。

性格が魅力的だからとか。

一般的な答えはいくつもある。けれど、それらはすべて本質的な意味では答えになつていないよう思えた。人間の本能というか子孫を残すためのシステムなんかを説明するというのも屁理屈だし……ロマンもヘッタクレもない。

なんというか、恋歌さんはこういう部分では乙女心一杯だった。

「答えになつてないですけど、あえていうなら心がドキドキするからとでも答えておきましょ」

「よし、それでいいのだよ。少年」

頭をくしゃくしゃと撫でられる。

子供扱いされるのは妙な気持ちだ。嬉しくもあり、恥ずかしくもあり、そして、悔しくもある。

結局僕はお手伝いさんと霞美さんがどうしてああなったのかを知る術もなく、恋歌さんと仲良くお屋敷を後にする他にないのだろう。まあ帰りたくないわけじゃない。夜も遅くなつてきたしさつさとふかふかの布団に包まれて、眠りにつきたいという人間的欲求が増してきている。

「それじゃあ執事さん。色々と恋歌さんがご迷惑をおかけしました」「いえいえ、ありがとう」やつました。お嬢様の笑顔が久しぶりに見れて嬉しいかぎりです」

僕たちを駐車場まで送りにきていた執事さんは表情をゆるめながら深々と頭を下してきた。

この日最深のお辞儀だった。

人に感謝されるのは、悪くない。

「あら、お嬢さん……。もう玄関まで出てきて……、ほんとうに元気になられたようですね」

執事さんの後ろ開かれた玄関の扉の影。遠目ながらに、可愛らしいパジャマ姿のままこちらを覗き込む霞美さんの姿が確認できた。

「乙女心ねえ。まったく有理君も可愛い顔してやるものだわ」

「それじゃあ失礼しますね。どうもありがとうございました」

恋歌さんの言葉をスルーしてさつさと車の助手席へと向かう。

もしかして、僕は取り返しのつかないことをしてしまったのだろうか。

数分後エンジンがかかり、動き出した車のミラーから見えた霞美さんの笑顔は魅力的だった。けれど、その姿が遠くになつていくほどに、どこかホッとしている自分がいた。

一歌(8)

「恋歌さんタバコはどうかと思ひますよ
「あら、仕事終りの一本ぐらいは見逃してほしいものだわ。こんな時ぐらいしか吸わないんだから」

深夜の道路は空いて嫌いじゃない。一人乗りの藍色軽自動車は軽快に速度をあげ、家路を急いでいた。

そんな中タバコを吸うおうとする恋歌さんに冷ややかな視線を向けてみたりする。

「有理君。ライターくれると助かるかな、なんて」「はいどうぞ」

自分でも驚くほどに一瞬にしてライターを手渡すことができた。どうやら、超常的な力が発動してしまったようだ。超スピードなんかじゃない、ただライターを渡したという結果だけが残る。そんな奇妙な体験。

……よくよく、思い出してみれば別に驚くことではない。僕はもとからこの手の力の片鱗が使えたりしたはずだつた。

ぶすりと僕の首筋に痛みがはしる。

「恋歌さん……、唐突ですね」

「がぶ、がぶ」

別に血を吸われているというほどではない。ただ少し犬歯が発達していく痛みが走るだけ。でもきっとまた僕の首筋は絆創膏のお世話になるだろう。

「信号機青になつたら教えて」

息継ぎのために顔をあげた恋歌さんが早口で呟く。

首筋を年上のお姉さんに噛まれながら目の前をぼーっと眺める。しばらくすると、信号機がチカチカと赤色へと切り替わった。

「信号、変わりましたよ」

首筋を噛まれて数秒後、後ろに並ぶ車に迷惑をかけるわけにもい

かないので、仕方なく声をかける。実をいうと僕はこうやって首筋を噛まれるのが嫌いじゃない。

好きな人と密着したいというのは当然の願望だし、慣れたせいか、チクリとした痛みがなんだか心地良かつたりもする。どうやら僕はだめな方向に進んでしまっているようだつた。

「まったくいやな体質だわ。自分でもね。ニンニクも十字架も陽の光も苦手なんてベタにもほどがあるわよね。どうせなら不老不死とかしてくれればよかつたのに」

「無茶をいわないでください。人間、できることしかできない、ということじゃないですかね」

「有理君は現実主義ね。そんなのじゃ人生楽しめないわよ」「そんなことないですよ。僕は恋歌さんのおかげで毎日楽しいですから」

心なしか恋歌さんの頬が染まつた気がした。

普段あまり見せない隙だつたので、こういう光景は貴重だつた。

「僕だつて読みきり連載漫画の主人公みたいな体質だつたのが、恋歌さんのおかげで日々平凡に暮らせてるんですから」

「昔読んだ小説の吸血鬼が血を吸うことで主人公の能力を無効化したからつて、今でもそのイメージを忘れられないんだから、驚きよ」
恋歌さんは吸血鬼だつた。

僕は能力者だつた。

なんて考え方をしていると恋歌さんにぶつ飛ばされそうだから訂正すると、恋歌さんはニンニクや十字架や陽の光が苦手で、犬歯がちょっと発達した時々人の首筋に噛み付きたくなるだけの体質だつた。

僕はといえば、ただほんの少し人と違つた力が使えるだけだつた。自分でもあまりに使わないせいで、というよりも使えないせいで、どんな力が使えるかすら、正確なことはわかりはしないけど時々あやつて突然変な現象を起こしてしまつて、その度に自分で驚いたりしてしまつ。

「超常現象的ですね」

首筋を押さえながら、再び車の運転に集中し始めた恋歌さんに語りかける。

「そんなもんじゃ断じてないわよ。どこかに理由があるはずなんだから……。今回だつてきちんと治療できたのに自分の症状が治らないんじゃ意味ないわよね」

「いいじゃないですか、ああやつていろんな症状を見ていればそのうちゃんかヒントが出てきますよ」

今回だつてうまくいった。

ならいつかは恋歌さんの体质だつて元に戻せるのかもしれない。

「まったく人の心は複雑怪奇よ。不思議現象だつて起こせるんだから」

「大概の人は起こせないですけどね」

それほど簡単な話でもないはずだ。そんなに簡単に謎パワー人々が目覚めるとあれば世界はほんとに漫画雑誌みたいになつてしまふ。

「それもそうね。所詮治せる症状なんて風邪みたいなもんよ。だから私も風邪なの、風邪が長引いてるだけなの」

「そうですね。そういうことにしておきます」

そつけない返事で恋歌さんを励まそつとしたが、効果はなかつたようだ。

家が近づいてきたのか車の速度がさがつっていく。

「さて、今日も終わりですね」

「そうね、仕事も終わつたことだしうつくり眠れそうだわ。有理君はどう?」

「僕ですか…… そうですね」

一呼吸ため、あの時の表情を思い出す。

「恋歌さんのせいで首筋が疼いて火照つて、大変な夜になりそうです」

霞美さんに見せた封印していの笑顔をお見舞いしてやつた。

恋歌さんは声にならない声をあげ、あやうくバック駐車で庭園に突っ込みそうになっていた。

今日一日分の意地悪へのお返しといったところだ。僕は恋歌さんの可愛らしい呆け顔が見れたので、存分に安眠ができるようと清々しい気分で家の玄関をくぐるのだった。

一歌(8)(後書き)

なんとか一話(一歌目)終了です。
正確には後、一話分ほど、エピローグ的なまとめ話がありますが
……。なんなく雰囲気を掴んでいただけたら幸いです。

一歌（縁側）

縁側でぼけーっとしながら、一息。春の中頃、休日のさわやかな過ごし方。

庭には朝日が注ぎこみ、草木が気持よさそうに揺れている。それを見ながら、淹れたての緑茶をひとすすり。

今日は田代めも良かつたし、朝食用に作ったオムレツも綺麗な半熟具合で、朝から清々しい気分。課題やレポートなんかは忘れて、今日は一日のんびりと過ごすと心が揺れる。

そんな中、

「あー頭痛い、有理君、お茶」

「恋歌さん、昨日遅かつたみたいですね。大丈夫ですか？」

頭を押さえ、田元にうつすらとくまを浮かべた恋歌さんがからんでくる。春といっても、蒸し暑い日が続いているせいか、Tシャツにホットパンツというかなりラフな格好だ。

「うー癒される。癒されるよ、このさらさらの髪の毛に、ちひりちひり身体」

「恋歌さん離れてください。お茶が入れれないです」

直に伝わる恋歌さんの感触にどきどきしつつも、冷たく引き剥がそうとする。

ホントはとても嬉しい事態なんだけれど……。

「恋歌さんまたお酒飲みましたね。眠気覚ましになってるんですか、ほんとにそれ」

「なーにいつてんのよ。やっぱり夜中の作業には酒でしょ、酒！」仕事終わりのタバコと、作業の景気付けの酒。機会は多くないはずだけれど、こんな時ばかりは愛する女性もおつむんぐくへ見えてしまつ。

「僕は恋歌さんの身体だけ心配します」

「苦労をかけるねえ、おまえさん

「それは言わない約束だよ……。ですか」

「ゆーり君。ノッてくれたのはありがたいけど、その表情は止めて、なんだかいたたまれないわ」

僕がジト目になつていたせいか、恋歌さんが素に戻る。そして、差し出したお茶で一服、バツの悪そうな表情でこちらをチラ見。

「あのね、これはその、ちょっとだけよ、ちょっとだけ。前みたいにバカバカやってないわよ」

「そこは信じてあげます。恋歌さんも仕事で忙しかったみたいですし」

僕がほぼこっちの家に住むようになつてからは恋歌さんの生活習慣もそれなりに改善されているので、実はそれほど心配はしてなかつたりもする。

甲斐甲斐しく世話をし続けた結果だつた。まるで通い妻みたいだ。

「なんの仕事だつたんですか？」

「ん？ これよ、これ」

「ああ、何時ものレポートですか」

僕らが出会つた複雑怪奇な異常現象。

それを『報告』するのが僕らの仕事で、何も人助けに四苦八苦しんでいるわけじゃない。もつとも、自称乙女の味方な恋歌さんに引っ張られ、結果的に人助けに走るなんてのはありがちな展開だけれど。「機関、からのレポート……。それも報酬の一つですけど、僕はお給料の方だけ気にしてます」

「まあそつちの支払いも中々のもんだつたわよ。もつとも、今回は依頼主さんからの直接報酬の方が大きかつたけど」

富城さん……さすがは金持ち。それなりの規模やら権力やら財力をもつてゐるはずの僕らの上司の支払いより羽振りがいいなんて、よほど今回の仕事に喜んでくれたようだ。

「でどうだつたんですか霞美さんは？」

「あら、気になる、やっぱり。ふつふつふ」

気持ち悪い笑いを浮かべながら、恋歌さんが詰め寄つてくる。

「まあ教えたげる。結果はシロ。ほとんどただのパンペーよ。組織からの評価も最低ランクのD」

それはよかつた、ほんとうに、アレはただの風邪みたいなものだつたのだろう。

「その方が幸せですね」

「そりやそうよ。これからはあの子も世間一般の乙女よろしく、恋にお菓子に大忙しそうだから」

今まで引き籠っていた分、そやつて青春を是非謳歌してほしいものだ。

「まあ今回のは乙女の心を傷つけたせいで起こうた、超常現象だつたわけだけど」

それほどまでに乙女の心は、巨大なパワーを秘めているようだ。少なくとも僕なら顔のことを言われたぐらいでは、不思議パワーに目覚めるような感情の起伏を感じることはできないだらう。

「兎にも角にも、女性の心はデリケートなんですね」

「恋は顔でするものではないんだけどね」

さらりと、乙女のようなことを言いながら、恋歌さんは縁側で寝転び大の字を表現。

「今日はなんもしない、ぼーっと過ごす」

「それは良い休日の過ごし方だと思います、この前大学の帰りに良いお茶請けを買ってきました。生もみじですよ、生もみじ」

恋歌さんの世話をするため、縁側から腰をあげる。

どうやら僕にとつてのより良い休日の過ごし方というのは、この人の世話することだつたらしい。

一歌（縁側）（後書き）

といつわせで、一話田がやつといり終アです。

この縁側はエピローグとこつ名の、まとめタイムです。私の場合、よく話を抽象的なまま終わらせるがるので、このような話が必要に……。

こんな感じで一人の活躍をこくつかの短編にわけて公開していくので、よろしければお付き合こととこませ。

一歌（1）

「一つ返事は君の悪いところだ。
といつのが、彼女の口癖になりそうな勢いだつた。

「はい、どうぞ恋歌さん」

「あ・り・が・と・う。有理君」

のどかな縁側、差し出した緑茶が乱暴に奪われる。

きつい視線な気分は終わったのか、今は妙に落ち着いた、感情の
ない視線が日本庭園の池の方に注がれる。どうやら恋歌さんは「機
嫌斜めなようで、僕としては気が気がでない。

「怒つてますか、恋歌さん？」

「……有理君、そんな質問は論外よ。女性の機嫌をさらに悪化させ
る意味しかないのだから」

どうやら僕のフォローは失敗だつたらしく、恋歌さんの整つた顔
立ちがほんの少しばかり歪んで見えた。

ああ、またやつてしまつたと、ひそかにうな垂れる。できること
なら今すぐベットに横になつて、嫌なことはすべて忘れてしまいた
い。そして夢の中でくらいは好きな女性とイチャイチャ幸せに過ご
したいものだ。

「だいだいだね、ユーリ君。君はお人好しなのかただのめんじくさ
がりなのか、人の話を安請け合つしそうだよ」

「それはもう、返す言葉もございません」

縁側、恋歌さんの隣に腰掛けながら軽く頭を下げて謝罪する。

が、実のところあまり反省してなかつたりするのだからタチが悪
い。というよりも、この年になると自分のそういう部分を割りきつ
てしまつて、治そうにも治せないと決めつてしまつてはいるのが悪
いところだ。

「……どうせ言つても無駄なんでしょうけど。所詮は人の長所も短

所なんてのは同じ物なんだから

「仰る通りでござります」

恋歌さんはそんな僕を一瞥してから、深い溜息をつくと、あきらめたように立ち上がった。

「わかりました、わかりました。そんなあなたと雇用契約してしまつた私の負けでござります」

機嫌が治つたとは言い難いが、一応の及第点。

恋歌さんは仕事モードに入ったのか胸ポケットにしまっていた伊達メガネを取り出し、キリリと瞳を釣り上げる。

「さて、連れてってもらつわよ。依頼者の家までね」

一歌（2）

事の始まりは僕が大学のテスト前に、必死こいて食堂で勉強していた所からだつたりする。

夏の訪れの迫る春の終盤、期末テストだけで評価するのは可哀想だと、生徒思いな先生方の配慮によつて中間テストなるものが行われる。

バイト、と称して恋歌さんのところに入り浸つてゐる僕にとつては、とてつもなく重大な単位という壁。この単位ポイントを貯めないと卒業できないように、大学のシステムは出来上がつてゐるわけで……。

「やばい、まじやばい」

中間テストが行われる授業まで残り3時間。時間は充分あるくせに、覚えることはまだたくさん。

「」の日のためにとある通販サイトで購入した先生制作の教科書という名の哲学書は、分厚さだけで内容がさっぱり入つてこない。少なくとも僕には合つていらないシロモノだつた。

「どうしよう、どうしよう」

要点を押さえ、勉強してはいるものの、不安は消えてはくれない。危なく独り言を呴き始めている時点で、僕にしては相当に焦つていると判断できた。

早朝の食堂は空いているが、さすがに中間テストの前だからか、チラホラと生徒の姿が見えた。周りの連中も似たようなものらしく、彼らの焦つた様子がさらに僕の心配を加速させる。

こんな事なら普段から真面目に授業に出て、勉強していればよかつたとまでは言わないが、テスト一週間前から対策に乗り出すべきだつた……。

なんて、できもしない反省を繰り返しながら、テキストを消化していく。

「……あの、有理君？ もしかしてお困りですか？」

「え、ああ、草薙さん？」

そんな僕に話しかけてきたのは、クラスメイトの草薙さんだった。ふわふわとした髪型のままに、どことなくふるふわとした雰囲気の女の子。そんな大学生らしい女の子が、僕にどんな用事なのだろう。

残念ながら、大学に真面目に通っているとは言い難い僕は学科からは浮き気味だというのに。

「あ、あたしの名前ちゃんと覚えててくれたんだね！ 美香、嬉しいな！」

「いや、まあ一応同じ学科だしさ」

感極まつたのか、一人称を自分の名前にしながら喜びを表現する姿は、素直に可愛いと思えた。

僕の一般的な感性はなんとか維持できているらしい。女性の好みなんてのは、恋歌さんのせいでもちやくせやに歪んでしまっただろうけれど。

「だつて、有理君あんまり大学来てないしさー、この不真面目さんめ！」

草薙さんは食堂の奥、窓側に腰掛けた僕の隣に座り込むと、ペラペラと話題を膨らませていく。

この前の休日に友達とカラオケに行つただの、

この前の飲み会で行つたあの店がよかつただの、

この前のバイトの時店長がうざかつただの、

話が進みすぎて一周したのか、話がこの前の休日に戻り始めたその直後、草薙さんはやつと必死でテキストに貼りつく僕の姿に気づいてくれたらしい。

「あー、なりほどね！ 哲学のテスト対策つてやつか

「そりなんだよね。正直、草薙さんと話しての余裕、ないかも。頭の中、ソクラテスとかプラトンで一杯」

僕としてもクラスメイトを邪険に扱いたくはなかつたが、しょう

がない。それぐらい単位というのは重いのだ。

「ふつふつふ、じゃつじゃじゃーん、これ、何かわかるかなー？」

そんな僕の訴えなどなかつたかのように、草薙さんは可愛らしく

自分で効果音をつけながら、何かを取り出した。

「これ、先輩とか友達から貰つたの、あたしなりにまとめてみたんだけど……」

そこに現れたのは、哲学のノートっぽいものだつた。見た感じ丁寧に、かつ色分けされてまとめられており、過去問対策つまで網羅されている。

「そ、それ！」

「ダメー！」

ガツ！ とほぼ無意識で突き出した右手は、草薙さんによつて防がれた。行き場を失つた僕の右手が虚しく宙にとどまり続ける。

「えーっと、あたしのお願い聞いてくれたら、見せてあげてもいいかなーなんて」

「なに、なに？ 今ならなんか大抵のことにつんといいそつだよ、
僕」

思えば、この時点では僕は正常な判断能力を失つていた。

完全な安請け合い。恋歌さんに相談もせずに依頼を受託。結果、僕の手に負えない内容だつたために恋歌さんに泣きつくハメになつてしまつたのだった。

一歌（3）

「ストーカー事件なんて随分とベタなものね」

「それが結構悪質みたいで……」

恋歌さんに協力をお願いした最大の理由。それは今回の相手が暴力を振るつてくる可能性があつたからだ。

残念ながら一般的な成人男性どころか、近所の中学生なみの体力、腕力しかない僕にとって、リアルファイトというのは中々に難易度が高い。

「恋歌さん、この前の鍛錬、またお願いしますね」

「まったく、有理君は読み切り漫画の主人公みたいなチート能力持つてるつていうのに、弱いつたらありやしないのね」

そのチート能力は恋歌さんの吸血行為によって封印されているわけで、そもそも僕は自由にその能力を操れた試しがない。

つまり、僕なんていうのは世間一般の大学生にも劣るただのもやしつ子でしかないのだ。

「恋歌さんもやっぱり強い男の人とかが好きなんですか？」

「そんなの気にするわけないじゃない、だつて私の方が強いもの」

それはそうだ。

恋歌さんが体得している武術は腕力の差なんてハンデにならないかのように、相手の力を利用している。ちぎつては投げ、ちぎつては投げ、なんて無双する光景を何度も見せられた。

曰く、合氣道的なそうでないような、ものらしい。

もつとも、そんなスキルがなくたって、恋歌さんなら口ハハ丁手ハ丁で暴漢なんかどうにかしてしまいそうだけど。

「あ、ここです、このアパート」

「依頼主のお名前は……、草薙美香さんね。お金にはならないけど、たまにはいいわ」

恋歌さんは愉快げに口元を釣り上げると、スタスターとアパートの

玄関へと向かっていく。

確かに今回の仕事はお金にならない。まあ、僕らが行っているこういう行為は、慈善事業みたいなもので、恋歌さんがどこぞの調査機関に報告している超常現象レポートの対価こそが、僕らの飯の種なのだ。

「なんていうか、いよいよもって、なんでも屋が板についてきたみたいですね」

今回にいたつては、超常現象すら関係ないわけで。

まあ、僕としては単位の……行く行くは卒業のかかつた大事な交換条件だつたから、仕方がない、となんとか納得しておくことにした。恋歌さんも、大学ぐらいは卒業しうつて五月蠅いし。

「なるほど、これがアパート用の郵便受けね」

「それもあさられたりしているらしいですよ」

恋歌さんが部屋の番号を指で確認しながら、郵便受けの中を覗き込んだ。

僕もその後ろでこつそりと覗き込む。単調で派手な彩色が施された広告チラシが数枚、押し込まれていた。どこのアパートも同じようだ、僕も部屋に帰るといつもこんなのが待ち構えている。

「ピンクチラシ、見る?」

「なんですか……」

適当に選びとつた一枚のピンクチラシを手に取り、恋歌さんは僕の目の前でチラチラさせる。

それにどんな意味があったのか、考えるまでもない。こんなのはただのセクハラでしかないのだ。

一歌(4)

「あ、有理君」「んにちわー！ 美香、待つてたんだよー。」

「こんにちは、草薙さん」

アパートのチャイムをならすと、ぐるまに草薙さんが飛び出してきた。

「こんにちは、恋歌です」

「えつ……すいません、どなたですか？」

僕が事情を説明する暇もなく、恋歌さんがすっと間に入って血口紹介を始める。

「一応、有理君の上司にあたるものですね。なんでも、お困りのよう。是非当社がお助けしますよ」

普段自分たちのことを『会社』なんて思つてもいないくせに、白々しい台詞だった。

「ええっと……、そ、うなんですか？」

草薙さんは引きつった笑いを浮かべながら僕らを招き入れるようにドアを引いた。

「お邪魔します」

靴を脱ぎ、少しどぎマギしながら家へとあがる。

ほんのりと芳香剤の臭いが鼻孔をくすぐる。そんな感じに女子を感じながら、ゆっくりゆっくり足を進めた。

「有理君。じしたの、はやく」

さくわくと奥まで進んだ恋歌さんは案内されるままに座布団の上に腰掛け、差し出された麦茶をすすつてこる。やはり機嫌は未だ良くなつていないようだ。

「すいませんね。一人増えてしまつて」

「うん、いいの。まあ有理君も座つて」

あわてて用意したのか、新しい座布団と麦茶を持って草薙さんが僕の方を向いた。

恋歌さんの対面側に置かれた座布団の周りには、ぬいぐるみやら可愛い小物が転がっていて、そんなところで一々自分との違いを感じてしまう。

「えーっと、それじゃあその相談に乗ってくれるってことですよね」「ええ、私たちはそのためにはきましたから」

草薙さんも僕の傍に腰掛け、さつそく話を切り出した。

テスト対策の交換条件として要求された『依頼』。それは彼女に付きまとったストーカーの影を見極めること。

「そうですね、最初は郵便受けの中身が勝手に持ち出されたりとかです。マンションの入り口にあつたのが、勝手に? 自室の郵便受けに入れられてたり……」

学校に行く前に確認した封筒が、勝手に移動したりといった違和感が続いているようで、草薙さんは怯えたように話を続ける。

「気のせいだとは思つたんです。あたしも無意識にやつたのかなとか……。でも、例えば最近は部屋の中で妙な人影を考えたり、物が微妙に動いてたり……」

「その言い方からすると、やはり違和感があるという感じで、ストーカー本人を確認したわけではないのね?」

「そうですね。なので今回もそのストーカーの影がないかをきちんと調べてもらつて、いらないならいで安心したいなつてのが本音です」

恋歌さんは仕事モードに入ったのか、顎に手をあて考えこむような姿勢をとる。

「わかりました。それなればきちんと調査いたしますわ。あなたが安心できるように」

「はい、お願ひします」

突然現れた見知らぬ人物に最初は戸惑っていた草薙さんも、恋歌さんの気配に押されたのか、すっかりこちらのペースに巻き込まれている。

ある意味、何時もの僕らの仕事と変わらない雰囲気だった。

一歌（5）

「とは言つたものの、私たちは探偵じゃないから、ストーカーの考
える事なんてわからないわけよ」

「それじゃあどうすればいいんですか？」

草薙さんの部屋を調査の名目で一通り確認した後、外に出てきた
僕らはマンション外側の郵便受けを物色しつつ言葉を交わしていた。
「物が動いたり、なくなったり、ぶつちやけ殆どの場合が気のせい
ではあるのだけど。曰く、ポルターガイストやら妖精さんのイタズ
ラやらつてね……」

「でもストーカーですよ、ストーカー。さすがに勘違いはないんじ
やないんですかね？」

「まったく、有理君は乙女心がまるでわかつていいないわね」

恋歌さんは郵便受けから適当な郵便物を手に取り、何かを確認す
ると、取り出したケー・タイでどこかに電話をかけ始めた。

「あ、どーも、クロネコさん？　さつそくだけどちょっと調べても
らいたいことがあつて、なーに、簡単よ、簡単。多分あなたのネッ
トワークだけで終わる問題だから」

「ああ、クロネコさん相手か……と嘆息する。

クロネコさんというのは、変な名前の変人だ。ただおまけや趣味
程度に情報屋のような仕事をしている関係で、僕らも世話になるこ
とが多い。

「ええ、ええ、住所は……。私達の事務所からちょっと歩いた所ね。
えつ、直接会いに来ないのかですって？　いえいえ、そちらも忙し
いでしょ？し、今回の案件ぐらいメールで充分……わかりました、
わかりました行けばいいんでしょ」

あの恋歌さんが、若干焦つたように対処する。

そんな相手は僕の知る限りで一人だった。一人は僕らの社長さん
で、もう一人が情報屋のクロネコさんというわけだ。

「ふー、疲れた。有理君、クロネコさん。あなたに会いたがつて
みたいよ」

「それは勘弁願いたいものです。あの人苦手なんで」
もつとも、あの人を得意とする人なんていそうにもないけれど。
恋歌さんがこちらに詰め寄り、がちりと僕の肩をつかむ。まあ、
こんな事になるんじやないかと思つてたけど。

「お・ね・が・い・ね。コーリ君！」

「はつはつはつは、恋歌さん、顔が怖いですよ」

有無を言わせぬ、命令だった。

まあ今回の事件は僕が持ち込んだようなものだし、氣は進まない
が、仕方がない。草薙さんのアパートも、僕らの事務所やクロネコ
さんの根城と地味に近いというのもタイムリーだ。

帰りに、クロネコさんのトコに歩きで寄つて行こう……。どうせ、
恋歌さんは付いて来てくれないだろうけど。

「にしても、これはこれは、予想外に楽しめそうだわね。今回ばかり
は乙女の味方にはなれそうもないけれど」

恋歌さんがやりと笑い、楽しそうにスマートフォンを操作する。

「うん、目処もたつた、これで研究者としての活動ができそうで私
は満足よ」

そしてスタスタと早足で歩き出す。

よほど楽しい発見があつたのか、どう見ても『ただの』ストーカーに対応するテンションではない。僕らの研究対象はいわゆるオカルトなんて呼ばれるものだからして、今回もやはり平凡無事には終わつてくれそうもなかつた。

一歌(6)

「これはこれはこれは、有理君。首をながーくしてお待ちしていま
したよ」

えらいオーバーリアクションで、黒のコートをはためかせるスタ
イルのいい男が、出迎えるに現れた。

「どうも、お久しぶりです。クロネコさん……」

恋歌さんと別れ、一人いつも待ち合わせに使っている電柱の前。
ここから徒歩10分ぐらいの、僕らの事務所へ帰りたくて仕方がな
い。

「しばらく見ない間に、また成長されたようですね。男子三日会わ
ざれば刮目して見よ、なんちゃって」

そつと僕の頬を撫でながら、心底嬉しそうに笑う男は、長めの前
髪からのぞく切れ長の目をキラキラと輝かせている。いちいち、バ
ツ！ とか ドド！ なんて効果音が聞こえてきそうな機敏な動き
は、実際こんな普通の街路で見る限り、不自然でしかなかった。

近所に立ち並ぶ、一軒家やアパートの住民に見られてやしないか
と、自意識過剰に辺りを見回してしまつ。

「さて、いつものお約束。われわれ、悪の組織にいったいぜんたい
何の「」ようですかね？」

頭にかぶったシルクハットを右手で押さえながら、黒のスーツの
上から羽織ったコートが風もないのになびいている。曰く、これが
彼にとっての正装で、悪の組織としてのプライドなのだそうだ。

「悪の組織つて……これがですか？」

クロネコさんの足元に、どこからともなく野良猫たちが寄つてく
る。時間がたつといつもこうだ。さすがはクロネコ、と名乗るだけ
あって、猫には好かれているようだ。

「そちらの皆さんは私の同士ですよ。全国に広がるネットワークの
構成要員なのですから」

「ほんとに、古風なインターネットですよね」

クロネコさんの持つている情報網の詳細まではわからないが、どうやら彼は小動物に好かれているようで、動物たちの力を借りたネットワークを形成している。知りたい情報はどこからともなく、構成要員とやらが持つてくる。本当に便利な情報屋。

「恋歌さんから聞いている通りです。人助けのため、ご協力お願いします」

「はい、わかりましたよ。こうやつて直接会つていただけましたし、恋歌君のおかげですでに報酬も振り込まれております。と、いうわけではい、どうぞ」

「一トの下から、さつと取り出される一枚の茶封筒。それを受け取ると、開けて中身を確認したい気持ちを抑え、脇に抱えた。クロネコさんは、執事みたいにお辞儀しながら、こちらをニマニマと見つめている。

これ一枚渡すだけでいいのに、さつさと最初に出しゃがればよかつたんだよ、という気持ちが膨らんでいく。

「最近楽しいですか？」

「楽しいですよ」

「最近仕事は儲かっていますか？」

「ぼちぼちですね」

「ふふ、聞きましたよ。富城邸での活躍」

「それはどうも」

「どうぞ、存分に正義のために働いてください」

「そうさせて、いただきます」

最初っからすべて筒抜けだというのに、今更何を聞くつもりなんか……。受け取るものは受け取ったわけだし、さつさと帰らせてもらいたい。

「そういえば……最近人を殺しましたか？」

「……」

途端、鋭い視線が僕を睨む。クロネコさんは僕の中の奥の方を探

るよつにこちらを見ていた。

「冗談ですよ、冗談。相変わらず、恋歌君はあなたをきちんと教育されているようで、羨ましいかぎりです」

「なにがですか、なにが」

まったく……。

この人、ほんと何考えているかわかんないな。

一歌(7)

「うはー。いやーひと仕事終えると気持ちがいいわあ

草薙さんから依頼を受けた次の日、早朝から恋歌さんは変にハイテンションだった。

昨日クロネコさんの相手をしたせいで、なんとなく精神的に披露した僕にその元気をわけてほしいもんだ。おかげで、昨日は事務所に帰ってきてから爆睡してしまった。

「コーヒーは自分で入れてくださいね。好みもありますし」

「うー、了解」

仕事熱心とは到底呼べないような先輩ながら、これほど働いたといつのは、趣味に関しての並々ならぬ情熱が發揮されたからだろう。こういうのも、趣味を仕事にしていくとかいうやつかもしだい。もしくは自称研究者の探究心というやつだらうか。

事務所のキッチンでノホホンと朝食を作っていた僕は、追加で恋歌さんの分の卵を手に取る。

「オムレツでいいですよね?」

「お願い、いつも通り、いや、いつも以上にふわふわのじゅくじゅくで」

「シャツヒ、ジャージとこうラフな格好。

襟をパタパタさせながら、ぐつたりと食卓の椅子に座る。ちらちらと何か柔らかくて幸せがつまつてそうなものが見える。

胸とか、そういうの気にしてほしい……。もちろん、見たくないわけじゃないけど。

「結局、徹夜ですか?」

キッチンの作業スペースに向き直り、それなりに集中。

フライパンの熱に細心の注意をはらいながら、といった卵を投入する。

「やうよやうよ、クロネコさん情報がビンゴでさー、つこつこし

なくていいのに報告書までつくれやつたわよー」

卵が半熟で仕上がるぎりぎりのタイミングを見計らい、フライパンの縁でオムレツの形を整えていく。

「つていうことは、やっぱり超常現象がらみなんですか？」
「たしかにモノが無くなったり、動いたりつてのはさー、超常現象にはありがちだよ。だけど、それと今回のが繋がつてるのはどうなのかなー」

「マニマと恋歌さんが笑つていい。

ああこれは僕をいじめている時の顔だと理解した。理解した時点で、今回の事件にオカルト的な要素が含まれてるのは明白だった。

「どうぞ、恋歌さん」

「ありがとう、やっぱ徹夜明けは熱々のコーヒーとソレにかぎるわねー」

自分で入れたらしにブラックコーヒーを飲む」と、恋歌さんの表情が微妙に覚醒していく。……ような表情。

「コーヒーってそんなにいいのですか？」

「そうねー、ブラックの美味しいのわからない有理君に教えてあげると……。」れがあると皿が覚めるし、気が引き締まるのよね、なんとなく…」

「なんとなく、ですか……」

なら、僕は甘々のミルクで砂糖なコーヒーで充分です。

「さて、朝御飯終わつたら行きましょうか、我社は迅速解決がモットーですから」

「そんなモットー初めて聞きましたよ」

「なんだかいつもよりも、恋歌さんは今回の案件に対するモチベーションが高い気がする。

よっぽど草薙さんを助けたいと思つてくれているんだろうか。
「結局僕はクロネコさんのところにおつかいに行つただけなの、もう解決ですか」

「いやー、私もびつくり。こんなスムーズに終わるなんて……。気

分がノッちゃって、報告用の資料も一晩で出来ちゃったし
これが恋歌さんの本気というやつかもしれない。基本、やればや
るほどできる人だから……。

「あ、やっぱりちょっと待って、このオムレツにつもより美味しい
から、いつもより時間をかけて味わうわ」

「それはどうも、是非ゆっくり味わってください」

褒めてくれたのは単純に嬉しかった。

恋歌さんは、オムレツを一口食べ、なにやら頷いた後に、ちまち
まコーヒーを飲むという作業を繰り返している。どうやら、出発ま
ではもう少しあかるらしい。

一歌(8)

「こんなにちは、草薙さん」

「ど、どいつも……」

引きつった顔で僕らの招き入れる草薙さん。

そんな彼女なんかお構いなく、音符マークがついた満面の笑顔でズカズカと上がりこむ恋歌さん。

二人の両極端な反応に、僕まで表情が引きつってくる。

「すいませんね、朝から。お昼ごはんの時間までは帰りますのでは、はあ……」

「急にごめんね、ほんとに。でも、草薙さんの身に何かあってからだと遅いしさ」

「うん、有理くん！ ありがとうね、心配してくれて」

草薙さんは元気を取り戻したようで、昨日と同じようにビギングまで僕らを案内した。

「で、どうでしたか？」

座布団の上に腰掛けると、いかにも心細い表情で草薙さんが切り出す。ストーカーがいるかもしれない、といつのは女の子にとつてかなりのストレスなんだろう。

「依頼の方、ストーカーの有無の確認でしたので、結果から申しますと……そういう人はいませんでしたね」

恋歌さんがキリっとした表情で仕事モードに入る。

けれど、僕は見てしまった。一瞬、草薙さんの方を見て、二ンマリと意地悪な笑みを浮かべた恋歌さんの姿を……。あれは意地悪をしている時の顔だった。

「ええー、こちら調査内容の報告書でござります」

恋歌さんは、胸ポケットにかけてあった伊達メガネをかけると、封筒に入れられていた10枚程度のA4用紙を取り出した。

「恐らく、草薙さんが経験された不思議現象もイタズラあるいは、

氣のせいだと考えられます。付近の住民などにも聞いたところ、最近その手のイタズラも増えているようですが……詳しくは報告書の4ページをご覧ください」

僕のことは置いてけぼりで、どんどん説明が進んでいく。
今回ほどなど調査に関わっていない僕の出番はありません。
「郵便受けにイタズラされてたのはあたしだけじゃなかつたんですね」

「ええ、まあどこにでもある悪い子供のイタズラの一種でしょうね。他の住民の方も少なからず被害をうけているようですが……。話を伺つた所、大家さんが今後対抗策を行使してくださるみたいですよ」

草薙さんの表情が安心したように溶けていく。

よかつた、よかつた、やっぱり女性はそういう顔をしているのが一番だ。

「じゃあ室内の異変とかは……」

「そちらは8ページ辺りを『ご覧ください』出来合いのものですが、簡単に学術的な意味での、妖精論やポルター・ガイスト現象の情報を載せさせていただきました。まあ、一言でいって『氣のせいだつた』と思つてください結構ですよ。この部屋に生身の人間が荒らしにやつてきたなんてことはありませんから」

「冗談交じりに恋歌さんが笑う。

その様子に安心したのか、草薙さんはほつと一息つくと満面の笑顔で顔をあげた。

「ありがとうございます。ほんとに……ありがとうございます、有理君！」

「えーっと、僕は特になにも」

今回ばかりは本気で何もしていないのだから、やつとしか言えなかつた。

しかし状況からいつて引っかかることは多い。そもそも、こんな普通のストーカー事件に恋歌さんが報告書なんて大層なものをこさえれるはずがないのだ。てっきり今回もオカルトな現象が絡んでいると予想していたし、安心していいなんて言葉、信じられるはずがな

い。

本当に大丈夫なんですね……、と恋歌さんの方をジト目で睨む。返ってきたのは、満面の意地悪顔だった。

一歌(∞)(後書き)

毎週土曜日には更新する予定していたのですが、ズレこみ……。
すいません。

次回から解決とこつか解説編です。本日中にもう一話更新予定です。

一歌(9)

「ぱいぱいコーリ君。ほんとにあるがとづ。また連絡するね
「僕は何もしてないよ……。それじゃあ、おじやましました」

本当に今回は何もしてない。それがとても気持ちが悪い。

「『依頼ありがとうございました。また何か御座いましたら、お気軽
に、いつでもどうぞ。それでは、草薙さん、お・き・を・つ・け・
て。特に部屋の窓際とか……ね」

恋歌さんは去り際に、そんなことを言いながら、ふつと笑つてい
た。

草薙さんに音符マークのつきそうな声援で送り出された僕らはと
ぼとぼと帰路についた。アパートの階段を、妙に機嫌の良い恋歌さ
んと並んで下りていく。

「ストーカーはいなかつた。ならハッピーエンドですね」

「それで終わるとでも?」

待つていましたとばかりに恋歌さんが意地悪な笑みを浮かべた。
ほんとに、この人はこういう時が一番輝いている節がある。さらり
と長い黒髪をかき上げながら、恋歌さんが自分のコメカミの辺りを
指で差した。

「この伊達メガネ、実はただのメガネじゃないのよね」

「はい?」

「文字通りの意味。ただものではないものが、『見える』の
つい、ジト目になる。」

信じていいのか、疑つていいのか。あまりに胡散臭すぎる設定に
半信半疑ながら、一応それが本物として話を進めることにした。

「人間……はいないですか?」

「少なくとも私たちのような『生身の人間』を、『人間』と定義す
るんならね」

それは言葉遊びなんだろ?」

僕の目に、草薙さんの部屋には僕ら以外の知らない人は、誰も映らなかつたことには変わりはしない。

「ちなみにこの郵便受けが荒らされてたのは事実。恐らく誰かの『イタズラ』と判断されるようなことしか起こつていなかつたのも事実」

アパートの入り口に並ぶ郵便受け。

これが全部荒らされたのはどうしようとどうう。ターゲットが草薙さん一人なら、それは可笑しな話だ。可能性としてはイタズラと、何か得体の知れないもの、が今回の事件に同時に存在しているとか……。

「まったく、有理君は理屈で考えたがる。それは傲慢だよ、人の心なんてその節々で変わるんだから」

恋歌さんのヒントは相変わらずヒントにならなかつた。

「これ、クロネコさんに貰つた資料なんだけど、面白いことが書いてるよ」

渡された一枚のA4用紙に顔を近づける。

「成人男性の、交通事故死？　すぐそこの交差点ですね」

「そうそう、それが今回の事件の真相」

それが一体全体、何と関係があるといつのか、僕は思考停止状態に陥つて、ポカーンとアホのような顔をするしかなかつた。

「私が見たのも多分その人の残り香みたいなのかな。……なんでも、生前に同棲していた彼女の家が現在の草薙さんの家らしいわよ」

「それはなんというか、草薙さんも物騒な物件を押し付けられたもんですね」

「そう？　死んでも愛した人の元に戻ろうとするなんて、立派なもんよ。もつとも、辿り着くまでには色々郵便受けを漁つたりして調べたり、思い出したり、試行錯誤してたみたいだけど」

「それが、今回のストーカー騒ぎの真相なんですか？」

「少なくとも、生きた人間のストーカーなんてのはいないでしょ？　いるのは害のない立派な恋する男の子が一人だけ。窓際がお気に

入りで、生前はよくそこで彼女と談笑していたらしいわよ
いまいち、釈然としなかった。

けれど、恋歌さんが害がないというのだから、それは本当なのだ
ろう。さすがに、草薙さんに何かがあれば、僕らの仕事の信用に關
わる。

「妙な同棲生活ですね……」

そう言葉になると、少しだけ笑えてきた。
もつとも、人事だから笑えるだけで、僕個人としては絶対に願い
下げだった。

一歌（9）（後書き）

日曜日中？ と言い張れない微妙な時間に投下……。お待たせしました。

二歌目、ネタばらし。残りは軽いエピローグで終了の予定です。話の都合上、最後の方は一気に公開したくなりますねー。

一歌（学食）

「あ、草薙さん。おはよう!」

「ひつ! 『ごめん。じゃあね』

露骨に女の子に避けられるリアクションといつのは、思いの外心に深い傷を刻み付けるものだ。

「えー、なにかした……かな」

ついつい小さく呟き、愚痴をもらしてしまつ。

時刻は早朝。午後からのテストに向けて、今日も今日とて学食の窓側の席で、勉強に興じていた。そんな僕に気づいた草薙さんのリアクションが、アレだつた。

つい先日、土日の時間をつかつてストーカーの心配を解決してあげはづなのに……。好感度はあがつても、なにか彼女に嫌われるようなことをした覚えはない。おかげさまで哲学のテストは乗り越えられたけれど……。

とはいふものの、中間テストはもう少し続く。今週さえ乗り切ればという最後の踏ん張りどころだつた。もつとも、夏も本格的になつてくると今度は期末テストの心配をしないといけないわけだけど。ああ、富城さんの家にいつたりしたGW辺りのことが懐かしい。精神ダメージを一旦忘れ、再び勉強モードに入る。

「さて、さつさと中国語のお勉強に……」

「やつほー、有理君。勉強進んでる?」

「れ、恋歌さん! ?」

学食に突然現れた意外な人物。

あきらかに、学生の集団に馴染まない雰囲気をまとつた大人な女性は、健全な男子生徒たちの視線を集めていた。夏っぽいキャミソールやひざ丈のジーンズは大学生っぽいラフさだつたけれど、それだけでは恋歌さんのもつ大人っぽさは隠し切れなかつたようだ。

「どじどじどじ、どうしているんですか?」

「いや、なんか大変みたいだから、応援しにきただけだけど」

シレッと言いながら、恋歌さんは当たり前のようになり、僕の横の席に腰掛ける。寂れた、油臭い学食に不釣合いな光景だつた。

「……疲れで昨日の夜から爆睡してたじやないですか」

「いや、なんか目覚めがよくてねー。はつはつはつは」

草薙さんの事件の件で疲れが溜まつていた恋歌さんは、昨日は小学生みたいな時間に就寝して、僕が大学に出掛ける時も、布団を抱きしめて眠りこけていたのだった。

「もういいですよー。そういえば、さつき草薙さんに会いましたよ。露骨に避けられました……。ひどいと思いません?」

「はつはーん。にやにや」

恋歌さんはそんな僕の愚痴を聞くと、抑えきれないみたいにニヤニヤと頬を緩め始めた。

「まあ、そのね。彼女の身に何かあってからだと遅いから、実は報告書の後ろのほうにこそっとね、注意書きというか蛇足の説明というか、例の同性カップルの片割れが交通事故で亡くなつたつて話を付け加えてて……」

「なるほど、気づいてしまつたと。窓際にこ注意なんて、忠告までしてましたもんね」

「まあ一般的にいって、害はないとはい、あんな場所さつさと引つ越すにかぎるでしょうね。ふつふ、愛し合つカップルの思い出の部屋に、他の女が居座るのも変な話しだし」

死んだ後の人、幽霊のような存在の肩をもつ恋歌さん。やつぱりこの人は根本的にロマンチストなようだ。

「でも幽霊つてたつて、モノを少し動かしたりなんて物理干渉しかできないんですね。あのレベルだと……精々、アパート入り口の郵便受けに入つてた郵便物を、自室に持ち帰るぐらいしか」

「それでも十分にすごいのだけれどね。やはり習慣化していた行動というのは、物理現象化しやすいみたいね。おかげでお上方に良い報告書が提出できそうだわ」

「にしたつて、そんなの気のせいレベルですよね。よく気づきまし
たね、ストーカーがいるかもしないなんて」

どうしても、その理由がわからない。

おそらく、草薙さんの身の回りで起こったのは、郵便物が移動していたとか、部屋の物が勝手に整理されていたとかその程度のはずで、そこからストーカーに結びつけるなんて、いやせか自意識過剰だと思えてしまう。

「有理君はわかつてないねー」

「なにがですか？」

こういう時の恋歌さんは大体僕をいじめてくる。

一ノ二三、御内閣、内閣官房、内閣府

「女の子はそういう意味では、見えないもの、聞こえないものを感

ニヤニヤ笑ふ。」
（『源氏物語』卷之三）

それは要するに靈感が強いといふのですか?」

恋する乙女は、好きな人に心配してほし……なんて恋する乙女はみな、悲劇のヒロインなのかもねー。ま、今回のはドンピシャ、事前に手を打ててよかつた、よかつた。二つの意味で恋歌さんは意味深なことを言うと、一人で満足したように、さてつと切り替え、ずいっとうちらに寄つて僕のテキストを覗き込んできた。

「あー、中国語ね。書かれていた」とあるわ、これくらいなら教えてあげれるかな」「

「是非、お願ひ申し上げます」

「いいけど、交換条件。また今度、私のお願ひなんでも聞いてもら

ニラシニ 気持の聲ニ 指揮モニテ 欲ビテの圖 ハシスノダ

۱۶۹

その『お願い』とやらの重さといつが、なんかどんでもない」と頼まれそつだなー、なんて危機感もあつたけれど、どうせ僕は一つ

返事しかできない。それが好きな人からのお願いとあれば、尚更だ
つた。

一歌（学食）（後書き）

ええ、これにて一歌目、終了でござります。

今回はオカルト（心霊）現象が主なようにみえて、結局は恋愛が
らみだともいえるお話。

私は言葉を濁したがる典型的な日本人なため、抽象的な部分は察
していただければ幸いです。

恋歌さんが妙にやる気だった理由とか、草薙さんが有理君に依頼
した理由とか、とか……。まあ有理君はただの唐変木なわけですが
(笑)

次回、三歌目はオカルト（超能力）編です。有理君やら恋歌さん
の変な体質をちょっとと説明していけるかと思います。多分、バト
ルもあるよ(笑)

では今回はこの辺りで、ではでは、また次回。

よろしければお気軽にご意見、ご感想いただければと思います。
コメントには(w eb拍手含め)返事させていただきます。

拍手の方、ありがとうございます。簡単なお礼掛け合いもござい
ますので、未見の方はよろしければどうぞ。

みなさまの応援が一番の創作の活力なのでござります。

三歌（1）

異能力なんてとんでもない、ただの病氣よ、びょーキ。

というのが、恋歌さんの主張だった。

「……」

「そんな目で見るな、照れる」

20代後半ぐらいの、爽やかな男性が僕の視線に照れていた。
場所は街中、久々に大学帰りに出勤する僕が、原付を止めて立ち寄ったコンビニで、適当なお菓子をチョイスし終えて店から出てきたその時。街道のベンチに座り込む男と目があつた。
ジト目になりながら、彼を見る。

それはその人がイケメンだつたからとか、微妙にセンスのずれた珍妙な私服姿だつたからとか、そういうわけじゃない。

「どうした、俺の方をそんなに見つめて……。嬉しいじゃないか」
キモい。

そこはかとなく、キモい。

肌蹴た柄シャツ。ダメージつき過ぎで露出の多くなつた、ジーンズ。

色々と余分な属性がつきまくつている人だけ、見つけてしまつたからには仕方がないと、嘆息する。

「あなた、人を殺したことがありますね？」
「……」

今度は男の人が黙る番だつた。

「まさかとは思つたが、ばれるとはね。そういう君も、似たようなもんみたいじゃないか」

「それはそうかもしません。けど、なんだか一緒にされるのは気にならない気がします」

久しぶりの、濃度の高い異常者。そんな空氣が彼にはある。僕や

恋歌さんと似た、一種の病人のような、違うよくな……。

雰囲気には似たようなものを感じてはいるが、根本的な部分は人それぞれ、事情も、現れ方も、違うというのが、オカルト現象の怖いところだ。

「何かお困りみたいですね？」

「あ、わかる。実は厄介ごとに巻き込まれててさー」

いたつて深刻ではなさそうに、彼はへラへラと笑いながらそんなことを言う。

着ているシャツはしわくちゃで、かえり血こそないが、うつすらとした硝煙の臭いや、裏路地のゴミ溜めみたいな臭いが香水の奥にひつそりと残つてゐる。服装のセンスだけじゃなく、まつとうな感じではない、直感的な感想を抱く。

「ついて来て下さい。事と次第によつては力になれるかもしれません。ま、お金とりますけど」

「お、ほんとに……。いやーこの辺りにその手の仕事してる輩がいるってんで探してたんだよね。君らも同業？ だつたらついでに紹介してくれない。なんでも凄腕の便利屋がいるとかつて……」

残念。

きっとそれは、僕らのことです。恋歌さん的にいつならば、オカルト現象専門の便利やではなく、ただの人間研究が趣味のモノ好き、つてところだけど。

恋歌さんへの言い訳を考えながら、僕は男を事務所に案内するため原付を押して歩き出した。

「有理君はもしかしたら凄腕の営業マンかもね。お金になるかはともかくとして」

嫌味というほどではなく、今回ばかりは褒められたようなニコアソスだったのは、偏に依頼主からお金の臭いを感じ取ることができたからだろう。

「いやー、なかなか古風な事務所つすね。その奥にこんな綺麗なお姉さんが鎮座してるとくりや、流行らないはずはないですね」

「どうも、お褒めにあずかり光栄ですわ」

恋歌さんはしつと流しながら、事務所の応接室的役割を果すソファを置かれた一角で、例の男と対面する。

そんな恋歌さんの隣で僕も一応男が変なことしゃしないかと、見守つていたりした。

「で、さつそく本題なのだけど……」

「俺は工藤勇太。まあ殺し屋みたいなことをしていた」

突然の工藤の告白に、恋歌さんは顔色一つ変えずに話を続ける。

「ただの殺し屋ではないみたいだけど？ 持つてのかしら、いわゆる『異能』と呼ばれるのを？」

こんなひょろりとした今時の若者の平均みたいな体型の人人が殺し屋というのだから、それはただの殺し屋ではない。

銃器や格闘技や隠密行動で、敵を追い込むのが本物の仕事。僕らみたいな異質な人間は、相手を油断させるほど、世間と同じ殻をかぶれるほど、優秀な殺し屋として行動できる。

なにせ、相手の経験則や戦闘経験は役に立たず、思いもしない攻撃方法で、人を殺せるのが異能というものだから。

「まあ、それはおいおい、な。さすがにあんたらでも俺のトップシーケレットは話せないぜ」

「確かにそうでしょうね」

恋歌さんはくすりと笑い、話を続ける。

「（）はなんの組織なんだ？ 超常現象研究所、と気持ち程度に立て札がされていた記憶はあるが」

「建前上は調査機関よ。いわゆる中立、私達の元締めもあなたのいたところも多少のつながりはあるでしょうね」

「おうおう、そりやあ話が早いこいつ」

工藤は楽しそうに口元を緩めながら、膝を叩いて喜びを表現する。僕らはあくまで調査機関で、あくまで上に報告するのも調査だけで、結果得られる調査報酬と調査結果で運営されている、ただの便利屋。

なのに、今回は自称殺し屋の相手をしないといけないのだから、難儀なものだ。

「まあ依頼つてのは簡単なことで、俺が元いた組織から匿つてほしいってだけだ。大丈夫、結構汚いこともする組織だから、君らの良心は傷つかないだろ？ ちなみに、報酬はそれなりに用意できると思う。殺し屋つてのは手取りがいいからな」

それはつまり、この優男も『汚いこと』をしてきたということだった。

けれど、それを許してしまつような雰囲気が目の前の男にはあった。何故かはわからないが……。

「あ、タバコいいかな」

「どうぞ。有理君に怒られない程度になら」

「おつと、そいつは難しそうだ。残念だが、今はやめとくぜ」

工藤が笑いながら、こちらにウインクを飛ばしてくる。

最初に抱いた印象通り、こいつは油断ならない変な奴だ。それが表情に出ていたのか、僕は彼を睨みつけていたようだつた。

「さて、今回ばかりはさすがに社長に連絡つけないといけないから」

恋歌さんは自称雇われ社員だった。僕はその社長さんを見たことがないが、形式上僕の上司にもある、この場所で一番偉い人。といつても、なにやら世界中を飛び回つてゐるような忙しい人みたいなので、僕たちの仕事に関わつてくることは今までほとんどなかつた。

「しかも、都合よく今、一時的に日本に滞在してゐるよねー、これが

工藤の依頼内容を聞き終え、束の間の小休憩。

お客様である工藤は応接室のソファに残して、僕らは生活スペースの方でまつたりしていた。あんなチャラい男は適当に扱つて良いだろう。依頼人だけど。

「今回の依頼つて相当やばいんですか？」

「……まあある意味最強の有理君がいるから、大丈夫つちや大丈夫だけど。もしかすると荒事になるかもね」

それは勘弁願いたい。

「オカルト分野に精通した戦闘組織だもんねー。しかもそこから逃げようだなんて、命がいくらあつても足りそうもないわ」

「異能力、ですか？」

「そんなもの、戦闘利用して何になるつていうのかしら。ほんとにクソ喰らえつてところね」

超常現象的変化の、戦闘利用。そんなのは恋歌さんの、僕らの考え方とは真逆の思想だつた。超常現象なんてのは、ただの人間が、ただの悩みで発現する病気のようなもので、それはごくごく普通の誰にでも起こる事象なのだ。

決して僕らは特別ではない。

特別だと思つて、力を振るつてはいけない。
ましてや、人を殺すなんていうのは……。

否定はできない、生きるために強いられる人もいるし、異能なんてハンデを背負わされれば、日常世界で生きて行くのは辛くなる。誰もかれもが、僕や霞美さんのような恵まれた人間ではないのだ。この先、工藤のように割り切った利用されているだけの人間ならまだいいが、エムむき出しの人間に出会つた時、僕はどこまで耐えれるだろうか。

「ダイジョブ、ダイジョブ。有理くんはそんなのじゃないから」
恋歌さんが優しく頭を撫でてくれる。

それだけで、沈んだ気持ちが軽くなる。

「いざつて時は守らせてもらいますよ、恋歌さん」

「頼りにしてるわよ。有理君！」

ぽんつと額に軽い「コピ」ンを飛ばされた。

恋歌さんも単体で十分強いから、僕が守らなくとも大丈夫だろうけど。そこはまあ、男の意地といつやつだ。吸血鬼特有の弱点も恋歌さんには有ることだし……。

「あー暑い、暑い。毎日こいつ暑いとやる気も出ないわよね。太陽が憎らしい」

窓から入り込む太陽の光に、目を細める自称吸血鬼。

苦手、ではあるらしい。日焼け止めも欠かせないらしい。
綺麗な色白の肌を守つていただくのは大いに結構だが、吸血鬼としてそれでいいのかとは、たまに言いたくなる。

「危険がある分、たんまりと報酬はいただいちゃいましょう。それでエアコンやら扇風機新調するのもいいわね。ほら、あれほしい。羽のない扇風機」

知的好奇心よりも、守銭奴としての顔が覗く恋歌さんの横顔はちよっぴりいつもより悪そつだつた。

三歌（4）

「うわ、カプチーノじゃねえか、これ。渋い趣味してんなー」

「くー、わかる、わかる！ いいわよねこの車！ 軽くて小さいのにすっこいのよー。しかも藍色が夜の闇に溶け込むさまといつたら……」

恋歌さんと工藤がガレージ付近で盛り上がっていた。

社長に会いに行くため早速車での移動が必要だった。日が暮れ始めて、気温が下がってきたのはいいのだが、なんだか一人が勝手に盛り上がっているのが気に入らない。

「有理君は車に全然興味ないしさ……。カプチーノなんて、ただのコーヒーの飲み方だとしか理解してないのよね」

「はつはつは、そりゃあいただけないな少年。ま、そんな無垢な所も魅力だが」

二人はなにやら、カプチーノがどうのこうのと騒いでいる。僕には意味がわからないが、馬鹿にされたことだけはわかった。

「あー、てかさー。恋歌さん？ カプチーノってことは二人乗りだよね、これ」

「そりゃ そうだけど」

「それってさ、あそこの少年がはぶられるってこと？」

「あなたは一応依頼主ですから、私が送つて行くつもりですが」

工藤がこちらをすまなさそうに見ている。

話をなんとなーく理解してきた。要するに今我が社にある車は一人乗りなわけで、今から移動するのは三人。なら単純な引き算で誰か一人が別の手段で移動しなければならない。

「有理君。確か今日原付だつたわよね」

「そう……ですけど」

わかっている。一応工藤は依頼主なわけで、しかも僕は今日原付でここまで来てしまった。

どうするべきかはわかりきっている。けれど、なんとなく気に食わない。きっとそれは、僕がこの工藤つて男を警戒しているからだろい。

もちろん、独占欲や嫉妬とかもあるかも知れないけど。

「じゃあ、悪いけど、原付でお願いねー。私達先に行つてるから」「了解しました。おまかせください。これでも大学には原付で通つてるんです」

もつとも、その大学への通学は週1～3という残念な数字を残していた。

「悪いな、少年。でも安心しろ、俺は……俺はな……」

恋歌さんに催促され、工藤が無理やり助手席に座られた。

工藤は車のドアが閉まる間際に僕に何か伝えようとしたみたいだけど、すべてを聞き取ることはできなかつた。

「じゃ、有理君また後で！　だいたい、この車についてくればいいからー。一度だけ行つたことのある場所だから大丈夫だと思うけど、わからんなくなつたら電話してねー」

一人残される僕は、原付のエンジンを、虚しい気持ちを振り払うようにキックで、スタートさせたのだった。

三歌（4）（後書き）

一応イメージとしてカプチーノという実在の車を持ってきます。
唐突に思い出したせいで、将来的に乗つてみたくなるといつ。

30分ほどで着いた、大通りの脇道。

ビルの地下駐車場へ下りて、原付を止める。ヘルメットを脱いで周りを確認すると、社長がいる一階へと続く階段の傍で、恋歌さんが妙に疲れた表情をしてうなだれていた。

「恋歌さん。なんでそんなにげつそりした顔してるんですか」

「いやね、こいつが逃げ出した理由を詳しく聞いてたんだけど……」

基本的に（お金をおとしてくれる）依頼人には優しく、丁寧に接する恋歌さんにしてはあるまじき、こいつ呼ばわり。

工藤への態度があからさまに嫌悪感丸出しのものに変わっていた。「否定はしたくはないの。ええ、でもなんていうか生理的に無理。妙に生々しかったし」

「どうこいつですか？」

話が見えず、睨むように工藤の方を向く。

「ああ、俺ホモなんだよ。ゲイでも可」

きつとこの時、僕はぽかーっとあほみみたいに口を開けていたのだった。

「じゃ、じゃあ、そ、その、僕のこと魅力的だとか言つてたのって……」

「うん、そのままの意味だ」

そして、同時に身の危険を感じる。

冷や汗がつーっと首筋を伝い、反射的にぶるつと身体を揺らした。そんな人もいる、と頭ではわかっているけれど、いざこれほど大っぴらな人間に出会うと中々インパクトがあるもんだ。

「有理君。気をつけて、ほんとに気をつけてね。特に背後とかお尻とかお尻とか」

「いや、それはさすがに……」

恋歌さんが半ば本気でそんなことを言つので、僕まで心配になつ

てくる。

「とつとと行かないのか？　いやすまんな。俺も命を狙われてる身なんで」

お前が言つのか、といつ感じだつたが、工藤の進言はもつともなことだつたので、恋歌さんとアイコンタクトで慰めあい、社長のもとに向かうため階段を上り始める。

コンクリートがむき出しの無骨な雑居ビル。

足音が無機質な響きを鳴らし、一定のリズムで室内へと反響する。「クロネコさんの次に、会いたくない相手つてところよね……」「僕なんて、会うの3度目ぐらいなんですよ……」

恋歌さんですら、焦った表情をしている。

当然、付き合いの短い僕の方が、精神的な準備は足りていないけで、足がすくみそうになるのを必死で抑え、階段を上り続ける。「社長に会つだけだつてのに、随分大層なんだな」

唯一、状況が飲み込めていない工藤だけは、脳天気な顔で、僕の背後を嬉しそうに歩いていた。

地下階段から上つた先、徐々に社長が居るだらう部屋の、豪華な装飾がほどこされた場違いな扉が見えてくる。一階には他のテナントが入つておらず、パツと見た感じだと他の階の企業も訳ありな臭いが香ばしい。

「つと、確かにこりやあビビるわな。大層お強い御仁がお待ちのようだ」

さすがといつとこるか、自称殺し屋だつた工藤も社長の威圧感に気づいたようだ。もつともある人は、基本的に自分に厳しく身内に鬼畜で、他人（特にか弱い乙女とか）にめっぽう甘い、という感じだからして、工藤へのプレッシャーはたいしたものではないだらう。僕だつて、特にとつて食われるわけではないと思つ。

まあ、まともに闘つて勝てるはずもないけど。

「さて、それじゃあ……行くわよ！」

緊張しているのか、声を震わせながら、恋歌さんがドアの取つ手

を掴む。額に汗を浮かべ、緊張と、嬉しさの同居したような、なんとも言えない高揚した表情が、なんだか色っぽい。

社長は恋歌さんにとって、目標で憧れで恩人みたいな人なので、そうなるのも仕方がない。もつとも、相手が相手、憧れも強すぎれば、自身のコンプレックスを浮き彫りにされているのと同じだ。

「あら、こんにちわ。待つてたわよ。恋歌、それと……有理君」

開口一番、僕が名指しで出迎えられた。それだけで、危機感が加速する。

一階のほとんどを占拠する社長の事務所。奥の窓際に位置する一対のオフィス机と椅子、そして手前には余りきつたスペースに適当に置かれたドデカイソファ。窓際の椅子でくつろいでいた社長が、僕たちを迎えるように軽く手を振ってきた。

長すぎる髪の毛を無理やり結いつけたような綺麗な後ろ髪には、和風なかんざしまで刺さっている。それがまた似あつてしまつのがこの人のコワイところだ。一見して年齢不詳、恋歌さんも美人だが、この人は美しいというよりも造形が完璧だった。一つ一つが洗練され、研磨されつくし、一切の無駄がないような感覚。

それがなんだか、気に食わない。

「今日わ急ぎですまないわね。仕事の説明と行きましょうか。みんな、よろしくたのむわよ」

けれど、僕は恋歌さん以上に、この社長という人に逆らえるはずもなく、ただただいじめられるのだろう、ちょっと先の未来が容易に想像できてしまった。

三歌（6）

「こちら有理です。どうぞー」

「はい、大丈夫ですわよ。有理君」

耳に装着されたヘッドセット。ハンズフリーで会話ができるように装備されたものだ。本職の仕事の人が付けているような、本格的なものではない。携帯電話に繋いだだけの簡易的な通信手段。場所は先程の地下駐車場、無造作に止められた大型車の影。折角上がったオフィスは早々に追い出されて、階段の下に逆戻りした形だ。

「なんといいますか、毎回ながら社長様の手腕にはびっくりさせられっぱなしです」

「それわそれわ、毎回ごめんなさいね。でも、これわ期待の裏返しなのだわよ」

奇妙なイントネーションが、耳によく馴染む。なんだかんだで、この人は恋歌さんに似ている部分も多くあって、嫌いなタイプではない。

単に、出会うたびに、酷い目に会わされるのと、威圧感というか王者の貫禄みたいなのが強すぎるのが、小市民な僕には辛いだけだ。「相手は殺し屋の組織。わたしの方から情報をリークすれば、あなたたちを追わせるなんていうのわ、朝飯前なのだわね」

「それを僕らみたいな素人だけで返り討ちにしようつてんだから、恐れ入ります」

「まあいざつて時わ、命ぐらいわ助けてあげるわよ」

もつとも恋歌さんだけでなく、社長が出張つてきている時点で、僕らに負けはない。こうやつて社長がブレイン役をやつているのは、僕らの力を試しているだけなのだろう。

「恋歌さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫もなにも、今回のはフォロー要員だからね、有理君こそ

大丈夫？ 久しぶりじゃないの、こんな実戦つて

「一旦社長との通話をきり、恋歌さんへと繋ぐ。

「なんとか頑張つてみます。自信、ないですけど」

掌を開き、ゆっくりとグーとぱーを繰り返す。

感覚は悪くない、だけど握力やら腕力はいつも通り、絶望的に足りてはいなかつた。

「まあ工藤も頑張つてくれるみたいだし、最悪あいつになすりつければいいんじやない？」

仮にも依頼主だというのに、ひどい扱いだつた。

「おーい、有理君。聞こえるか？」

「なんですか気持ち悪い」

そんな僕たちの会話に割り込む形で、工藤から通話が入つた。仕方なく恋歌さんとの会話を中断して、工藤の相手をする。

「おいおい、いくら俺がゲイだからって、その反応は傷つくなあいか

「いえ、ゲイとか関係なく、工藤さんはそこはかとなく気持ち悪いですから」

第一印象からして、そんなのだからタチが悪い。イケメンなのに、これほど人に嫌悪感を抱かせる容姿や雰囲気というのはどうなんだろつ。

「わかつてないねー。そやつて嫌がる相手を籠絡していくのが樂しいんじやないか」

ほんとに、どうしようもない人だつた。

「まあ冗談はこのぐらゐにして、どうやら戦闘要員？ つぽいのは俺と君だけみたいだから、軽い打ち合わせを、と思ってな」

「社長から必要最低限の説明しかされなかつたですからね」

すぐに追手が来るから準備しろと、今の配置に付かされるまでに5分もからなかつた。まあ、社長の作戦だから、僕らが普段どおりに動けば成功は容易いのだろう。

「有理君はどうなの？ だいぶ強かつたりするわけ？」

「戦闘力は成人男性より遙かに劣ります。能力、というのが使えれば……まあ大概のことはなんとかなる思いますよ」

「使えば、つてことは不安定だつたりするのか？」

「普段は封印されている、と思ってください」

恋歌さんのおかげで僕は普段、一般人として生活できている。けれど、今回は荒事になりそうだからと、吸血タイムはなし。もつとも吸血行動を封じられて、一番辛いのは恋歌さんのはずだけど、……なんとなく寂しく思つてる僕は随分と調教されてしまつたらしい。

「さて、楽しい楽しいお話の時間はここまでみたいだな。ま、俺にまかせる。良い男の前では張り切らないわけにはいかないからな」「気持ち悪いですが、戦力としては期待をさせていただきますね」さて、と気分を切り替える。

駐車場に入つてくる車の音が、工藤の携帯越しに聞こえてきた。ドキドキと高鳴る胸を抑え、気持ちを落ちつかせる。というのが、リラックスする方法だと思ったのだけど……。どうもそうはいかならしい。

僕は、というより人間というのは、異能の力なんてのを振るうのが、楽しくて、嬉しくて、待ち遠しくて、しうがないらしかった。

敵が銃を持つているというのは、ある意味想定内だつた。けれど、予想できていたからつて対処できるわけじゃない。

「激しい銃撃戦つぱいのが始まつてしまつたんですが……」

「あらあら、頑張らないといけないわね」

なのに、社長は余裕綽々な風に高見の見物という感じだ。車が地下駐車場に乗り入れてきてからの行動はさすがはプロ。車を盾に、入り口を塞ぎつつ、実行部隊が攻めてきた。

「有理くーん。こっちも援護してくれよ。さすがにこの数はきつい」黒塗りのワゴン車で現れた屈強な男が6人。銃を主体とした兵装、隊列での攻撃。

当然僕たちは防戦一方なわけで……。僕は囮役として入り口付近で戦っている工藤に近づくため、恋歌さんお気に入りの藍色スポーツカーを盾にするはめになつていた。

「つぐ、銃なんて生つちろいもん使つてんじやねえよ！」

工藤が叫ぶと、空中に赤い炎が輝き始める。高熱が帯のように広がつて、銃弾を防ぎきつているようだ。

「ベタな能力なんですね、工藤さんのつて」

「うるさい、俺は熱い男なんだよ」

工藤はおちやらけた雰囲気が消え、言葉使いも乱暴になつてている。「有理くーん、私の見たところ、敵は能力者が3人。残りが対能力者装備のプロつてところね。工藤みたいな能力頼みの奴らじやなくて、全員ちゃんと訓練を積んだプロみたい。物量と火力で制圧するつもりだつたんでしょうね」

「思つたより、異能者は少ないみたいで」

「その方が、チームとしては優秀なんですよ。所詮は異能なんてのは、異常だからこそ、副産物だから」

そういう相手の方がやつかいだつた。

異能バトルなんて、馬鹿馬鹿しいものを始めるつもりはないけれど、所詮戦闘力皆無の僕は、正攻法で勝てるわけがない。必然的に奇襲やら能力の隙をつくなり、一方的に攻撃できるチャンスが必要だった。

「私は念のため一階事務所側に移動するね。別働隊がいるみたいでさ」

「れ、恋歌さん？ 気をつけてくださいよ……」

車の陰から一步足を踏み出し、前へ出る。恋歌さんも心配だが、今は目の前の敵を倒しきるのが先決だ。

「あらあら、ごめんないね。別働隊がビル側に回つてると、わたしに誘導したつもりだつたのだけど、十分じゃなかつたみたい」「いざつて時は頼みましたよ」

社長からの着信に、そんな言葉を返す。

少なくとも命だけは、命ぐらいは守つてほしいものだ。

「喋つてる暇も、ないか」

舌を噛む、つてほど素早い動きをするつもりはない。だけど、避けなければ銃弾の餌食になつてしまつ。出来ないことは出来ない、けれど、やらなければ死んでしまう。

そういう危機感が大切だ。そういう危機感が、僕の奥底の何かを覚醒させてくれる。銃弾が顔の傍を通つて行くのが見えた。意識は結果へ、そして自分が行動するべき事だけを頭の中で一杯にさせる。避けなればならない、移動しなければならない、近づかなければならない。

相手は一人。工藤に一番近い位置にいる奴らだ。

「失礼、なんとか間に合つたよつです」

工藤が炎で牽制していた、映画に出てくるアメリカの特殊部隊みたいな男たちから、物騒な「こちやんこちやん」した銃を奪つてやつた。

突然現れた僕に面食らつてているのか、敵の反応が一瞬止まる。そこを見逃さないのは、さすが殺し屋つてところか。

「こいつら、俺のこと知つてるからつて、炎の対策しやがつて……。

「こんな攻撃しなきやならんとは、めんどくさい」

工藤の綺麗な回し蹴りが、巨体を浮かせる。

回転の遠心力をそのままに、殺傷力の高そうな拳が連續で、もう一人の男に叩き込まれた。二つの巨体が地面に転がる。銃撃戦の形を一瞬無くし、一対一の奇襲が通じる状況をつくればこんなものだろう。

「では僕はこのあたりで」

工藤の近くにあつた、株式会社うんたらとボディに書かれた軽自動車に隠れる。そして敵に利用されないよう遠くへと銃を放り投げた。遠距離攻撃のほとんど効かない工藤がいるおかげで、なんとかやつていけるが……。

「有理くん。今のがいった?」

ちよつとした手品みたいなものですよ。集団戦闘だと、あれぐら

「十分、十分、おかげで敵さん随分こちらを警戒してくれたみたい
だし」

車の陰から覗き込むと、勢いにノッた工藤は一瞬にかぎりに一人をのして、もう一人を追い詰めているところだった。

「銃弾曲げるのは、器用なもんだ。屈折？ 反射？ 念動力系か？ 俺の能力知ってるだろうに、もつとましな使い方しろよな、せつかくの能力なんだから」

僕には目視できなかつたが、立藤の周囲に展開された炎の壁の四方八方からじゅーつと、金属の焦げた煙があがつていった。

「工藤さん、強かつたんですね」
「じゅうじゅう、僕の出番はないようだ。ちょっと残念だけど、仕方がない。能力者がいても関係なし、工藤は相手の銃を熱でひしゃげると、ハイキックを頭に叩き込み、そのまま敵は地面に急降下。

「まあ俺は殺し屋だからさ。銃撃戦は得意じゃないけど、殺し合いは得意だぜ。蹴りや殴りも、能力の使い方次第で威力ぐらいはアツプロできるしな」

「むこじうだつてプロだらうに……。所謂パイロキネシス能力があるといつても、相手を圧倒できるのは、工藤自身の戦闘能力も十分高いからだろう。

応用、転用、異能といつのは奥が深い。使い手次第で、どんな形にも、どんな事にも利用出来る。

「さつて、後一人……だな。つつても、こうなるのを待つてたんだろ、なあ！」

ついには後一人。通話越しではない、直接地下に響くほどに声を荒らげて工藤が叫んでいた。

相手が弱すぎる、とは僕も思っていた。社長の手回しがあつたとしても、これほどすんなり行くのには違和感があった。

「工藤、よくもうちの部下をこんなにもやつてくれたな」

「手抜きしてたのはあんただろう？ それに、殺しちゃいねえよ

「ふん、『あいつ』のことは殺したのになあ！」

最後に残った男は、装備していたヘルメットを脱ぎ捨て、白髪頭をさらけ出した。悲しみや怒りや感情がグチャ混ぜになつたような奇妙な表情をした、中年の男。白髪頭ややつれた表情も相まって、随分老けたように見えるが、姿勢や雰囲気はまだまだ若々しく、戦士として現役だと教えてくれた。

「銃はいらん。どうせ、効かんしな。お前は直接俺の手で殺す……」

「あんたの能力は、聞いたことなかつたな。なんでも眠るように静かに人を殺すのが得意らしいが

「お前なんぞを楽に殺してやるほど、お人好しではない」

銃を投げ捨て、ボクサーのよつな構えで、工藤に対する中年の男。工藤のようなひょろひょろの身体ではなく、ガツチリとした鍛えこまれた姿からは、強敵の雰囲気がある。

「始まつた、わね」

「社長ですか……、これ知つてたんですか？」

「依頼人の抱える『問題』を解決する。恋歌風にいうのなら、研究調査する。つていうのがわたしたちの生業なのだわよ」

社長が電話越しに、くすりと笑う。

どうやらこの戦いの舞台は仕組まれたものらしかつた。僕は彼らの再開をお膳立てしてしまつたらしい。

「そんなことより、ドアの前の音を聞く限り、恋歌が苦戦してみたいだわよ。フォローに行つたほうが良いかもしないわね」「それを早く言つてください」…

車の陰から走りだす。タイミング良く、敵さんは銃を手放し、工藤と昔ながらのタイマンっぽいのをはつていた。

恋歌さんがいる一階事務所前の廊下へ向かいながら、一人の男を横目で見る。工藤が炎も出たずに、苦しげな表情で蹴りを繰り出しているのが確認できた。

その姿はどこか、死に急いでいるよつとも見えたのは……僕の気のせいだということに、しておいた。

三歌（7）（後書き）

戦闘シーン？ って描写が大変ですね。意味不明な言葉を書いていい
ないか、心配ですw おかげさまでめずらしく一話が3千文字近く
に……。

そろそろ三歌も終わりが近づいてまいりました。

「あらあら、急がないと恋歌が大声では言えない、所謂成人同人漫画のような事になつてしまふかもしれないわよ」

社長の、獨特のイントネーションがこの時ばかりはうざついたい。地下駐車場から、ビルの一階へと続くコンクリートの階段を、息をきらせて上つて行く。

「わたしわ思うのだわ。男の子が一番力を發揮できるのわ、案外こういう状況なのでわないとね」

足りない筋力や速度は、心臓を、身体の細胞を、全宇宙の時間を、すべて止めることで補つていく。いや、本当に止められたかなんて知る由もないけれど、僕ができるのは結果を導きだすまでの過程をすっ飛ばすだけなのだ。

何でもいいから、少しでも早く、恋歌さんの所に向かいたい。

もう一段上ろうと足を踏み出す。そして記憶が飛び、奇妙な感覚のまま、気づいた時には先程より一段上の段に足を降ろし終えた自分がいる。意識と結果のズレ。

目的を意識し、行動することによって得られるはずの結果。過程を飛ばし、そこにダイレクトに到達するような、奇妙な感覚だけを重ね続ける。

それはある意味、今やつたような、階段を一段飛ばしで駆け上がるような方法なのだろう。

「時間を止めている。というのわ、いささか早計なのかもしれないのだけれど、そう現すのがわかりやすいのだわね」

「おかげで、僕は二十歳も間近になつて、小学生並みの身体能力ですよ」

「噂に聞くところによると、あそこもつるつるなんだつたわよね？」

「うわあああああああああああああああ。こんな時に、凹む情報を

喋り出さないでくださいよ」

半ば、ヤケになりながら叫んでやつた。いつたい、どこのどんな噂を聞いたのか……とてつもなく不安になる。

大丈夫、最近は恋歌さんの吸血行為による、異能の一時的な封印のおかげで、成長というのが戻ってきた。

身長だって、徐々にだけ伸び始めている。ギリギリ150cmしかない僕の身体も、きっと気づけば160ぐらいにはなるはずだ。だから、なにも焦ることはない。

階段を上りきり、事務所前の廊下を見渡す。

二人、黒スーツの男が倒れているのを確認して、その奥で恋歌さんが、銃を持つ剃り込み頭の巨漢に、掴まれているのが……。

それを意識し、認識しきったとき、気づくと僕は、その男のことをぶん殴っていた。

もちろん、一発では足りない、僕程度の攻撃力じゃあ、一度や二度叩いただけでは足りないのだ。恋歌さんに教わった合気道や、太極拳の知識をフル動員しつつ、殴り、叩き、押す、という結果だけを残し、身体の急所とやらを執拗に狙い続けた。

やがて、男が倒れ伏すのを確認して、呼吸を再開。

新鮮な酸素が身体に循環し始め、徐々に感覚が元に戻つて行くのを感じた。

「あれま、戦つてる相手が突然倒れるなんてオカルトつてのは、中々奇妙なものね」

「だ、大丈夫ですか、れ、恋歌さん」

階段を全力疾走。その後能力を使って即戦闘開始。

ゼーはーぜーはー、と情けなく肩で息をするには十分すぎるほど

の運動だった。

「有理君の方がとても大丈夫には見えないけど……。とりあえずありがとう、おかげで怪我しなくてすんだわ」

銃で武装したそっち方面のプロに対し、1対3の戦闘をこなしてしまっただから、僕がいなくても、きっと恋歌さんは怪我なんて

しなかつたのだろう。

案外、僕が先程必死こいて倒した剃り込みの男は、恋歌さんが合氣道的に相手の力を利用して綺麗に投げ捨てる、一歩手前だつたのかもしれない。

けど、それでも真っ先に、恋歌さんことは僕が助けたいというのは、男として当然の、ある意味どうしようもない欲求だった。
「『』くろさまだわ。……『』につらわただのヤクザかなんかだわね。金で雇われた……囮？ 違うわね、邪魔されないようにアツチも手を打つてたつてところかしら。おかげで裏をかかれて地下以外の侵入経路からやられるとわ。してやられたのだわ」

ゆつくりと、事務所のドアが開き、社長が姿を現した。ぴっちりと着こなされた藍色のスーツ姿が眩しい。

社長は、廊下に転がる、怖い顔のお兄さんたちを物色し終えると、楽しそうに笑いながら、僕たちにアイコンタクトを飛ばす。あれは今から何か楽しいことがあるから、期待してなさいという顔だ。

「工藤の方も、終わつたようだし、そろそろ依頼完遂といきたいのだわね」

和風に結わえられた髪の毛に、深々と突き刺さつた一本のかんざし。先端に付けられた金色の装飾を揺らしながら、社長が優雅に歩き出す。

その姿を見て、僕はやつと事が終わったのだと安心するのだった。

社長、恋歌さん。

この一人の趣味趣向というのは、似ている。要するに彼女たちがもつとも楽しいと思うこと。それは人の中身を丸裸にして、手助けしたり、きつかけを与えてやつたり、分析してみたりする、正義のヒーロー？ みたいなことなのだ。

そのやり方や手口はあまり趣味の良いものとは言えそうもないけど。

「よつ、お疲れさん。皆無事だったみたいだな」

階段を降りたどり着いた地下駐車場の奥、『組織』とやらが置いて行つたワゴン車にもたれかかりながら、工藤がタバコをふかしていた。

「一番大変だったのはあなただったでしょうに。目的わ達成できたかしら」

「あんたの差し金だる……。つたぐ、ケッタイな舞台を揃えてくれたもんだ」

工藤が顎で指す先には、乗り込んできた組織の連中が簾巻きにされ、まとめられていた。けれど、僕の記憶が確かなら、一人足りない。

最後に僕が見た、工藤と一対一で戦つていた中年の男の姿がなかった。

「工藤さん。あの人は？」

「あいつか……。つたぐあいつめ、空気中の酸素をいじれる能力だつたか？ 僕の炎がまるで効かないでやんの」

「いやいや、戦いの結果は工藤さんが無事なのを見れば勝つたつてわかるけど、そうじやなくて」

「タイマンだったよ。男と男同士のな」

それだけ言うと、工藤は再びタバコに集中し始めた。先端の赤い

熱に心奪われたように、ゆっくりと確認しながら、そこだけを見つめ続ける。

「やつ、ですか」

「ここは素直に引き下がつておくれ」とした。

工藤の能力だ。もしかすると、灰になるまで相手を燃やすこともできるのかもしれない。それに、卑怯な方法を使えば、後日恋歌さんにも訊けば事の詳細はわかる。

でもまあ、こんな変態でおちゃらけた奴にも、知られたくないことぐらいいは、あるのだろう。

「それじゃあやつやと行くのだわ。せっかく追手を一時的に撃退したのだから、逃げるなら今、なのよ」

さあ行こう。僕たちは何も戦いたくて、戦ったわけではない。困っている人がいたから、その人を助けるために、戦つたのだ。なら、ここで焦燥感に身を任せている暇はない。

「そういえば、恋歌さんの姿が……」

駐車場出口付近のワゴン車から、振り向いて恋歌さんを探す。

「私の、私の車が……」

恋歌さんは愛車の変わり果てた姿に絶望し、涙目になりながらボンネットに頬ずりをしていた。そのボンネットには痛々しい無数の銃痕が残っている。

「うえええええん、私の、私の可愛いカブチーノが」「れ、恋歌さん。きっと、治りますよ、これぐらいい。たぶん、きっと、絶対」

思わず飛び出した変な日本語で、恋歌さんを慰める。言えない、言えやしない。交戦中、仕方なくこの車盾にしてましたなんて、とてもとも。

「しても、子供のように悲しみ、涙田になる恋歌さんは予想以上に、可愛かった。正直、恋歌さんには悪いが、もうしばらく眺めていたい欲望にかられる。

「ほらほら、その一人、わざと行くのだわ。恋歌もいつまでも

そんな軽自動車のことで悲しんでないで、わたしの愛車に乗るのだとわよ」

「おこおこ、今度はFしかよ……」

「藤はなにやら、ロータリーがギリの上りのと並ぶながら、助手席に乗り込んでいた。

駐車場の奥のほうにでもしまわれていたのか、完璧に無傷な白色の社長の車。恋歌さんの軽自動車と比べると、随分大きく、ずつしりとした安心感があった。

「恋歌もロータリーにしなさい。良い機会だし」

「なんで社長の車は無事なんですかー。どうしてですかー？」

伊達メガネを外し、とうとう泣き出しそうな恋歌さんに寄り添い、

背中をさすりながら、社長の車へと向かう。

よほどショックだったのだろう。「めんなさい、恋歌さん。

「さて、空港までフルスピードだわ。そこいらに転がってる侵入者の後始末を安心して、すでに手わ回しておいたのだわ」

僕らが後部座席に座ると、早速社長はアクセルを踏み、急発進。

恋歌さんよりも乱暴そうな運転に、僕はシートベルトをしっかりと装着するのだった。

三歌（9）（後書き）

予想以上に長くなつた今回の話。もうちょっとだけ続きます。
社長は思いつきで口調設定を変えましたが、良く味が出て、動かし
やすいです。

ではでは、何か御座いましたら、お気軽にweb拍手やらで私のや
る気支援、または技術向上のためにフルボッコにしてやってください。
読了ありがとうございました。

一番近い国際空港に着く頃には、すっかりと口が傾いていた。これでも移動時間はかなり短縮されたほうだ。社長の運転技術と車の性能によって……。やっぱ普通自動車ってすごいんだな、なんて車に詳しくない僕ですら思つてしまつた。

「それじゃあ、行つてくるぜ」

「うつすらとだけ残る夕日をバックに、さわやかな笑顔でこちらを向く工藤は、ムカツクほどに様になつてゐる。これがホモで変態だというのだから、もつたひない話だ。

「元氣で暮らしてくださいねー。色々大変だとは思いますが」

「ありがとうな。男と結婚できる国でやり直すつもりだから、よかつたらいつでも俺の所に嫁ぎにきてくれ

「やっぱり死んでください、お願ひします」

最後まで、おちゃらけた人だった。

「恋歌さん。社長さん。お世話になりました。もうちょっととまあ世話かけますが、宜しくお願ひします」

「あらあら、わたしたちは恋する乙女の味方なのだわ。気にするこないわよ」

「私は……十一分にお金がもられたので、問題ありません」

恋歌さんと社長にとつて、『恋する乙女』の定義には大変開きがあるよううだつた。

「じゃあな、世話になつた！ キチンと、決着もつけてさせてもらつたし、安心して第一の人生が歩めそつだぜ……」

「工藤！ 精々足搔いて、もがいて、苦しみ続けるのだわ。生きていれば、どうにだつてなるのだから」

そんな、社長の言葉に送り出されて、工藤が搭乗ゲートと歩き出した。キザつたらしく、額に指をあてカツコをつけていたのを伸ばして、挨拶を返していく。

最後まで一貫して、楽しいふざけた男を演じ続けてくれたのは、僕にとつてはとてもありがたかった。

「やっぱり、あれって演技なんですか？」

ゲートから離れながら、こつそりと恋歌さんに話しかけた。

「さあ、どうだかね。少なくとも工藤本人があの手の性格だったことは確かだよ。人を殺した後まで、そうだったかどうかはわからないけど」

工藤と何やら因縁がありそうだった、男の言葉が脳裏をよぎる。『あいつのことは殺したのにな』と……。仕事で殺しをやつていた工藤にとつては、人を殺すのは日常だ。咎められることはない。

ただ、もしも、私情で『殺し』をやつてしまつたのだとしたら……。

「さてさて、二人は喫茶店にでもよつてゆつくりしていくのだわ。なんなら近くのホテルに泊まつてもいいわよ。お金はお姉さんに任せるのでわ」

社長は豪快に笑いながら、お洒落ながま口財布から万札を三枚ほど取り出し、ヒラヒラさせ、こちらに押し付けてきた。言っちゃ悪いが、どことなく、田舎のおばあちゃんを連想させる姿だった。

「お駄賀よ。わたしは忙しいから、もう行くのだわ。工藤の後始末、クロネコさんにお願いしといてね。これ、資料」

嫌な名前があがつた。

渡された資料はずつしりと重い。おやじく、ネットやらデータベースに残つた工藤の痕跡の消去を、黒猫さんに依頼しに行くというお使いだつ。

それ以外にも、新しい国籍や身元の調達やら、工藤の資産の移動やら、色々あるだろうが、社長がすでに手を回しているのだろう。ほんとに、仕事の早い人だ。

「それと、あなたたちも、チマチマとやつてるのだわね。噂は聞いているわよ。異能というのも、大変なのだわね」

まるで人事のように言ひながら、社長は愛おしそうに、手のかか

る子供を見るように、じゅうじゅうを向いて嘆息した。そういうあの人だつて、聞くところによると、『血靈』なんてのを使うプロらしいのに。

『力』に振り回されている側と、『力』を振り回している側の違ひを見せつけられたようで、なんだか自分が情けない。しょせん僕の『異能』なんてのは、たしかに病気のようなものでしかないのだろつ。

「恋歌、有理君。二人とも達者でね」

お小遣いを渡され、ポツンと立ちすくむ僕たちを置いて社長がスタッフと去っていく。

「それと、有理君。手加減以外ができるように、リハビリしといた方がいいのだわ。これからも、恋歌の隣にいるつもりなら、トラブルなんて消し飛ばしてしまいなさい。死なない程度に、死なないために」

そして、去り際に、耳元でそつとそんなことを言われてしまった。何もかもお見通し、といつゝとらしい。

「有理君。どうしようか?」

恋歌さんが万札をひらひらさせながら、困った表情でじゅうじゅうを覗き込む。

「そうですね。ホテルも……悪くないと思いますよ?」

そんなことを言つてやつた。

今日は本当に疲れた、今から事務所に帰るのだって大変だろうし、ホテルに泊まるのだつて選択の一つだ。あ、そういうえば、僕の原付や恋歌さんの車も社長の事務所の地下に置きっぱなしだ。たぶん、手を回してはくれているだらうけど。恋歌さんの車……沿るといいけど。

「ゆ、有理君? ほ、ホテルに誘うつて、え、ええ?」

隣で目をぱちくりさせている恋歌さんは、耳まで真っ赤になりながら、混乱しているようだ。

相変わらず、変なところでうぶな人だつた。普段なら、これぐら

いで許してあげるべきなんだろうけど、今日の僕は疲れていぬし、頑張つたから、こ褒美だつてほしい気分だ。

「さ、行きましょう！ 恋歌さん」

「え、ええええええええええええ？」

きちゃんとした行き先は、まだ言わないでおいた。

後ろには、照れた顔を隠すように、下を向く恋歌さん。

慌てふためく恋歌さんの手を引っ張つて、歩き出す。

とりあえず、さつきちらつと見えた、美味しそうなパフュが出る喫茶店を田指して……。

三歌（10）（後書き）

なんとか三歌（10）にて、終わりました。

Hピローグの、三歌（喫茶店）にて、完全終了。次話の四歌に入ります。詳しいあとがきは土口にするとして、とりあえず、いただいたコメントへの返信を……。

07/24 16:50 いつもの大好き！

＜私も大好きです！（笑） 好きな設定、好きなキャラで小説が書けるのはやはり楽しいですね。趣味丸出しですが、そんな趣味で、皆さんに楽しんでいただけるのが一番の喜びです。

今後とも、web拍手でコメントなどいただいた際には、返信していきたいと思っています。コメント、感想、文句、批評などはメールでもかまいません アドレスはブログへ（http://mitukouu.exblog.jp/）

返信不要の場合、コメント引用に問題ある場合は、一言連絡いただければ対処いたします。

なんやかんや言つりますが、どうぞ皆様気軽に言葉をぶつけてやつてください。必死に捕球しますのでw

それではまた次回、お会いしましょう。

三歌（喫茶店）

「恋歌さん、おいしいですね。こここの抹茶プリンアラモード」「そうねー。おいしいですねー」

すっかり日も暮れた空港の喫茶店。

客はチラホラで、どちらかと言えば夕食を食べるために利用する人の姿が多い。寂れたアンティーク調の店内が心を落ち着かせる。

磨きこまれた机の上に、どんづと置かれたアラモード。抹茶アイスの苦味とプリンの甘みが溶け込んだそれは、まるで宝石のようだつた。通りかかった時に美味しそうだなとは思つたけど、まさかこれほどとは……。

「恋歌さん、機嫌悪いんですか？」

「べつにー、少し忙しかったんで疲れてるだけよ」あきらかに拗ねていた。仕事終わりの一杯にと、カップに口をつけ、恋歌さんがちびちびとカプチーノをすすっている。

「にしてもすごいかつたわね、有理君。おかげで私、助かつちやつた」

恋歌さんはふと顔をあげると、ニヤニヤと意地悪な表情を浮かべた。

なんだか、嫌な予感がする。

「いえいえ、僕は何時でも恋歌さんのナイトでいたいですか？」

「ふーん、そういうえば工藤のことだけど……」

僕が反撃にと放つたキザつたらしい台詞はスルーされ、社長から渡された分厚い資料で扇がれる。

「彼の経歴、知りたい？」

「知りたくないわけじゃないんですけど」

本当のことを言えば、工藤が追われる原因というのが気になつて、地下駐車場で、本気の表情で睨み合つ男の戦いと/orのを見

た時から。

「工藤勇太、18の時バイクで大事故を起こすが、奇跡的に生還する。その時に異能力を発症。暗部の組織に発見され、以後そこの殺し屋としての日々を過ごす」

「僕らの上司連中……機関のいけ好かない国家公務員さんたちよりも前に、悪い人に捕まってしまったことがありますか」

「そういうことね。燃え盛る事故現場から、やけど一つ無く生還するなんて、わっかりやすい発症のしかたよね」

命の危機から生還する。

「というのは、人間のどこかに欠陥を生じさせるには十分すぎる原因だ。生きるために、あるいは後遺症によって、人が本来持ちもない力を具現化させる。

「僕らが見つけきれてない人の中には、そうやって、暗部に引っこ抜かれる人もいるんですね？」

「それはそうね、それも隠し切れない一つの真実。力を持つものはそれを自由に振ることを望む。国やら機関に規制されるなんて、まっぴらなんでしょうね」

僕らの仕事は、そんな人たちを救う目的もある。

霞美さんのように早期発見、あわよくば治療が出来れば、過ぎた力や異常によつて、道を踏み外すことはなくなるはずだ。

「で、色々あって、その組織を逃げ出したわけ」

「その色々がとてもなく重要なんですけど」

僕が目を細め、見つめると、恋歌さんはニンマリと、アヒルみたいに唇を尖らせていた。

故意に僕の事をいじめているらしい。色々と溜まつていたんだ違う。社長という格上のいじめっ子がいる状況では、僕も恋歌さんも、ただのいじめられっ子にしかすぎなかつたから。

「そのものズバリ、恋よ恋」

「恋、ですか」

なんて、簡単に納得できるわけがない。

ジトリと睨み続けると、恋歌さんは満足したのか、話を続けた。

「うーん、有理君。現在世界における殺人事件の動機で、ポピュラーナのものって何があるかしら?」

「金銭問題……とかですか?」

「それも正解。でも、今回は違つ。その動機が恋愛絡みだつただけね」

恋愛で人を殺す。痴情のもつれというやつだ。

それは、頭では理解できるけど、抱いてはいけない感情のようにも思える。

「工藤と……彼の職場の上司が一人の人間を取り合つた。結果、付き合つていた相手に浮気される形で上司に寝取られた工藤が、殺つてしまつたわけね」

「あの時の人人がそうですか」

「社長つてば手が早いのなんのつて、私もびっくりしたわ。まさか依頼人の『治療』まで行おうとするなんて」

おそらく、その恋敵を工藤は地下駐車場で殺したのだ。

愛した人と、それを奪つた人を両方消して、彼は解放されたのだろうか……。それとも、自分の感情で、自分の意思で殺しをしたことを背負い続けて、無様に苦しみながら生きていくだけなのだろうか。

人の心を完璧に理解することはできない。僕の、理解したいという思いはただの強欲で、理由を求めることがナンセンスなんだろう。殺すほどの愛。

殺されるほどの恋。

どちらも完璧に理解することはできない、人の心の異常性だった。

「有理君は私のために殺してくれる?」

「……」

とてもなく、意地悪な質問だった。

「わかりません。わかりませんけど、殺しちゃいけないとは、思つてます」

それでも僕は殺してしまうのだろう。

人間としての異常がある分、それが可能になってしまっているから。だから、だからこそ僕にとって、恋歌さんの存在はとてもなくありがたい。彼女といえば、僕は普通の人間のようになりますことができるのだから。

「さて、そろそろ帰りましょうか。もちろん、タクシーでね」

「ホテルはおあずけですか？」

「おあずけです。その代わり、家に帰つたらたんまり吸わせてもらうから」

ペロリと舌を出して、犬歯をのぞかせながら、恋歌さんは茶目っ気たっぷりの表情でこちらを向いた。

今回の功績に、吸血というご褒美が必要なのは、恋歌さんの方だったらしい。

「そういえば、工藤つてホモ？ なんですよね？」

喫茶店の会計を社長の万札ですませて、タクシー乗り場へと向かいながら、ふと思いついたことを呟いた。

「そうよ。だから、そうね、今回のあれやこれやは、男三人の三角関係のもつれってわけね。当然、彼らの取り合っていた『相手』といつのも、むさつ苦しい筋肉隆々の男だったから」

「いやな、いやすぎるトライアングルですね」

恋の形は人それぞれ。

でも僕は、

「なに、私の顔になんかついてる？」

「いえなにも、早く事務所に帰りましょう。日付が変わる前に」

恋歌さんのように、美人な年上のお姉さんのために、殺すほうがまだ納得できそうだと、ウキウキと首筋の絆創膏の下にある噛み痕をうづかせながら、思うのだった。

三歌（喫茶店）（後書き）

そんなわけで、三歌目も終了。

いやー、なんといつか、長かった。ふと描写を増やそうと思つて、あれもこれも説明不足な気がして文章を増量してしまつ今日の頃です。

この三歌目、で一区切り、起承転結でいづなら、起承まで終わつたところといひです。

基本的には各話で独立して楽しめるような連載なんですが、色々と伏線回収しつつ、収束していけたらなと思つてます。

次は承へ転への変化、四歌目です。最終的には今までの三話とは少し違つた話になる予定。

そういえば、空想科学祭に参加致します。

詳しく述べはブログ（<http://mitukou.exblog.jp/>）の記事にでもあげたいと思います（記事はこの小説投稿後に書き始めますが……）そちらもご覧いただければと思います。

それでは、宜しければ今後共付き合つてやつてください。読了ありがとうございました。

四歌（1）

生者が死者か、人か人外か、そんなの些細な違いなのよ、きっとね。

「あのー、私ってやつぱり死んでるんですかね」

街を歩いていると、唐突にそんなことを尋ねられた。極々自然に、まるで人に道を尋ねるようなノリで。

なんとか期末試験を乗り越え、大学も夏休みに突入した8月の上旬。お盆は近いけど、まさかこんな質問をされるなんて。

「いやー、死んでないんじゃないですかねー。見えますし」

その問い合わせに、無責任かつ不透明な考え方をする。

20台前半の、誠実そうな長髪の女性。O-LK風のスーツとストッキングがよく似合う初々しい新入社員のような姿が見えていた。視覚で相手を認識できるというのが、生きているという定義に当たるならば、間違いなく彼女は生きている。

「はあー、でもあなたには見えるんですね。私の姿」

「それは、こうやって会話できるわけですし」

イマイチ意図のわからない台詞だった。

最初は宗教か何かの勧誘かとも思つたが、彼女の初々しい、ホントに困つてますという表情を見るに、その手の輩ではないようと思つた。

「ちょっとびびつときて話しかけちゃつて……。おかげでちょっと手がかりがつかめました！ ありがとうございます」

なんて、少し後ろが透けそうな存在感で、わざわざお辞儀までしてくれた。

「えつ……」

まぶたをこすり、思わず一度見する。

昨日は寝付きも良くて、明日は朝一番に恋歌さんのところに行つ

てイチャイチャしてやううと妄想しながら、気持ちよく眠りについた。

だから、体調はすこぶる良いはずで、田の錯覚とは考えられない。そう、確かに透けている。

去年の冬に恋歌さんに連れられ、テレビ番組よろしくな心靈現象に挑んだ記憶が蘇る。最近出会った、草薙さんの家にいたらしい、目視できないほど空気のような概念ではなく、意思や表情を持つた、より人間に近い幽靈という存在。

似ている、確かに似ている。

「ちょっと待つてください。なんだか、よくわからなくなってきたました」

〇さんにお手上げのポーズでこちらの困惑を伝える。

さつきまで普通に会話をしていた人が、もしかすると幽靈か何かだなんて、信じられるほど僕は常識を逸脱してはない。そういうこともあると聞いて、そういうことも少しだけ経験しただけだ。

「もしかして、話しかけられたのって、僕だけですか？」

「ええそうですね。皆さんあたしの話を聞いてくれなくて、困つたところだったんですね」

見ると、通行人たちは僕の方を怪訝な表情で見ている気がする。まるで、独り言をつぶやき続ける痛い人を見るかのようにだ。

「えーと、そうですね。ちょっと待つてください。多分、力になれますから。というか、一応仕事なんで、なんというか、ご協力お願いします」

と、支離滅裂な言葉で彼女に待つてもらいながら、助けを求めて僕は携帯電話のダイヤルをプッシュするのだった。

四歌（1）（後書き）

今後の展開等を考えて、ジャンルを恋愛 ファンタジーに変更しました。

一～三歌は、ジャンル恋愛と言い張れないこともなかつたのですが、今後の話しさはさらにファンタジー色が強くなる予感です……。主題の一つが『恋』だつたりもするのですが、とりあえず暫定ジャンルとしてファンタジーへ。

伝奇とか現代ファンタジーが近いのかもしれません。ライトノベル、娯楽小説という位置付けで考えていただければ間違いないかもしれません。が、結局は登場人物がイチャイチャとくつちやべるだけの話でもあります。ジャンルの区分つて難しいですね（笑）

「有理君。まじめだね、私的には今日は夏休みだったんだけど……夏休みなんものが、僕らの仕事にあつたのには驚きだ。

寝起きの恋歌さんはとても機嫌が悪かった。

最近購入した最新式の羽なし扇風機で涼しみ動いてくれなかつたのを、なんとか引っ張つり、応接間で待つお客様とのここまで案内する。

僕の後ろでぶつぶつと文句を言う恋歌さんの姿に、若干後悔しつつも、ここまできたからには後戻りできない。

「あのー、この方が困っていたみたいなん……。連れてきました」「あのー、よくわからないんですけど、よろしくお願ひします」

背中の辺りで切り揃えられた髪の毛をゆらしながら、一礼。やっぱり社会人なのだろうか、とても礼儀正しい。久々に正しい、社会人像というものを見た気がする。

「へー、これはまた、奇つ怪な……。いえ、失礼しました」
メガネケースから、『心靈』を観察する能力がある、疑惑の伊達メガネを取り出しかけると、恋歌さんは難しそうな顔で、お客様を見始めた。

「失礼、お名前は？」

「はい、私は三津金商事の小早川明理（はやかわ あかり）と申します」

「明理さんですか。私は恋歌と名乗っています。私たちのことは、そうですね……便利屋とでも思つていただければ結構です」
二口りと笑いながら、恋歌さんは商談モードに入ったようだ。
「明理さん。率直に申し上げて、あなたはいま、いわゆる靈体と呼ばれるような状態になっています」

「それはつまり、幽靈みたいなものなんですね？」

「そうですね、カテゴライズするならば、浮遊靈といつといりでしょか。好き勝手に動き回れるわけですから」

幽靈かあ……と、明理さんをじーっと眺めてみる。

「どこからどう見ても、ただの人と変わらないように見えてします。私とそこの彼は、靈体という概念がごくたまに人間社会に混じっている。という事実を知っていたので、あなたのようないわゆる「死んだ」という存在をキヤッチャでてきたというわけです。これは相性や環境などにも依存しますが、あなたの姿を認識できる人間は基本的には『普通』ではないということになりますね」

いつの間にやら、僕も異常者の仲間入りというわけだ。

「えっと、それでですね。つまりその……私って死んでるんですかね？」

僕と出会った時に投げかけていた質問を、明理さんが再び口にする。

「それを調べるのが私たちの仕事というわけですね。経験則から言わせていただけるならば、あなたは死んでいると確定したわけではありません。『死んだ』にしては、意識や行動がしつかりとしますから」

どうやらそういうわけであるらしい。

靈体というのは、僕らの生活に色々な形で溶け込んでいる。それをカテゴライズしきるのは珍しく、時たま人間に害をもたらす奴らがいると、僕らみたいなのが葬除を行うのだ。

「あー、それで、ですね。お金あります？ お身体がこの世にないのでしたら、ご親族の方からでも結構なので、ご遺産や、自分だけしか知らないへそくりとかでもかまいませんよ」

恋歌さんは満面の笑顔でお金の話を始めていた。

「多分この人はこの人で、出来る社会人なのかも知れない。礼儀とかルールとかそんなもん糞喰らえな人なんだろうけど……。

「行方不明、ところづけつらしきわね」
 クロネコさんからの電話を置き、恋歌さんが小さく息を吐き出す。
 客間で明里さんに待機してもらい、事務所から捜査を開始して早
 2時間ほど、普通の探偵や警察のような仕事は意外と簡単に済んで
 しまった。

「行方不明、ですか」

それなら少しは希望がある。

浮遊霊のようなものになってしまった、彼女の生死は未だわから
 ずじまいではあるが、可能性がなくなつてしまつよりは、十分マシ
 な結果だといえるだろ？

「彼女の意識や、自我の度合いかりこつて、生きている可能性も否
 定できないわ。……もしくは」

「死んだことに気づいていないとこりやつですか？」

そうそう、と恋歌さんは頷き、パソコン越しにクロネコさんの送
 つてくれた捜査資料を指で差した。

「彼女、会社の資料によると今出張中らしいわね。ありがちな、旅
 行中の事故つてこともあるかも」

「事故……ですか」

よくある人が死ぬ理由。

交通事故、旅行先の山や川、人と人の殺し合いが表では行われな
 くなつても、人が死に至る理由なんてのはそこら中に転がっている
 のだ。

「浮遊霊つてのも、難儀なネーミングですね」

「靈体を等しく定義しろなんて難しい話だけね。使いやすいから、
 昔の人のネーミングセンスを借りてるわけ」

ふらふらと行き先もなく迷つから浮遊霊。

それは生前の記憶から、同棲していた彼女の家に縛られているわ

けでもなく、通り続けた道を毎日往復し続けるわけでもない。なんのしがらみもないから浮いているのだ。

「そういう意味では、最近出会った草薙さんとのアレは地縛霊つてところですか」

「私としては、眞実の愛をもつた、いたいけな青年霊といつ説を押ししたいところだけね」

とかく、恋歌さんはそういうものの味方をしたいらしい。

「で、だね有理君。私は今結構怒り心頭してるわけだよ」

声のトーンを落とし、恋歌さんが景気良い音を上げて、パソコンのキーを叩いた。

画面に現れたのは、とある会社のプロフィール。注意深く見ると、どつやら明里さんの会社の関連企業のようだ。

「どつやら」の企業が、霊体やらに興味心身みたいでさ。商業利用？ なんて馬鹿らしいこと考えてるみたいなのよ

霊体を自由自在に取り出す。

なんてことが出来れば、世界が変わる。それを商売にしようものなら、金持ちが食いついてくるというのは十分に想像できる事だった。

「つたく人間の分際で死後の世界の真理に触れようだなんて、おこがましいにもほどがあるわよね」

絶対のタブー という程ではない。

人間は不可解なものがあれば、解を導き出したいと考える生き物だ。だから、過去未来、死後の世界を紐解きたいと願う探求者は現れ続けるのだろう。

「恋歌さんてきには、これも、わかりもしないものですか？」

「そりゃあそ'よ。行けもしないところの情報なんてどうやって引き出しつてのよ。死後の世界から帰つてこれた奴がいるなら、とつくに解は得られるはずなんだから」

死後の世界は、死んだ人が行く所。だから、死んでもいな浮世の人間が、その境地に辿り着くというのは不可能な話だった。

「しかも、その方法が人の魂こねくり回そうだなんて、許せるはずもない話よね」

「明里さんのためにも、僕らの出番ってわけですか」

客間で、僕が家から持ってきた据え置きゲーム機で遊んでもらつて、いる明里さんを思い浮かべる。

すると、ぎゅっとまつすぐに唇を結び、肩をわなわなと震わせて

パソコン画面の方を見ていた恋歌さんが、僕の方を振り返った。

「気になつてたんだけど、小早川さんのこと、明里さん、だなんて呼ぶのね。珍しい……」

「いえ、えーっと、これには深い理由はないんですよ。なんとなくです、なんとなく」

急にこちらに飛び火する恋歌さんの怒りに、惑いながら、言い訳の言葉を並べる。

依頼人たる明里さんのことは、普段なら、小早川さんと呼ぶべきところだ。というか、そうするつもりだったのだけど……。しばしこれがあつと、勝手に納得する。
なんとなく、呼びやすかつたのだ。

年上だし、

落ち着いたお姉さんみたいな人だし、

……どうやら僕は、お姉さん属性に田舎めきつてこる、らしかつた。

四歌（۳）（後書き）

次回更新は土曜日の予定です。

今週末には空想科学祭の方もあげたいなーと思う今日この頃。

・追記

次回更新は20日の予定です。お待たせしてしまい、申し訳ござりません。

「恋歌さん、お尻が痛いです」

「その台詞、なんだか誤解を招きそつで嫌だわ……」

お尻をさすり、とぼとぼと歩く。

場所は県境付近の片田舎。昼頃に事務所を飛び出し、鈍行電車に揺られること数時間、僕のお尻という高い代償を払い、なんとか目的の地に到着した。

いつもなら車で移動するのだが、生憎と恋歌さんの愛車は先日蜂の巣にされており、ただいま修理中。曰く、パワーアップして返つてくるまでしばらくお休みだ。

無人駅の改札をくぐり、うーうー唸りながら歩みを進める。

「いやー、自然が一杯ですね」

「夏っぽいわね。まあ今は仕事だけど」

駅前は閑散としており、僕ら以外の客は帰省目的っぽい若者が一人だけ。

居ても居なくても変わりなさそうなタクシーが一台だけ、ぽつんと止まっていた。

立ち止まりあたりを眺めると、ロータリーの少し奥の道路は、両脇を田んぼに囲まれているし、ポツポツとした住宅街の奥には、大妖怪でも潜んでいそうな巨大な山々が続いている。

「社長に聞いた通り……、靈験あらたかな土地のようね」

伊達メガネの奥に何を見ているのか、恋歌さんはメガネの縁を握りながら、そんなことを呟いた。

「しつかし、暑い暑い」

「軽装で来たんですけどね……」

半ズボン的なものは、あまり好きじゃなかつたけれど、暑さに負けて装備した和風ステテコから飛び出したスネに、涼しい風があたる。

「つぐ、有理君。女の私が嫉妬するほどのツルツルつぱりねえ」「だから半袖とか、半ズボンつぱい長さは嫌なんですよ。子供っぽく見られそうで」

スネ毛に憧れるわけじゃないけど、体毛が薄いのはなんとなく、大人への成長を拒否されているようで、嫌だった。

恋歌さんの格好は、いつもより少し長い黒のスカートに、涼し気な白のブラウス、ポリシーなのか黒ネクタイと袖際のもふもふも忘れない。

いやいや、恋歌さんの生足だって、ツルツルじゃないですか、手入れしているんだろうけど。なんて、言えもしないことを、いつも二ーソックスやストッキングから解放された生足を堪能しつつ思つてみたりする。

さて、社長とクロネコさんの情報にみると、問題の社屋はここを道なりに進んでいけばいいようね

「もしかして……歩くん、ですか？」

「Y e s！」

親指を伸ばし、グットサインを返されてしまった。

僕たちの目的とする、明里さんの手がかり。彼女の『結果的』な出張先となつてゐる関連会社が、この片田舎にあるらしい。社内の情報には、隠蔽が入つていたらしく、社長やクロネコさんの力がなければ、この情報に達するのは厳しかつただろう。

「タクシーという選択肢は？」

「有理君。田舎って車が通り近づいてくるとすぐにわかるものよ。静かだから」

「これ、徒歩30分ぐらいかかりますよね？」

「Y e s！」

気に入つたのか、再びのグットサイン。

相手は靈的なモノに興味津々な怪しげな企業で、近づくのに注意を払いたいという気持ちや、一般人を巻き込みたくないというのもわかるのだが……。

「まあ、夏っぽいですよね。田舎の散策なんて
お尻をさすり、もつてくれよ……、なんて咳きながら、僕たちは
目的地に向かい歩き始めた。

四歌（4）（後書き）

色々とズレ込み、久方ぶりの更新です。
お待たせしてしまい、申し訳ございません。

登場人物二人と同じく、田舎に帰省しておりました。

田曜日も更新の予定です。

空想科学祭用の話も公開しないと……ぐぬぬ。今週末、来週末あたりでぼちぼちと公開していくたいと思つります。

四歌（5）

「わちやに道を訊ねるとは……。旅行客かえ？」

「ええ、そうですけど」

田的地に向かい、歩いていた道の途中。田んぼの脇のバス停で、ぼーっと座っていた女の子に話しかけた。

高校生ぐらいのTシャツにホットパンツといつ軽装の女の子は、左右に結わえられた長めのツインテールを揺らしながら、ん？ と小首をかしげる。

「ええつと、大体の場所はわかってるの、ほんとこ、でも一応、確認というか、なんというかね、ほい」

恋歌さんが女々しく言ひて訳をしていた。

スマートフォンの地図にべつたりと田を寄せてはいるが、ビルやらあまりにまわりが殺風景すぎて、道順が不安になってしまったようだ。

「ほつほつ、いよいよ行くのか？ そりやまた珍しい」

「珍しい？」

「ん、文字通りの意味じやよ。その建物に『行くな』って思ひやつは珍しいからな」

地図を見せ、簡単な説明をしてみると、女の子はハ重歯をのぞかせ笑いながら、ニヤリと笑つた。

「旅行者さんやものねえ。ウチの土地じやあ、そこに行ひなんてモンは誰もおらんのよ」

「でも一応、大きな企業の関連会社で、再生紙やらの工場なんですね？」

「わうひじこね。まあウチのモンで働いてるのはほとどおりおらんで、皆さん外からこられたよつやナビ」

「呼吸ため、

「あんまりこい噂は聞かんの。やから、わきあらびでナナナナビさんかせんとこけんと思つてたといひや」

なまつた独特的の口調で、女の子は溜息まじりにそんなことを言つ。どうやら近隣の住民さんとの関係はあまり良くないらしかつた。こんな高校生ぐらこの子に、どうんかせんといけん、なんて言わせるのだから。

「どうも、ありがとうございました」

「ん。 それとも、気をつけな」

屋根付きのバス停で、何をしていたのか、少女は再びぐらーっと座り込み、何をするでもなく空を見上げ始めた。

「そちらの女の方。ずいぶん、良いメガネやの」

「ええ、結構な値打ち品なんですよ。便利ですし」

去り際にそんな言葉を投げかける、時代錯誤な喋り方をする少女。手を左右に振り、別れの挨拶で送り出される。

「風神様の、ご加護でもありやあいいの」

最後にそう呴いているのが、微かに聞こえた。

ぶわっと風がふき、背中を押されるような感覚がほんの少し心強かつた。

四歌（5）（後書き）

次回更新は、水曜日の予定です。

空想科学祭用の小説も来週あたりに、数回にわけて投下予定。ぐぬぬぬ、土日は、カードゲームとルービックキューブと執筆で終了してしまいました。

四歌（6）

「目標発見、これより潜入行動に入る」「たしかにスパイモノっぽい状況ですけど……」

田舎道を直進し、辿り着いた先に待っていたのは巨大な建造物だった。

「見えるわ、見えるわ。魂の残響があつちこつちに」
伊達メガネ越しに、ぶるぶると震えながら、恋歌さんは興奮した
ようにあたりを見る。

田んぼに囲まれたのどかな田舎町。その一角を占領し、防風林の
ように高く伸びた木々に隠れながら、鉄筋コンクリートの工場があ
つた。

「風、強いですね」

「そうね、このあたりは昔からそうだったみたい。社長に聞いた時
も、さつき道を聞いた時の子も、風神様がどうのこうの言っていた
し、心靈的なモノが昔から寄りやすかつたんでしょうね」

だからこそ、利用された結果、明里さんのような浮遊霊を生む『
何か』があそこで行われている可能性がある。

もくもくと煙をあげる煙突の下は怪しく、薄暗い。ワゴン車やト
ラック、高級そうな自家用車が止まつた駐車場の近く、正面ゲート
には、作業着の男が座り、じつとタバコをふかしていた。

「素人……ですよね」

「そうね、至つて普通の一般人。奥にいるのも、暴力団関係の腕自
慢が精々でしょうね」

以前出会つた、殺し屋の組織とは比べるまでもない、ただの作業
員に会社員。

潜入から戦うハメになつたとしても、これなら僕らで対処できそ
うなレベルだ。

「オカルト的な……仕掛けとかはどうなんですか？」

「簡易な結界、的なものはあるのかもね。」
「ううのは、門外不出で色んな術式やら儀式方法があるから、一概にはいえないところはあるけど。うーん、空氣の感じだと、出来合いの物を業者からもらつて使つてるだけね」

人を寄りつかせないための、無意識下の意識修正。それぐらいの準備は、この手の施設に用意されていて当然だ、と聞いたことがある。そしてそれは、いうなれば、陰陽道の流れをくむ、言霊使いの社長の専門分野だった。

「恋歌さんは社長の弟子、なんですよね？」

「正しくは落ち」ほれの落第生つてど」うね。恋歌、なんて名前は
あらね二サギ」、元々は「二二二」に由来する。二二二は、二二二の二二二

「結界とか、大丈夫なんですか？」

「心配無用。こんなのはほどの熟練者の仕業じやないかぎり、経験則でオカルトへの抗体ができてしまつた私たちにとつては、子供騙

しみたしながらもんよ

事実、結界による人払いがあるだろう状況で、僕たちは無事にこの工場まで辿り着けている。『そういうもの』が存在すると知っているだけでも、僕らは一般人のように簡単に騙されたりはしないということなんだろう。

「さて、行きますか！」

「れ、恋歌さん？ 潜入ですよ、潜入？ 今にも殴りかかって行きそうな勢いに見えますけど……」

「うーん、有理君。やつぱり私、一

い、一発殴らないと気がすみそうもないや」

オカルトの境界線を、なんの覚悟や代償もなく、土足で侵入してしまった一つの企業。

利益を得るために、人の命を弄ぶような行為。

「そうですね、……好きに、暴れてください。今回は僕も、能力な

んで使うほりぢやなさそうですし、血を吸うなりぢつか、遠慮なく
そんな彼らを許す理由は、どこにもなかつた。

四歌（6）（後書き）

世間では8月も終わりかけ、夏休みの宿題を必死こいてやった記憶がよみがえります。

さて、色々な〆切りが迫ってきます。空想科学祭、土日あたりを目標に頑張って仕上げていきたいと思います。

次回更新は、土曜日の予定です。（更新は、別シリーズの作品の場合あり）

四歌（7）

「ちょいとそこのお兄さん、そこ、通してくれる？」

入り口でタバコを吹かす強面のお兄さんに近づくと、恋歌さんは満面の笑みで話しかけた。

「ああん、なんや姉ちゃん！　口はあんたみたいなのが来るといや……つて、ひでぶつ！」

そして、珍妙な叫び声をあげて、宙を舞う成人男性。

「あ……あでえ……」

ぐるりと一回転し、背中をもうにうつたのか、「一ホー一ホー」と苦しげに息を漏らし続けるその姿は、中々滑稽だった。ありていに言えば、ザマアミロッてところだ。

「さて、今日はお姉さん、頑張っちゃうんだから」

工場の正面入口から正々堂々と侵入する。さつきまでの潜入がどうやら、という前振りは、どうやらゲームに影響された恋歌さんの戯言だつたようだ。

「恋歌さん、気をつけてくださいよ」

「大丈夫、大丈夫、相手は素人みたいなもんみたいだしね、私らにとっちやあ！」

慌てて駆けつけてくる工員たち。

思つた通り、相手は素人みたいで、訳もわからず手伝わされるだけの作業員もいるかもしれない。実際、事の異常感を感じ取つた社員の中には、腰を抜かして逃げ出した人もいた。

これで、警察なんかでも呼ばれたら、僕らは傷害罪で捕まつたりするのかもしれない。

もつとも、そやはならない。

「おい、お前ら、取り押さえろ」

そうさせないように、キッチンと彼らの上司は、対応しているはずだから。

稼動していないベルトコンベアの奥から、スー^ツ姿の男がガタイの良い男を連れてやってくる。最近使われた形跡のない、食品加工用のオートメーション工場はフェイクで、本丸はこの奥にあるつてことなんだろう。

「つてめえら！ おとなしくつかまれ！」

「あら、ごめんなさい。今日は私、機嫌が悪いんです」

さらりと拳を避わし、恋歌さんが足をちょいと男にかけ、掬い上げる。

それだけでバランスを崩した男は、宙を舞い、受け身を取れずに地面に叩きつけられた。合気道……僕もちょっと教わったが、恋歌さんレベルになると、あまり参考になりそうにない。

型とか、パターンとか、そういうもののじゃない。手を添える、肩を押し付ける、足をはらつ、そんな些細な行動だけで相手のバランスを崩してしまう。

とらえどころがないが故に、相手も対処に困るはずだ。

結果、恋歌さんはこの程度の相手なら、ちぎっては投げを、地で可能にしてしまう。

「てい！ 恋歌サー^ン、ホントに今回、僕暇なんですけど」

実は隣にいるチ^ツコイ男の方が弱いんじゃないかと気づいた一人が、僕の方に迫ってくる。その攻撃をなんとか崩しながら、合気道の体捌きで入身投げをかましてやつた。

「いいじゃない、たまには。お姉さんにも暴れさせなさい」

背中合わせに、恋歌さんと額き合^うう。こんなストリートファイト紛いなことをしたいわけじゃないが、相手が思いつきりぶん投げてもいい相手だと、結構やる気もでるつてもんだ。

「ちい！ 話が違うじゃないか！ いいから全員、アイツらを抑えろ！ こら、お前、逃げるな」

事情を知らない、純粹な一般人っぽい人たちだけでなく、ガタイの良い、戦闘要員として雇われたっぽい人たちまでもが逃げ出し始めた。

きっと、この仕事が、『何か』やばいということを知っているのだろう。

「さーって、種明かし、生者と死者を冒瀧する、おたくの会社の商品、是非私たちにも見せていただけるかしら」

につこりと、恋歌さんがスーツの男に笑いかける。

一方、管理職っぽいスーツ男は、青白い顔で、ひきつった笑いを浮かべるだけ。

まったく、美人の恋歌さんが笑いかけてくれてるのに、そのリアクションはどうなんだ。僕ならきっと、喜ぶっていうのにな。まあ、いつも、無表情だからとかで、気づいてほくれないけど。

四歌（7）（後書き）

皆様、お久しぶりです。有恋歌、更新再開です。
次回更新予定は水曜日です。

ええ、ここ最近何をしていたかと、（言い訳）わせていただきます
と、空想科学祭2011に参加しておつました。

よろしければ、作者ページからそちらも拝讀していただければと思
います。

と共に、どうやらある程度の投票、アンケート結果が必要なようで、
是非興味がございましたら、

企画サイト（<http://sffest2011.tuzikane.com/>）にてあります、作品群を拝讀してみてくだ
れ。面白い、驚かせる作品がたくさんありますので。
投票期間が終わるまでは、まだまだ祭りを盛り上げていきたいな
と思つ今日この頃なのです。

ではでは、今度はこのあたりで

「そこを、『動くな』ってね」

恋歌さんが異質な声色で、男に命令を下す。その一瞬だけ、こちらまで伝わるほどに、言葉に重みが加わっていた。

直立したままふるふると筋肉を揺らすだけで、身動きがとれないスースの男を知り田に、問題の『何か』が眠っている工場の奥へと急ぐ。

「今、言靈ですよね？」

「まあ、そんなものね。言葉に靈的な概念を乗せて飛ばす、私なんかのは、ちんけな小細工だけどね」

「見るの……というか、聞くの、久しぶりです」

「そりやそりや、こんな普通に生きている分には役に立たないし

……」

一呼吸置き、恋歌さんはあっけらかんとした口調で言葉を続ける。「私は混戦状況だつたり、相手が一般人でも精神力で跳ね飛ばされたり、第一、動きまわつてる相手を止めるほどの拘束力はないもの。使えるのはさつきみたにビビって威圧された相手を縛る、とかね」

「世の中、それほど万能なものはないってことですよね」

「チートみたいな異常があるくせに、その台詞、有理君がいうかな

……」

拳を握り、こめかみのあたりをグリグリと小突かれた。

僕としては、こんな欠陥だらけの能力、万能なんて程遠いと思っている。今だつて、恋歌さんの吸血行為で封印されているわけだし、身体の成長どころか、心臓とか臓器の動きすら止めてるような力に、万能なんて言葉は似合わない。

「さて、これが問題起こしまくつてくれた原因つてわけかしら」

しばらく歩くと、見せかけの流通ラインは終わり、きつかりと研

究施設の様相をなした空間が広がっていた。

「誰も、いませんね」

「大方逃げたんですよ、こんな研究してたんじゃ、やましいことしかないはずだし。まあ、後で社長にでも手伝つてもらつて、責任はとつてもらいましょう」

施設には誰もいなかつた。

あたりには、巨大なコンピューターや、精密機械の山、無造作に積まれた資料が、置かれている。よく見ると、慌てて逃げ去ったのか、投げ出された白衣や、床に転がるノートパソコンの姿が確認できた。

「で、まさかこれが」

「魂、つてところのかしらね」

施設の中心地点にでかでかとそびえた巨大な機械。用途不明、冗談みたいな科学チックな管やパイプで繋がれ、外付けのパソコンへと何やらデータを吐き出している様子が見て取れる。

その機械群の中でも、極めて異質さを放っているのは、管やパイプが集約し、『何か』を輸送したのだろう終着点として存在する巨大な、プラス口のような入れ物だった。

楕円に近い透明な入れ物の中では、もやもやとした霧のような何かが、今も動きまわっている。

「信じりません。けど……、靈体っていうのは、実体がないのに、人間の形をなしますから、イメージとしては近いかかもしれませんね」

「私だつて、こんなもん、見の初めてよ……。まったく、どんな技術かは知らないけど、とんでもないもんを作つてくれたみたいね」眼の前のそれが、魂とか靈体とか、そんなオカルトチックなものだとすぐには納得できなかつた。普段、不条理な世界や環境、現状や問題に首を突つ込み廻つてはいても、これほどのものだと、さすがに開いた口が塞がらないつてところか。

所詮、自分の知らないものには、驚き、脅えるしかなくて、僕ら

もまだまだ、この世には知らないことがあるちょっと踏み込んだだけの人間なのだと再認識する。

「れ、恋歌さん！　ここ……、管が繋がってる先に、人が……」

巨大な装置の奥に隠れるように、人が並んで眠るスペースがあった。

皆が一様に、病院の患者が着るような簡素な白色の服で並んでいるその様子は、なんだか本当に人を実験道具としか見ていないようで、物哀しいものがあった。

「大丈夫、大丈夫ですか！」

検査用につながれた細い線を外しながら、なんどか彼らの頬や、肩を叩いてみたが、反応はない。そして、さっと見る限り、ここに並ぶ五人の中に明里さんの姿はなかつた……。

「なるほど、この機械のせいつぽいわよね。魂は基本的に、本来の入れ物に戻る性質があるからして……」

ぶつぶつと何かを呟き、恋歌さんは顎に手をあて考えながら、うろつうと歩きまわる。やがて、足取りは自然な感じで、メインモニタっぽい機械中央のコンピュータのところで止まった。

「れ、恋歌、さん？」

思えば、今日の恋歌さんは機嫌が悪い。

一年ぐらいの付き合いで、その上、いつも彼女に首つたけな僕が言うんだから、間違いない。だから、僕が悪い予感を感じてしまったのも仕方がないつてもんだ。

「つまり、こうしろってことよね！　てい！」

見事な、かかと落とし。

体術の得意な、恋歌さんらしい強烈な一撃だった。

みなさんこんにちわ、木曜日の朝にごめんなさい（汗

といつわけで、更新です。次回は土日の週末の予定。

ノッテきたのか、最近筆が軽いです。そのせいか、描写が増えて行つていてる予感。

私自身、先が気になり、はやく先のストーリーに進んでほしい！つてな人なので、ストーリーの進みはテンポよく行きたいなと思つてます。有恋歌も、ここからスピードアップしていきますよ、展開的な意味で。

さて、宣伝です。

まずブログ「ものかきがたり」<http://mitukou.eblog.jp/>

最近自分のブログ内で、私がおつ立てたゲームサークルスタッフ内でのしりとり日記をやっています。ムチャぶりと下ネタ満載ですので、よろしければ

次に、空想科学祭 <http://sffest2011.tu-zikaze.com/index.html>
参加しました。私の参加作は、作者トップページからどうぞ。
現在投票期間中でして、投票数が少ないとたいへん困るそうです。
よろしければ公式サイトから、数多ある素敵な参加作品を巡つていただければと。

それでは、長くなりましたが、今日はこのあたりで

四歌（9）

もちろん、一撃で精密機械が完璧に壊れるわけもなく。

「こうなりや、僕だつてやけになりますよ！」

僕まで加勢するハメになつた。

「つりや！」

「僕は力ないんで、素直に、解体っぽいものをしていきますけど…」

精密でショックを加えたら壊れそうな部分を狙い、恋歌さんの足や手を落てる。機械相手にぶつかって、恋歌さんの身体の方が強いというのは、完全に人を超えている証拠だつた。

まあ、恋歌さんの師匠は社長なんだから、それぐらいてきて当然なのかもしれないと、こつそりと嘆息する。

「そろそろ、いいですかね？」

管やコードを無理やりひつペがし終えると、僕は首をかしげ、半笑いで恋歌さんに向き直つた。

「……やりすぎちゃつたかな？」

「そうですね。なんか、変な煙出でますし」

機械というのは、本当に壊せば煙が出てくるものだつたらしい。内部でショートや発熱が起こつてているのか、やがてあたりに焦げ臭いにおいが充满してきた。

「けど、本来の目的は果たせたようですね」

本来の目的、魂……と呼ばれるものだと思われる、白い靄を救出すること。巨大な透明な瓶のよつた球体の中で、靄が蠢きの速度をあげているのが見て取れた。

やがて、閉じ込めていた者たちの力に耐えられなかつたのか、球体の一箇所が飛散し、大きな穴を開ける。戻るべき場所を探すように、靄たちが空へと広がつていつた。

「これにて一件落着！ だつたらいいのだけどね」

氣急げに、恋歌さんがケータイをいじりだす。ことは僕たちが思つていたよりも大事だつたらしい。魂の抽出、あるいは加工。

それが、現実に可能だつたのか、未完成だつたのか。恋歌さんの言つたとおり、魂が本来の入れ物へと戻る習性があるとはいえ、明里さんのように、浮遊霊となつたような存在までもが無事に帰れたかどうかまではわからない。

帰つたら、明里さんを探しあないとな……。おそらく、彼女の魂を縛つていた科学技術による拘束はとれ、自由の身になつた。彼女の身体が無事なら、きっと、元通りに二つの足で地面を蹴り、外を歩いているはずなのだから。

「とりあえずは、そこで寝てる人たちの保護ですかね」「そうね、できれば資料なんかも漁つて、他にも被害者がいないか調べたいところだけど」

ここからは、探偵的な仕事。

実は僕はこういう仕事の方が好きだつたりする。てんやわんやの肉弾戦やら能力戦やら、必要があればこなすけれど、自称研究者をうたつてゐる恋歌さんとその助手である僕も、きっとこんな仕事の方が合つてゐる。

なんて、考えているのが、前振りだつたのか……。

気づけば、僕らの後方、すぐその位置まで、先ほどのスー^ツ男が迫ってきていた。彼は必至の形相で、僕らの行動を咎めるように腕を伸ばす。

しかし、やがて伸びされた右手は自分の首へと返され、自らの首を絞め始めた。左手は苦しさを表現するように、胸のあたりの服をぎゅっと握りしめていた。

顔色は見るみると青ざめ、額には汗が流れ続け、まるで、血管までもが蠢いているように、彼の身体を蝕んでいた。

「……これは、『普通』じゃないわよ」

もはや、この施設の責任者にも見えたあのスース男は、僕らの領域、オカルトへと到達した。

おそらく、言靈から抜け出した彼は、僕らを追つてここまで来て、タイミングよく、解放された魂によつて、その身体を奪われたのだ。

「ふー、ふー、ふー……、殺す、殺して、殺す、殺して、殺す、殺して、殺す、殺す、殺す」

やがて、平静を取り戻したようにふつと、男はだらりと腕を下ろした。もはや、見る影はなかつた。どちらかといえば一枚目で爽やかな、仕事のできる若手リーマンの姿はそこにはない。

いるのは、恨みや、妬みや、負の感情を一杯に凝縮したただの狂人。元となつた生身と靈体の人間たちの痕跡は、もはやどこにもない。

「あつちやー、予想外。これも、魂の行き先の一つひとつにこじらね」

恋歌さんが、額の汗を拭いながら、笑えないわね、と言葉を続ける。

「戻るべき本来の入れ物がこの世にないなら……せめて、恨みはらさでおくべきか、つてところですか」

たとえ、身体のない、靈体が相手でも、そういう思考回路は想像に難くない。人間の迎えるべき末路の一つ、恨む側にも、恨まれる側にも、できれば、ああはなりたくないものだ。

そして、できればあの魂の中に明里さんがいないことを願いたい。「ぐ、くけつつつつつつつつつつつつつつつつつつつつけえ

奇声を発しながら、男は近くにあつた一台のパソコンを右腕ひとつで粉碎した。強固なボディで守られているはずの、集積回路の塊に穴があき、バチバチと火花が散つていい。

彼は普通の人間、乗つ取られ、理性を失つただの狂人。

恋歌さんのような技術があるはずもなく、振り下ろされた右の指先は変な方向に曲がって、傷つけられた肌は、今も地面に血を垂らし続けている。

「相手は完璧な悪霊。恨みの総量も相当なもの。あのレベルは経験、ないわね……。倒せる、かしらねえ……」

「れ、恋歌さん？」

不安げな声を、恋歌さんが漏らした。

腰をかがめて、戦闘態勢をとる。僕はそんな恋歌さんを見るだけで、何も出来ない。血を吸われて、発育の遅い、ただのチビに成り下がつた僕では力になれないのが情けなかった。

でもまあ、いざつて時は盾とか身代わりぐらいには成れるかもしない。そう思い、目をこらし、悪魔憑き、となつたスーツ男にじつと、視線を合わせた。

四歌(9)(後書き)

またもズレて土日明けの月曜日更新に……すいません。

今週土曜日までには、四歌、終了予定です。

基本的には一話だいたい10分割ほどの予定。計算しているわけではないので、まだわかりませんがw

今のところ、この四歌もそんな構成になりそうです。

よろしければ、感想なり、文句なり、励ましなり、web拍手等で遠慮なくぶち込んでやってください。

それではまた

・追記

リアルが忙しかつたりして、また更新がズレ込みました……。すいません。

お待たせしてしまいますが、9月24日には少なくとも更新を再開する予定です。

「まさに相手は人外……ですか」
「靈体や惡靈なんてのも、所詮は人間の成れの果てよ。つて考えて
でもいないと、戦うのがばからしいわよね……。そう思わない？」
人は人であることを辞めると、これほどの破壊力を生むのだ
と実感する。

垂れ下がった腕は壊れ、血が流れている。血走った瞳は、もはやなにも捉えていないかのように、視線が定まっていない。足取りは複雑怪奇な軌道を描き、真っ直ぐに進めはしない。

近くにあつた、オフィス机があつさつと宙に浮く。

武術的な技術なんてありはしない、筋力の効率的な流動などありはしない。それでも人は限界を越え、人であることを放棄すればこれほどまでの『力』を得ることができるのだ。

「けど、何んのはただの、暴走だよな……」

荒ぶつた魂を鎮める。

なんて言つてみると、なるほど確かに『オカルト専門家』っぽい大層な仕事だった。僕らとたいして変わりはない、ただ道の踏み外し方が違うだけ。

だから…… ちょっとひり自分の境遇を重ねてしまつ。断じて、同じものではなーと主張したくなつてしまつ。

「『止まれ！』つて……効くわけないか。そもそも本来の人格には、聞こえてすらないだろうし」

恋歌さんは、軽く舌打ちを交えながら、机を飛び越え相手の背後

へと回り込む。『言霊』といつのが効かない相手なら、僕らは普通に戦うしか道がない。

「おつとつと」

僕の反対側で、相手の氣を引こうと立ちまわっていた恋歌さんの方へ、スーシ男が向き直る。

「動きそのものはわかりやすいんだけど、問題は、私がノーミスでこれに対処できるかつてことよね」

「ごづよぢやうとあたぢやおつあせじやおつあ！」

声にならない声を上げ、男は腕を振るう。すると、ひょいと軸をズラすことでその攻撃を避けてみせた恋歌さんの横にある計測機械が、根こそぎ破壊されていく。

硬いボディも、金属のフレームも、『アレ』の前には意味をなさないようだ。

これはいよいよもって、僕のカミカゼアタックが迫ってきたらしい。ここは僕が食い止めるので先に行つてくださいなんて、一度は言つてみたかった台詞を使う機会があるなんて、思いもしなかつた。なんて考えて、静かにあくまで無表情に、機会を伺う。

ぐつと、足の裏に力を込めて、突つ込む準備を整える。さすがにあんな化物だつて、体そのものは人間。ボディにアタックしてそのまましがみつけば、恋歌さんが逃げる隙ぐらい奪えるだろう。

恋歌さんが僕を気にせず逃げてくれるかどうかも、他に有効な手立てがないのかも、十分に考慮されていない青くさくて、自己中心的な作戦だった。

それでも、これが自分にできる精一杯だと、一撃必殺の捨て身攻撃を避けながら、痛みや消耗など見せない敵相手に奮闘する恋歌さんことを思い、勢い良く足を蹴り上げたその時。

風、が吹いた。

四歌（10）（後書き）

久々の更新となってしまいました……。

四歌もそろそろ終わりの予定。

明日も更新して、今週中には完結予定です。

予定が伸び伸びですいません（汗

空想科学祭の投票期間〆切りが迫ってきたようです。よろしければ、公式サイトの方（<http://sffest2011.tuzikaaze.com/>）で、投票への協力のほど、よろしくお願ひします。

締め切つていたはずの工場内に猛烈な風が吹き荒れた。

とつさに両目を瞑り、風に乗つて飛び回る小さな機械類から身を守るため、両腕で顔を覆う。そしてすぐさま、こんなことしてゐる場合じゃないと、反射的な自己防衛から立ち直り、戦闘の様子を確認するために瞳を開く。

すると、そこには、少女が一人、浮いていた。

「わちきの居ぬ間に、ずいぶんと面白いことになつたもんだ。ちつと、邪魔するぞ」

ふわふわと、重量を忘れたように浮いたまま、涼しきなTシャツとホットパンツの、栗色のショートカットの少女。浮かべる表情は、まるで、人間にはできるはずもない、壁の上方の窓ガラスを割つて風に乗り侵入してきましたと言わんばかりの、したり顔。よく見ると、見覚えがあつた……。

この工場までの道中、道を尋ねたバス停の少女だと想い出す。もつとも、空に浮いている時点で、同一人物を認めていいものかは疑わしかつたけれど。

「ふむふむ、随分と恨みを買つたようじゃな。それでは身動き取れまいて、難儀なもんよなあ」

奇妙な言葉遣いで、大層偉そうに語るその姿は、歳相応の少女のものではなかつた。随分と、上から目線が似合つような、人とは違う何かであるような、そういう態度に慣れているような振る舞い。

「ちよつと、えつ、え？」

恋歌さんでも、こんな体験はなかつたらしく、口をあんぐりと開け、目をぱちくつさせ、目の前の浮いている少女を驚いたように眺めていた。

「浮遊靈……じゃないよな。そんな希薄な存在感じゃないし」

明里さんは違う、確かな人のような存在感。浮いているという

事実を除けば、彼女は人のように僕の目には写っている。

「あれ、おかしいな。私が驚くなんて……せつはつは、異能力でも、異端者でも、『油に浮いたやつ』なんてことは、不可能に決まつてるわよな」

それはなんとなく理解できる。

僕ら、異能者、あるいはどこか欠陥を生じさせた人間にできることは精々している。世界や空間や人や物に干渉して、それらにも欠陥や歪みを介入させるだけ。

宙に浮く、なんてケースは聞いたこともないし、重力や物理学的にもそれほどのパワーを生めるとも思えない。ましてや他人ではなく、より難しい自分自身への干渉で、あれほど安定して浮き続けるなんて、タネ明かしがあるなら早く教えてほしいもんだ。

「ふわあ、ま、ここは正義のヒロインとして、わちきが場を納めて

「そこの若いのには、それ相応の対価を払つてもうつがの」
楽しそうに笑い、少女が不穏な言葉を口にした。

「さりて、というわけで、ここりで閉幕、お開きと行こうかの、
宙に浮いたまま少女が腕を振るう。すると、小さな竜巻が形成さ
れそのまま突風へと広がつてスー^ツ男へと向かつて行く。

断末魔の叫び声をあげ、悪霊が胡散していくのが、専門知識のあ
まりない僕にもわかつた。

ついでに男のスーツが飛散して、パンツ一丁になつたのも確認できた。情けない姿で、けれど『人間』の姿で倒れこむ一人の哀れなサラリーマン。

「これにて一件落着、つてなとこらかの」

満面の笑みのしたり顔で、僕と恋歌さんを見る少女。

突然のことには、混乱した頭のまま僕たちは、ぼけ一つとそれに応え

る。

チクリと何かが胸に刺さるような感覚。

ああ、これは恋歌さんに初めて出会った時にも感じた奴だ、と一人納得する。

ひどくあっけなく、簡単にシンプルに表現してしまったなら、これからとてつもなく、面倒で刺激的で破天荒な出来事に巻き込まれそうな、そんな予感がしたのだ。

四歌（11）（後書き）

これにてなんとか有恋歌も一区切り、
登場人物が出揃った感じです。まあ短編連作をうたっているので、
大筋があつてないような部分はあるのですが（汗
一応頭の中で構築した、適当にきりの良いこといろいろまでの話、で連載
終了？ っぽい予定です。
おそらく6、7歌あたりが目処になるかと。

残りはHピローグをちょっと加えて四歌は一日終了。
とはいっても、今回出てきた新しい子の詳しい話は、五歌に持ち
越しになります……。

今週中には、Hピローグも更新する予定です。

四歌（玄関）

「ほんとーに、ありがとうございます」と言葉を送られた

「いえいえ、無事で何よりでした、本当に」

事務所の玄関、僕と恋歌さんがあれやこれやの「ゴタゴタ」を収束させ、なんとか帰つてくると、待つていたのは無事普通の人間に戻つた明里さんだった。

工場の資料にも残つていた通り、明里さんの身体はなんと工場での変な実験から逃げ出し、幽体離脱しかけの身体で本社のある市内の方まで戻つてきたいただ。

その後身元を確認できるものもなく、身体一つで意識を失い倒れていた所を、近くの病院に搬送され、意識が戻らない日々を送っていた。けれど、僕らがあの機械を壊したおかげで、中途半端に被害を受け浮遊靈として縛られていた靈体が、本来の身体に戻れたようだ。

「それより大丈夫なんですか？ 病院も無理やり飛び出してきたんですね」

「いえいえ、確かに意識を失っていた期間は長かったですが、身体は健康そのものです。どうしても助けていただいたお一人に早くお礼がしたいと思いまして。それに、靈体でなんとかこうにかプレイしたゲームも大変面白かったんですよ」

二口りと笑いかけられ、思わず照れてしまう。

そういえば、客間の据え置きゲームで時間をつぶしてもらつたつけ。あれをプレイしてもらうのはとても骨があれた。なんとか頑張つて、コントローラーを揺らしたりするだけの簡単なやつなら、靈体でも干渉できると発見して二人で喜びあつたりしたのは、なんだか不思議な体験だった。

「お金はきちんと払います。今日はお礼だけになりますが……本当

「お一人ともあります」「やいました」

玄関で三人が立ちっぱなしのまましばらく雑談を交わした後、最後に明里さんが改めて頭を下げる。

「明里さん、会社のことは大変だと思いますが、今後同じことが起こらないよう、私の上司が対応しています。明里さんは気にせず働いて、ついでに私たちへの報酬でも払ってやってください」

恋歌さんが冗談を交えて、明里さんを送り出した。

その言葉に明里さんは嬉しそうな、柔らかい表情を浮かべ、綺麗に背筋を伸ばし、頭を下げ玄関を出していく。誠心誠意、感謝の気持ちをぶつけられたようで、なんだかこちらまで暖かい気持ちになれたような気がした。

「さつて、私たちはゆっくり休みましょうか」

「長旅でしたもんね。ついでに寝てませんし」

工場での一悶着があつたその日の夜、恋歌さんからの連絡を受け、颯爽と現れた社長が事態を收拾させたのが、翌日の午後。

それから電車に揺られ、日も暮れたころに徹夜明けの僕らはなんとか事務所へと帰つてこれたというわけだ。

「はやく、車戻つてくるといいですね」

「もう後少しで完成らしいわよ。お盆終わりには終わってるんじやないかしら」

この身体にずつしりと残る重たい疲れの理由の一つは、移動手段が車ではなく田舎の鈍行電車だったこともあります。

「社長以外にも、なんだか色んな人が来てましたね」

「さすがに事が大きくなっちゃったからね。お国の『組織』も来てはいたけど……まあ迂闊に手を出せない分野なんでしょうね。あんなのほんとにイレギュラー中のイレギュラーよ。社長の焦った顔、久しぶりに見たわねえ」

焦点の合つていらない瞳で虚空を見上げながら、恋歌さんが達觀した溜息を吐く。

今回の事件は僕らの思つていた以上に大きくなってしまった。靈

体に手を出した組織、その会社の一部分は完全に國の力で『なかつたこと』にされる。さすがに企業すべてが、あの事業に関与していわけではないし、不要な部分だけの抹消はスムーズに進んでいるんだろう。

たまたま巻き込まれただけの、明里さんのような本社の人間には、それほど影響はないはずだ。

靈体の商業的利用なんていう馬鹿げた技術や知識は、これでまた闇に葬られたわけだ。あの主犯格つぽいサラリーマンの男の末路は、あまり考えたくないような事になつていてるだろ？

「ともかくにも、一件落着ですね」

「……だといいけど

ひどく疲れた表情で恋歌さんが再びの溜息。その気持ちはわからなくもなかつた。

「とりあえず、休みましょう。僕も恋歌さんも社長の手伝いで色々走り回されましたからね」

「そうね、昨日は寝てないし、とりあえずベットで横になりたいわ。タイミングよく現れた明里さんとの話も終わつたし、今日は他に用事はないはずだ。なので、今から明日の暁過ぎまでぐつすりと爆睡することに障害はない。

「何か食べます？ 簡単なものなら作りますけど

「うーん、いいや、それより寝たい」

「そりやそうですよね」

恋歌さんと二人、玄関での会話を終了し、寝室へ向かうため、戸に背を向け方向転換する。

さつて、寝るぞーなんて、妙なことにヤル気を出していると、ガラガラと古めかしい音をたて、開けられた引き戸。

「ふつはあー。ほつほう、それなりに都会やの、この辺りは、ひとつ飛びでやつてきたかつたが、人間の使う電車とかいうのも中々楽しかつたわ」

まるで、当たり前のように、旅路の感想を喋りながら、今帰つて

きましたというふうに現れた少女。

「親父の用意したこのキャリーケースとやらも便利じゃな。ついつい転がすのが楽しくなってしまつ」

まるで、旅行用の荷物を大量に抱え、これから外泊しますよという装備を見せつける栗色の髪の少女。

「お、久しぶりじゃの、若いの。約束通り世話になる。なーに、わちきは偉いから、そんには迷惑はかけんですむと思つぞ」

玄関の扉に腰をかけ、靴置き場で靴を脱ぎ始めたTシャツホットパンツの少女。

「そういうや、ちゃんとした自己紹介がまだじゃつたな。聞いとるかもしけんが、わちきは東雲風見。しののめふみこれからしばらく世話になるぞ」

満面の笑みが眩しい、風見と名乗る少女。

突然のことに思考停止し、ぽかんと口を開け放心する僕と恋歌さん。

「ゴタゴタの中聞いた情報を、僅かに動く頭の片隅で思い出すに、彼女、風見は、俗にいう、風神とか、天狗とか、そう呼ばれる極めて希少価値の高い、『人外』に分類される少女だった。」

四歌（玄関）（後書き）

これにてなんとか四歌も終了です。

今から広島 関西 広島の旅へと出かけます。帰りは月曜日……

執筆中にミスを発見したり（明里さんを一部で明理と書いてたといふミスが……。旅から戻つたらなおします 汗）

キャラクターの名前が定まってなかつたり（ふみ という読みは決定していたのですが、史 風美 風見 といつ流れで変化。実際地の文内に突つ込んでみると、わかりにくかつたり映えない名前つてのはある気がします……）

色々ありましたが、なんとかここまで。
さて、新しい話を考えないと……。

やつぱりあれですね、行き当たりばつ当たりはきついですねw

風見さんの詳しい話は五歌へと持ち越しです。更新は来週末あたりを予定しています。

今後ともよろしければお付き合このほどよろしくお願ひします。

追伸：

空想科学祭の投票〆切りがすぐ間近です。投票の数が大変重要で、まだ足りていないようです。よろしければ公式ページ（<http://sffest2011.tunizane.com/>）にて投票のほど、宜しくお願ひします。

女子高なんてあんなもん、魔窟よ魔窟。

「お邪魔しまーす」

適当に頭を下げながら、事務所の玄関を開ける。合鍵の所持を許された、僕にとつての夏休みの習慣の一つ。朝、目が覚めると同時に『超常現象研究所』という名前だけは大層な建物へと侵入を開始する。

昨日は大学の図書館で借りたい本があつたので、事務所に泊まらず、大学の傍のアパートに一度戻りそのまま寝てしまった。大好きな人と一つ屋根の下で一夜を過ごすというのは慣れきった今でも大変魅力的だったが、残念ながら決定的な行為は一度も起きてないままだ。もつとも、完璧に『大人の』身体になりきれていない僕では起こしようもないので……。

「今日は朝ごはん作りますね。朝早くこれたので」

24時間営業のスーパーでこさえた新鮮食材を冷蔵庫に詰めながら、そんなことを呟いてみる。当然恋歌さんには聞こえない。だって、まだ寝てるから。

「朝もはよから御苦労なこつたの。すまんがいつも通り、わちきのは醤油で味付けしてたも」

しかし、今日は珍しく返事が返つてきてしまった。

「いたのかよ……」

「いや悪いか、わっぱ」

意地悪な笑みを浮かべて、台所横の長机から二タ一タとこちらを見るのは東雲風見。つい一週間前から加わった、この家の新たな住人だ。

今ではすっかり我社の一員……いや、最初からこの場所を我が物顔で闊歩し、遠慮なんてものは微塵もなかつた。そりや生活に馴

染むのも無駄に早くなるわけだ。

「ここにくるまで洋食など数えるほどしか口にしたことがないが。ふむ、これこそが見聞を広めるということだな。親父が言う通り、神たるもの下々の生活を知っておかねばならんから」などと大層な言い訳を述べながらも、椅子に座り嬉々として朝食の出来上がりを待つ風見。見た目は世間一般的の女子高生ぐらいだといつに、この態度と言葉遣い。

自称ではなく、相手は認めたくはないが本物の神様、だからこんな性格になるのも仕方がないと、小さく溜息をつく。

「へい、和風ソースで味付けしたさっぱりオムレツに付け合わせのサラダで」じざいます。あと、パンは自分で焼けよ、いいかげん「わっぱの癖に生意気な……。まあ良い、有理は中々良い仕事をしよるからな。特別にわちきも働いてやろうではないか」

小気味良く、くるくると回転して洒落た朝食への期待を表現しながら、風見は食パンを焼きに席をたつ。まったく、調子の良い奴だ。「トースターというのも便利だ。パンを焼くための機械とはひどく限定的な気がしておつたが、こいつはオールマイティー意外となるでもこなしてくれる。有理があらぬ時の食事も、こいつがおれば乗り越えられるというのだ」

目を輝かせ楽しそうにトースターのつまみを回す風見の姿を見てみると、少なくとも僕にとってはただの女学生にしか映らない。

そりゃあ最初は、相手は神様だと怯えたり、敬つたりもしてみたが……、今となつては遠い過去の出来事のようだった。

五歌（1）（後書き）

ところわけでいわゆる新章突入。

この言葉を使うとそこはかとなく打ち切り臭が漂います……。

例の「」とく見切り発進。

うん……なんとかなるよね。

できれば週末連休中にもう一回更新する予定です。

五歌（2）

思えばネタふりは明里さんの事件解決時には終了していた。

道中、道端でボケーツと作戦を練っていた神様に、僕たちが道を尋ねたのはまったくの偶然。下界で起こる珍妙な事件に出しゃばり、そろそろ解決してやろうかなと思っていた神様と、作戦決行日時が同じだったのも偶然。

それを面白く思った神様が気まぐれを起こしたのは……おそらく、僕らが利用されただけなんだろう。

「あの社長が一目置くほどのVIP扱い……。そもそも国に天然記念物扱いだもんな、あいつ、こんなとこいていいのかよ、ほんとに」件の神様をきちんと形容する術を僕は持っていない。

けれど、今までの情報を総括するに、彼女たち神様は天然記念物のようなもので、少人数ながら僕たちただの人間の生活を見守ってくれているらしかった。

オカルト方面の事象に首を突っ込み、『吸血鬼』や『異能力』はただの病気だと言いはる僕たちにとつては嘘のようなほんとの話。

「恋歌さん、起きてますか？」

短く急な階段を上がり寝室へと足を運ぶ。

平屋の二階というか、屋根裏部屋のような小さなスペースに、恋歌さんの寝室と、客間が並んでいる。一週間ほど前は空き部屋だった客間には風見と書かれた可愛らしいフォントの看板がぶら下げられていた。

「起きてますか？ もう朝ですよ」

軽くノックをしてから勝手に侵入。昨日も仕事で遅かったのか、恋歌さんは完全オフモードで夏にしては分厚い布団の中で丸まっていた。

「またクーラーつけっぱなしですか？ まあいいんですけど、電気代的には間違つてますが……」

恋歌さんの部屋には年中コタツが出しつ放しだった。いわく、真夏にクーラーで冷やした部屋の中、コタツに温まつてアイスなんかを食べるのが至福の一時らしい。

夏の暑さも薄れてきたのか、冷房がガンガン効いた部屋は肌寒いほどだ。

「ん？ もう、朝なのね……」

「今日なんか用事あるんですね。風見なら先に一階で朝御飯食べてますよ」

布団越しに肩を揺らすと、もうさりとした動作で恋歌さんが起き上がる。恋歌さんはまだ眠いのか、目を擦りながら僕の姿を確認するじゅっくりと口を開いた。

「有理君がこの時間にいるってことは……じゅく、じゅく？」

「半熟のいい感じのが出来ましたよ。冷めない」

「テンを開けながら、僕が答えるやいなや、恋歌さんは素早い動作で身支度を整え、一階へと下りて行つた。

「相変わらず、一手間かかった朝食は恋歌さんへの一番の田覚ましなんですね」

なんて咳きながら嘆息してみたりする。

食い扶持が一人増えたことだし、料理のレパートリーを増やすといつのも、悪くないかもしねり。

五歌（2）（後書き）

更新速度があ……。があ……。

忍びねえ、忍びねえなあ。

週一更新だけは守つていきたい今日この頃。

そんなわけで、新章突入。まだ話が動き出してないですが……今回
は戦闘やら敵もいないうつたり仕様の予定です。

「というわけで、本日は女子高に行きます、女子高」
時刻は朝の9時過ぎ、通勤ラッシュが終わり空きだした大通りを
車の助手席からぼーっと眺めてみたりする。

「唐突なのはいつものことなんで別に驚きませんが……車、やつと
戻ってきたんですね」

「そうなのよ、そうなのよ。私の愛しのカプチーノちゃん。パワー
アップして復活よ」

以前の依頼で銃撃戦に巻き込まれ名譽の負傷退場を決め込んでいた、恋歌さん溺愛の軽スポーツ自動車。どうやらつい最近、修理屋から戻ってきたようだ。

「ふむ、この車はわちきも好きじゃぞ。ちと後部座席が狭いがな」「文句言つんじゃないの、後部座席なんて無茶ぶりもいいとこだつたんだけど……。いやー整備屋のおじさんに感謝しないとね、さすが社長の知り合い、確かに腕だったわ」

以前は二人乗りだったこの車も、これからはなんとかギリギリ四人乗り。助手席から後ろを見ると、無理やりこさえたような小さなスペースに、窮屈そうな座席が用意されていた。

「ケツ、ケツが痛いわ……。なんじゃわっぽ、ジロジロ見よって」「いや、そういう格好してると、風見も立派な女子高生に見えるなつてさ」

お尻を押さえながら、狭いシートに不機嫌そうに座る風見の姿は上品なブレザーの制服姿。僕も大学に入つてから電車や街中で時々見かけていたが、なるほどこれがかの女子高のだつたのか。

「山ノ宮女子高等学校。いいとこのお嬢さんらも通うような、歴史ある学校……とかいうのらしいわ。周りは山しかないけど。有理君も知ってるんでしょ？」

「はい、大学の友達なんかがよく騒いでます。秋になるとあそこの

学祭の招待券が高額で取り引きされたり……」

「えりくべタな」としてんのねえ。今時招待制の学園祭つてのもど

「かと謂う」

大学の友達の台詞を借りるなら、山ノ宮女子高はレベルの高い可愛い子も多くて、しかも制服が可愛いときている。学園祭という名目で、普段踏み入ることのない彼の地に招かれた者たちは皆一様に、まさにあそこは桃源郷、などと供述し男どもに羨ましがられるというのが例年の決まりごとらしかつた。

「せひほつ、そいつはこい事を聞いた。わっぱ、用意してやるから

自称神様がえらく小市民的なことを言つてくれるなあ……」「半ば呆れつつ言葉を返す。

だつてなあ、恋歌は思いの外厳しげ、[[[じやああのど田舎の

「私は眞物やらお賽銭も期待できんからさ」「私だつて、最初は戸惑いもしたけれど……。神様たつて、中身は『コレ』なんだものね。それにあなたの父上からも、ついでに間接的にウチの社長からも、くれぐれも宣しくされてんだから半端はできないわよ」

「ち、こんな予定ではなかつたんじやがなあ。もつと、こち
らでも崇め奉つてもらつつもりだつたんじやが」

僕らとしては、『こんなのが神様でありがたかった部分も大き

自分とは違う、圧倒的な力を持つていてる存在でも、話が出来る見
た目に同期した歳相応の反応を見せてくれたおかげで、今となつて
は僕も恋歌さんも風見への遠慮は完璧なほどになくなつていた。

「風見もついに女子高生デビューですかあ」

「そうねえ、嬉しいやら恥ずかしいやら。今日は転入手続きだけだ

隣でハンドルを握る恋歌さんの方を見ると、なんだか緊張したよ

うに頬を硬直させていた。どうやら、タイトな黒のスーツにストッキングという今日の格好は正装ということだったらしい。

一方で僕は、適当に自宅から着てきたジーンズにパーカーなんてラフな格好だけど、よかつたんだろうか。

「ところで、この場合僕は風見の何として学校に行けばいいんですかね……」

「私は名田上保護者になってて、暇そうにしてた有理君を拉致した張本人だけど……どうしよ。さすがに家族つてわけにもいかないし。親戚、従兄弟とか？」

「その場合、どっちが上で、どっちが下なんですかね？」

「さ、さあ？ どうなのかしらー」

棒読み + 愛想笑いで返された。僕が年齢に対しても成長しないこの見てくれる気にしているのを知っている恋歌さんは、この手の話題になると焦ったような態度になる。

曰く、そういう時の僕は怖いらしい、オーラとかが。

「もちろんわっばが下に決まつところが。内面も、外見もあきらかにわちきの方が成熟しとるからの」

人よりも遅い時の流れで生きているらしい神様であるところの風見は自信満々にそう答えを出した。

長い年月を経て、どうやらこいつは気を使つたり、他の人間に配慮するなんてことを学んでこなかつたらしい。

けれどまあ、そんなところが人間らしくて、庶民派の神様というのも悪くないと思えてしまう。

「どの口が言うんだか……。まあ、お前が僕より成熟してるってのは認めるけどさ。いや、冷静さでは僕のほうが上かな……なんだか負けを認めたくないし」

ついつい口では悪態をついてしまっけど。

そういう意味では僕もまだまだ子供っぽいのだろう。

五歌（3）（後書き）

色々設定不足が露呈してきた今日この頃。

うーん、事務所とか今書いたのと、昔書いたので、情報が違ってる場所とかが現れたりしてきます。
気づいた所はその都度修正。

プロットとか設定とかあんまり書かないんですが……。 じつはこの长期連載になるとやっぱり困るのですね。

なんか矛盾があつたらごめんなさい（汗

追記：

カプチーノという軽自動車かつ、スポーツカーな車は実在していて、
実際は四人乗りに改造するのものすこーく大変らしいです。って
いうかほぼ無理くさい……。

トランク潰したり、ボディをちょっといじつたりとか……。あん
ま詳しくないんですがw

恋歌さんは、神の腕を持つた整備工が、運良く手元にあつたパ
ツを使い、カプチーノの元の外観を損なわずに、奇跡的にトランク
を潰すことでき後部座席の増設に成功した。

ぐらいの設定にしておきましょう。

きっと有り得ないぐらい狭いです。後部座席は多分車検ぎりぎりの
安全性に違いない。
うん。

ファンタジーですから（逃げ口上）

五歌（4）

車を止めて、でかい敷地内をキヨロキヨロしながら進む。下駄箱へと向かい歩く最中、部活動か何かで夏休み中だというのに朝から登校する女の子たちの姿が見えた。

女子高つていいものだなあ、なんて無表情で喜びながら下駄箱をくぐり来客用のスリッパを拝借していると、こちらの到着を知つていたのか、すぐさま若い女の人がやつて來た。

「あなたが、東雲風見さんね。9月からよろしく、あなたの編入する2年百合組担任の高梨です」

綺麗にセットされたボブカットに小振りな顔。清楚な服装に、肌寒いのかお嬢様みたいな手袋をしたお姉さんが僕らを出迎えた。いかにも女子高、女子大学を経て純粹培養された箱入り娘つていうのを連想してしまい、こういう人がお嬢様私立女子高の先生をやつているんだなあと、まじまじと見てしまった。

「保護者の方もわざわざ」「足労くださいありがとうございますね。たいした話は出来ませんが、校内の雰囲気だけでも体験して行ってください」

応接室まで案内することなので、担任の高梨先生の後を着いて行く。女子高初体験の僕としては、ついつい校内をキヨロキヨロしてしまった。

「皆さんはご親戚かなにかですか？」

「ええそんなところです。田舎の親戚がこの子に都会の生活を教えたいということで、今は私の家で面倒を見ているというわけですわ」

「僕はこいつの兄貴分みたいなもんで、一応大学生です」

訊ねられる前に、先手を打つて釘を差しておいた。

「そうですか。ご両親とは離れているということで、少し心配していましたのですが、皆さんのような方たちが周りにいれば安心ですね」

「ふむ、わちきも感謝はしておるぞ……一応」

社交辞令なのか、けれど嫌味のない笑顔で話す高梨さんに、風見がドヤ顔で言葉を返した。

「風見さんも面白い子みたいですね。今から新学期が楽しみです」
面白い子というよりは、ちょっと頭の残念な子に分類されそうのが気がかりだ。特に学校という空間では……、まあいじめられるなんてことは万が一にもありえないだろうけど。

「さて、ここが応接室です。あつ、風見さん、すいませんがここに座つてちょっと待つていてもらえませんか。保護者の方に少し話があるので」

「うお、ソファーがふかふかじゃ。こいつは気持ちいい」

高級そうなソファーやら、芸術品が置かれた応接間に早くも興味津々なのか、風見は楽しそうに室内に入つていく。

「すいません、お一人には……廊下で申し訳ありませんが、少しお話があります」

「なんでしょうか？」

突然の事態に戸惑う僕の横で恋歌さんが爽やかに笑顔を浮かべ、会話を続ける。

「お一人はそのオカルト専門の何でも屋、みたいなことをされてたりしませんか？」

「ええ、そう思つていただいて問題ありませんが、なんでまた「存知で？」

「実は私のクラスに宮城霞美さんという生徒がいまして……顧問をしている華道部の部員でもあるんですね。彼女の話を聞いて、もしや、と思つていたんですが、やっぱりそうでしたか！」

高梨さんが、少し表情を崩し、先生の顔というよりは一人の人間として嬉しそうに笑う。

「本当にありがとうございます。彼女、学校を休みがちだったので、一学期の終わり頃からきちんと来てくれて……お一人にはなんて感謝していいものか」

「いえいえ、そんな先生にまで感謝されるなんて……」

霞美さん、といえば春の終わり頃に依頼で関わったポルターガイスト現象を起こしていた女の子だったと記憶している。

「あなたが噂の有理君ですよね。恋歌さんのことは、風見さんの保護者資料で拝見して、もしやと思つた程度ですが、あなたのことはすぐにわかりましたよ。霞美さんが話す特徴通り、ほんとに可愛らしい容姿で」

「それはそれは、光栄ですね。噂してくれてるなんて」

感謝してもらえるのは嬉しいけれど、霞美さんからは別の感情まで向けられている気がして、半ば返答が投げやりになつてしまつた。そもそも可愛いと言われても、嬉しくともなんともない。

隣では恋歌さんが、あらあらつぶつぶ、みたいな顔をして楽しそうに微笑んでいた。

「お一人に会えてよかったです。でも、まずは風見さんの編入案内など……」

そして、少し小声になりながら、高梨さんが言葉を続ける。

「その後でいいので、少し時間をいただけないでしょうか？ 山ノ宮からの正式な依頼ということになるかと思いますが、少し困つたことがあります」

意外な言葉に驚きつつ、恋歌さんへとアイコンタクトを送る。そしてお互に、一カリと笑い頷いた。

「わかりました。是非、」相談ください」

風見の付き添いだけでは退屈しそうだと思っていた所に、これ幸いとやつてきた興味深い話。なんだか面白そうになつてきたと、ついワクワクとしている自分がいた。

五歌（4）（後書き）

なにかを書つもつだつたのと、なんだつけかなー。
とか思いながらのあとがき。

とくに明記してませんが、

有理西は本名で、苗字があります。
恋歌さんの恋歌といつのは、称号といつか、表名とかそんなものに
近いです。でも、正式な書類でもそっちで通るので、今はそれが本
名みたいなもんなんでしょう。
なので苗字もあるのでしょうか。

考えてませんが。

……え、当初からやうこいつ予定ダタンデス。

まあ、
社長とか
クロネコヤマ
とかそういう一ヶクネームで通してこきたいなーと思つてこたの
す。
なのでメインの一人も、苗字でほんじはおやうくなーなど、予想
中です。

五歌（5）

「風見さん？ 後は自由見学でいいのね？」

「わちきにどんとまかしておれ、これから世話になる場所じや、色々と回るところもあるでな」

一通り、編入案内として、高校の生い立ちから施設や部活動、試験や学校規則などのややこしい説明を受けた後、風見は真っ先に自由見学を切り出した。

田舎から出てきただけあって、色んなものに興味津々なのだろう。神様が故郷でも学校に通っていたかは定かではないが、少なくともこんなハイソでナウい女子高の施設は初体験に違いない。

「気をつけてねー。なんかあつたら連絡すんのよ」

恋歌さんの呼びかけに手の甲をひらひらさせて応えながら、風見はさつさと廊下の角へと消えていった。

「さて、お一人への相談なんですが、事情がありまして、すいませんが私から説明させていただきます」

高梨さんに招かれ、再び応接室のソファへと腰を下ろす。

「保護者の方、というよりは学校に来られる業者の方として話さないといけませんかね。すいません、なんだか混乱してしまって」おどけたように笑いながら、高梨先生は仕切り直し、手元に持っていたクリアファイルからいくつかの資料を取り出した。

「今回の依頼内容ですが……こちらの案件について調査してほしいといつとこりでしょうか」

渡されたコピー用紙を手に取り確認する。

「七不思議ですか」「七不思議ですねえ」

僕と恋歌さんがそれぞれ間の抜けた言葉でそれを表現した。資料の最初の方に白紙のスペースを大量に取りながら、7つの言葉が印字されている。

- ・トイレの鈴木さん
- ・動く人体模型
- ・校長ズラ疑惑
- ・13階段
- ・ベートーベンの絵画
- ・切り裂き女
- ・保健室の佐藤

「これまたベタなもんが出て来たもんだ」

「さすがに僕もびっくりです。あ、驚いた顔になつてます、僕」
自分でも珍しい表情になつてしまつた氣がしたので、恋歌さんに確認してみたりした。

「校長先生まで話題にされていて……。これを小耳に挟んだ学園長から、私が個人的に相談されていたというわけです」

苦笑いを浮かべ、高梨先生がおどおどと頭を下げる。

「校長先生のズラは実はホントだつたりするんですが。それはいいんです、ただ生徒に実害が出ていて……、ほんとうに心靈的なものなのか人為的なものなのか、すみませんが生徒の安全のために調査をお願いします」

校長のズラは本物なんですね。

と声には出さずに突っ込んでみたりする。

「お任せ下さい。個人的にもこういう話は大好きですから」

恋歌さんは高梨先生の両手を握り、まかせてくださいとばかりに頷いている。

けれど、その横顔は頬がつり上がつた見覚えのあるものだつた。僕をいじめる時にもよく見かける、楽しいおもちゃをみつけた、そんな感じの表情なのかもしねり。

五歌（5）（後書き）

約一週間ぶりの更新に
(遅れた的な意味で) くやしいのう、くやしいのう

とかコネタをはさみつつ。
やはり習慣は大切ですね。ちょっと時間が空いたため、
悪かったような。

こういふのはタイピングなんですが
筆のノリが

日々精進ですね。

五歌（6）

「さて、検査開始と行きましょうか」

風見は何処かへ一人旅、高梨先生とはいくつかの資料をもらい今は仕事に戻つてもらつてゐる。僕と恋歌さんの二人だけのほうが動きやすとの判断だ。

「女子高と言つても、夏休み中となると結構静かなもんですね」「男にありがちな幻想は捨てるもんね。女子高なんてね……女子高なんてね……」

「ふつぶつと、恥々しげに咳く恋歌さんの様子から一つの疑問が浮かぶ。

「ずいぶん女子高に詳しいみたいですね、恋歌さん」

「そりやそうよ。私の最終学歴も女子しかいない学校だつたから」「思い出したくないと頭の押さえながら、唇を噛む恋歌さん。どうやらよほど大変な目にあつてきたようだ。

「それにそもそも、女というのは陰か陽で言えば陰。オカルト的に言つても、女子高つてのは色々惹きつけたりもするらしいわよ。ま、そんなのよりも先に疑うものがあるとは思うけど」

意味深な笑を浮かべ、恋歌さんがある一室を指す。

「というわけで、さつさと行きましょう。まずは音楽室つてことだ」通常授業が行われる教室が並ぶ棟の隣側、音楽室や美術室、文化部用の部室等が並ぶ特別棟の三階。高梨先生からももらつた見取り図通りの位置に音楽室という札が確認できた。

「ベートベンの絵画の田がキヨロキヨロと動き出すなんて、えらく古典的な怪談ですよね」

「古典的だからこそ普遍なのよ。まあ時代が育んだ様式美つてところかしら」

教室の前で耳を澄ますと、細々とした声が聞こえてくる。時折、管楽器特有の音色が響いてくるとこりを見ると、吹奏楽部の部員た

ちが、本格的な活動の前に馱弁つているところがだらり。

「というわけで早速お邪魔しましょうか」

「なんか面倒臭うなので、設定は恋歌さんにお任せします」

「ううううと、笑いかけられてしまつた。楽しそうに……」

「お邪魔します、吹奏楽部のみなさん。OBの山宮麗華といいます。こつちは弟の雄輔といつて……」

ドアを開け、がやがやとした音楽室に突撃する。案の定設定は僕が弟、偽名なんかを使って適当に誤魔化すつもりらしい。キヨトンとする女子生徒に軽く会釈して音楽室の中央へと進んでいく。

この先は恋歌さんの話術頼り、まあ女の子をたらし込むのに定評のある恋歌さんのことだ、きっと上手くやつてくれるだらう。

「これ雄輔つていうんですけど、どうです、可愛いでしょ。これでも大学生なんだけど」

僕としては自分に火の粉が飛んでこないことを祈るばかりだった。なんかもう手遅れっぽいけど。

五歌（6）（後書き）

今日は祝日です。

なんでも文化の日とかいう日らしい……。

主に寝てるだけの休日でしたが何か。
と意地をはつてみる。

「果てしなく疲れました……」

「あらあら、女子高生に囲まれて大人気だつた人がいう台詞かねえ」
隣を歩く恋歌さんは意地悪な顔でこちらに笑いかけてくる。それに仏頂面で返しながら、小さく溜息を吐いた。

「そうなるように誘導したのは誰ですか、まったく」

音楽室を出て次の行きさへと移動中、隣の恋歌さんを睨みつけながら先程まで行われていた茶番劇を思い返す。

「情報を訊き出すためだからって、僕をダシに使う必要はなかつたよつに思ひますが」

恋歌さんあらため、麗華さんの弟雄輔として紹介され僕は、女子生徒たちの警戒心を解かせるためのダシに使われたよつだ。

可愛いだの。

アドレス教えてだの。

また来てくださいだの。

持て囃されて嫌というわけではないが、じつせ僕みたいな童顔は可愛い可愛いいわれるだけの寄せパンダ。まあ僕は恋歌さん一人に操を立てているつもりだから、関係ないけどや。

「次はどこに行くんですか？」

「保健室ね。怪談の舞台になつてゐるし、ああいつ場所は情報が集まりやすいのよ」

高梨先生からもひつた資料をたどり、保健室の場所を確認する。保健室は特別棟の一階らしく、スリッパの音を響かせながら、音楽室のあつた三階から下の階へと向かつて行く。

「で、収穫はどの程度」

「そりやもう、ばっちらりと、おかげをまではほとんど解決したも当然」

「自信たつぱりにそんな返事が返つてきた。

「僕にはあんなどうでもいい会話の中に有用な情報がそれほどあつ

たとは思えませんけど」

「有理君もちよつとは女の子の慣れないとね。あれぐらい普通よ普通

通」

女性が三人寄ればかしましいなんて言葉もあるけど、その通りで、僕みたいなうぶな少年がそんな会話に着いて行くのは無理だつた。情報を拾つてちょっとは貢献してやろうとも思ったのも最初だけ、後は周りの勢いに押されるばかりといつ結果だ。

「怪談なんてのはほとんどが勘違いか錯覚、あるいは『人間』の仕業なのよ」

その『人間』というのは、靈体やらを含めているのだろうか。恋歌さんの表情は音楽室を出た時からかけている伊達メガネのせいで読み取ることができない。

「その理屈で言えば、ベートーベンの絵画なんて動くはずもないですよね」

それぐらい僕にだつてわかる。どうせ暗い室内で、『なんとなく』動いたような気がした、というのが何時の間にやら怪談にまで拡大解釈されたにすぎない。

「それはどうかしら？ 錯覚なのか、本当にそういう気配がか、本当の所は簡単にはわからないようにできるのよ、世の中つてのは」

意味深に笑いながら、恋歌さんが言葉を続ける。

「音楽室で聞いた話を総括するに、一番生徒への実害がでるのがこの切り裂き女ね……。なんでも、人や物に突然切り裂いてくる物騒な女がいるつて怪談らしいけど」

「言つてましたね。友達の友達？ がなんでもカバンを切り裂かれたとか

「物騒な話よまつたく」

呆れた風ではない、棒読みの白々しい同意。

「ま、一番の実害は怪談という噂話が生徒たちに広がつてるとこね。疑心暗鬼、怪談という土台があれば本来居ないものまで現実

のものにされてしまう。『 うなれば、怪物や妖怪も、人が創りだしたものだとも言えるわね』

リアリストなのか、そうでないのか相変わらず恋歌さんはわかりにくい人だった。

もつとも、自分自身が異常なのはまだしも、身边に『 神様』 がいる僕たちとしてはそう簡単にオカルト現象を否定するわけにもいかない。

「 次は保健室ですね。さつさと行きましょう。どうせ、恋歌さんは答えまで教えてくれませんから」

だから自分で考えるしかない。

足りない頭を使って、ぼんやりと考えてみるけれどすぐに挫折する。そもそも、靈体が見えるらしいメガネを持つている恋歌さんと僕とでは、前提知識も情報もすでに大きく差があった。

精々僕にわかるのは、『 いる』 ような気がするとかそんなあやふやな感想ぐらいで……。

「 有理君？ ついたわよ？」

考え方をしているうちに保健室に着いたようで、恋歌さんが一声かけてきた。

「 あ、大丈夫です。ちょっとと考え事してただけなんで」

そう返事をすると、恋歌さんが保健室のドアを軽くノックする。やがて女性の返事が返ってくるのを確認してさつそく入室するためドアをスライドさせた。

ぞわりとした感覚。

保健室の中に足を踏み入れた第一印象はまさに、『 何か』 人以外のモノが部屋の中にいるという感触だった。

五歌（7）（後書き）

休みの日、最近ずっと雨な気がします。

現在愛用中の原動機付き自転車、雨天時は起動確率が絶望的になります。

とこりわけで今田も引きこもり。

が基本なのですが、外出しないわけにもいかないのが一人暮らし。
今日はスーパーに買い出しに行って、カレーを作ろうと思います。
と意味もないつぶやきをあとがきに……。

「あらあら、こんなお密さんがくるなんて珍しいねえ」

保健室の先生と言えば、どんな人物を想像するだろう。優しい、知的、聖母、なんやらかんたら、医療関係者は白衣の天使と揶揄されたりもする、そういう意味でそれらのイメージを抱くことは普通の発想だ。

年上のお姉さんスキーを自称する僕としても、その辺りはぬかりない。最近は、明里さんや高梨先生とか、綺麗な年上に会う機会も多かつたし、期待するのも仕方がないと思つ。

そして、期待して入室した僕を出迎えたのは、

「ちょうど夏休みで暇してたところなんだ。ちょっと座つて行かないかい？」

どこにでもいるただのオバサンだった。

もしかすると、もしかすると、数十年前は絶世の美女だったのかもしれない。品のよさそうな動作や、優しそうな表情からはそれを感じさせられるような気もしないでもない。

「すみませんわざわざ、私こういうものでしてちょっとお話を……」

『外向き』用の名刺を差し出し、保険医の先生へ適当な社交辞令を述べながら恋歌さんが今回の依頼について搔い摘んで説明する。聞こえる情報をまとめるに、どうやら今回はそれなりに信用のある探偵事務所という設定らしい。

「こちら、助手の有理君です」

「ど、どうも」

探偵事務所という、我らが超常現象研究所の一つの側面から紹介したこともあり、今回は本名での紹介だつた。

軽く会釈を返し、さつと入室をさせてもらひことにする。綺麗な年上お姉さんを何気に期待していた僕は、意氣消沈しさつと差し出されたパイプ椅子に腰掛けた。やさぐれた僕は中々保健室の雰囲

「気にマッチしてると自負してみる。」

本来この場所は、サボりたい盛りの高校生だと、ホントに調子の悪い生徒がやってくる場所だ。

だから、こんな気配は異質だ。

冷たい、背中を微力でなでられ続けるような感触がこわばゆい。営業トークと、社交辞令を続ける恋歌さんと先生そつちのけに、気配の先をたどってみると、カーテンで仕切られたベッドの列の一番奥。窓際のベッドに気配があった。

今のところ危険な感覚はない。

以前出合った、大学の同級生草薙さんのところの地縛霊とも違う。けれど、心霊関係初級者であるところの僕からしても気配を感じることができるところのは、それなりに形ができるところだ。

「すみません、それでは私も座らせていただきます」

「いえいえ、この時期になると楽しみはあんたさんみたいなお密さんとの会話ぐらいでねえ。恋歌ちゃん面白いし、おばさん大歓迎よ」社交辞令を終えてずいぶんと打ち解けた恋歌さんと保険医さんが僕の近くに椅子に腰を落とした。

「さて、何から話そうか……」

「そうですね、怪談話についても興味深いところなんですが、まずは上村さんの昔話なんか、私としても興味がありますわ」

植村さんといつのがこのオバサンの名前らしい。

植村さんは、恋歌さんの言葉に機嫌を良くしたのか、滑舌の良いはつきりとした口調で、昔語りを開始した。そんな女性特有のかしましそうな話題に僕はひつそりげんなりしていると恋歌さんがこちらに向かい意味深な笑を浮かべていた。

そして、視線で一番置くのベッドを指す。

ということは、この保健室で感じる超常現象のヒントが上村さんの話の中にあること、ことだらうか。

「中々興味深いお話です」

そう思つと、聞き入らないわけにはいかない。

作った、愛想のよさそうな表情と声色で、上村さんの話に合ひの手をいれる。話はちょいど、上村さんの若かりし頃の武勇伝へと突入していた。

なんでも、この女子高に赴任する前は、男子高生に言い寄られただの、モテただの……。話を聞いていると、品が良くて優しいのに、このフランクさだ。

生徒に人気があるのはわかるが……。

ベッドに潜まれるほどの思いの影は見つからない。
ましてや、心霊現象というのは人が死後、形を変えて現世に留まるからこそ生まれるのが基本だと思つ。人が死んだりというのは、先生にとつてはとても大きな記憶だ。

あえて伏せているという可能性もあるが、

「あら、それでその生徒さんは　ほんとですか、それはすういですね」

恋歌さんの話術で聞き出せないとなるとホントにそんな出来事はなかつただけかもしれない。

思考停止し、ヒントを求めるように恋歌さんの横顔をちらりと見る。会話の合間を見て帰ってきた返答は、綺麗なお姉さんの意地悪で魅力的な笑顔だった。

五歌（8）（後書き）

昨日は1-2時間ほど懇親をむかはりました……。

時は金なり。

「利用は計画的ですね。

「あら、もうこんな時間、お一人はお昼はいいの？」

早朝から山ノ宮に缶詰状態、色々と駆け回っていたせいで時間を忘れていたけれど、ケータイで時間を確認するとすでに正午を少し回っていた。

「失念していました……購買ぐらには夏休みでも営業しているんでしょうか？」

「ええそうね。教員用のお弁当も幾つか用意されてるし、おばさんがついてに恋歌ちゃんたちの分もいか、掛けあってみるわ。それでここで一緒に食べなさい。ね、ね、最近生徒たちで流行つてる吸血鬼怪談なんかもまだ話してないし」

上村さんはまだまだ話しきりないといった様子で、わざわざ昼食の世話をしてくれるようにだ。

「そうですね、ではすいませんがお願ひします。それと」

恋歌さんが一呼吸タメ、今まで少し違った声色で言葉を呟く。

「『ひとつでもうえますか？』私たちはこちらで待っていますので」

「わかったわ。ちょっと待つてね」

上村さんは氣のいい返事を返すと、さっそく購買へと向かって保健室を出ていった。

「部外者だけ残して出でていく保健医さんですか……。恋歌さんもワルですねえ」

「あらわかった？ でもそんな言い方は侵害だわ。これは言靈と呼べるほどの強い制約じやない。ちょっとした『お願ひ』程度の言葉なんだから」

恋歌さんの言葉の力に縛られて上村さんは保健室から去り、残されたのは部外者一人。恋歌さんの目的はおそらく、あそこの何か。視線は窓側一番置くのベッドへと向かられる。

「あれって、やっぱり幽霊なんですか？」

「うーん、これは中々希少な在り方をしている見たいだけど……まあそんなもんね。私に言わせれば所詮は人の範疇なんだけど」

頑なに、超常現象を人のサガで説明しようとする恋歌さんは、取り出した伊達メガネ越しに、ベッドの周りを調べ始めた。

「ところで、これの原因はなんなんですか？」上村さんの話を聞くかぎりだと、人が死んだり殺されたりなんてことはあつたとは思えませんが」

幽霊なのだから、原因は突き詰めればそんなもの、事故や事件、悲惨な出来事もなしにこの世に留まる魂なんてのは考えにくい。

「ふつふつふー、今回も私好みの現象で、ついつい頬が緩んでしまうわ」

嫌に楽しそうな声を上げ、恋歌さんはベッドに近づきしゃがみ込むと、四つん這いになりながら、ベッドの下へと腕を伸ばした。

恋歌さんのタイトなスースカートとストッキングの奥、見てはいけないけれど、とてつもなく魅力的な黒色以外の色合いが微かに見えそうになる。

「……見てた？」

「いえ、なんでも」

目的を達つしたのか、すんでのところで服装を整え立ち上がった恋歌さんと視線が合つ。疑惑の眼差しを向けられたが持ち前の無表情で返事をする。たぶん、誤魔化してはいないうけど。

五歌（9）（後書き）

最近年を感じます。

というよりも、大人になつてしまつたんだなーと。辛うじて学生ながら。

20代でいられる時間も限りがあります。

なので、色々焦つていこうと決めた今日この頃。

とりあえず、軽く文庫本一冊サイズの物語を、書けるような人間に
なりたいです。

「まつさか、こんな簡単に見つかるなんて思わなかつた」

「それが、原因だつていうんですか？」

ベッドの下の探索を終えた恋歌さんが手にしていたのは一枚の古ぼけた紙切れ。じつと観察してみると、どうやら乙女チックな外装の未開封の手紙のようだ。

「そうかな、幽霊君？」

恋歌さんが何もない空間を見つめ、そう声をかけた。もちろん返事が返つてくるはずはない。伊達メガネの下では、どうこう光景が広がっているのか、うんづん頷くと恋歌さんはニンマリを頬を緩めた。

「まあなんていうのかな。今回も乙女チックな思念によるところの超常現象だつたというわけだよ」

勝手にまとめに入りだした恋歌さんの言葉に、耳を傾ける。僕には何がなにやらちんぷんかんぷんだつたが、さすすりあの手紙は……。

「そつラブレター。これが保健室の奥のベットの下に貼り付けられてたわけ。上村先生の話からすると、おそらく先生宛に過去誰かが残していくつたんでしょうね。恥ずかしい、でもこの思い伝えたい！」

泣かせるじゃない乙女じゃない、お姉さんこうこうの好きよ」

恋歌さんのゴキゲンの原因は、どうやらそういう乙女な現象が過去にあつたからといふことらしい。ついつい呆れて溜息を吐き出しながら、僕はジト目で恋歌さんを見つめた。

「で、なんでラブレターで靈体なんですか？ 僕でもわかるほどに、なんらかの『存在』がいるようですが……。誰も死んだりしたわけじゃないですよね？」

ラブレターを隠し、その後突然の死を迎えた生徒がいれば問題は解決。そりやあこんな保健室の端っこに隠れて、現世に留まる理由

もあるとこ「うものだ。

けれど、今回はそんな大それた事件はないよつて思つ。靈体から感じる雰囲気も雑罰とした感じではなく、ただそこにいるという存在感を放つてゐるだけの、無害なもののように思えた。

「時に強い思つていうのはね、残留思念としてその場所にこべりつぐ。生靈なんて表現が近いかしら」

ベットの上に居座る『何か』を指さしながら、恋歌さんが語り始めた。

「まあ本来は、いくら乙女チックな恋愛感情だからって、これほどの存在感を放つわけもないんだけど。この女子高は今、それなりに厄介な『場』を形成しちゃつてるからなあ」

そのわりには深刻さなんてまったく感じられないぐらいに恋歌さんは余裕綽々だ。

「逆に言えば、学校なんてのはこいつ『場』が生まれやすい構造をしてるんだけどね。閉鎖された空間、感性豊かなティーンエイジヤーたち、思春期特有の感情の「つねり」や「壓み」、そんなのがひしめき合つてるのが学校つてわけだ」

そう言葉の上で言われると、ずいぶん物騒な場所に思えてきた。

自分の中学、高校時代を思い出す。僕自身はその年令すでに無感情無表情なクールキャラ（笑）を形成していたせいで、傍観者になることが多かつた。

けれど、あの時代はクラスメイトたちにはそれぞれの悩みがあつて、それぞれの戦いがあつたよつて思つ。実際、殴り合ひの喧嘩やら、色恋沙汰の恨み辛みやら……。十一分に力オスフルな状況だったと言えるだら。

まあそう思えるのは卒業した今だからじゃ。あそこに通つ間はなんの疑問を持たず毎日同じように登校してた。

「保健室の佐藤ねえ。名前ぐらいは、間違わないでもらいたいわよね……」

指先でぐるりと回転させ、恋歌さんはラブレターの宛先をひらひら

に見せてきた。

田中さんですか。佐藤なんて呼ばれたら良い気はないですね」
なんとかわいそうな生靈さんだった。

「ま、それでも生徒たちの勘違いやウワサ話のおかげで顕現できた
わけなんでしょうけど。こいつは気づいて欲しくて仕方なかつたん
でしょうね先生に……、これだけの存在感だもの。さ、とつとと逝
つた逝つた、この手紙は私たちが責任を持つて届けとくから」

語りかけるように、何も見えない空間に言葉をかける。靈体に目や耳があるかどうかはわからない、そもそも僕には相手の姿は見えない。けれど、一瞬ふつと空気が緩やかになり、そつと優しく何かの存在が胡散していくような感覚が伝わってきた。

۶۰

「ううん、恋愛もん。」

ただ、一つだけ疑問が残つた。顎に手を当て混乱する頭を落ち着かせようと意識する。

「……、女子高ですね？」昔から、そりやあ何かの表紙で男の人が上村さんと出会うつてことも考えられますが、それにしたつて。やつぱり女性からのラブレターという可能性の方が「便箋も乙女チックだつたし、字体もどことなく纖細な感じがした。そりやあ、それだけで確定させるには不十分だけれど。

ふふ どうせなのがしらねー

恋歌さんはすつとぼけ、答えを知っているのに教えてはくれない。「女、女同士? いや、上藤じやあるまいし……。否定する気はないけど、え、でもさすがにそれは……。いやまともしかすると女子高に出入りする業者の男性といつ可能性も。なにも生徒に限る必要はないはずだから……」

じつやら僕の思考はぐるぐると空回りするばかりで、答えに辿り着くことはできやうにもなかつた。

五歌（一〇）（後書き）

なんか寒いこと思つたら、もうコタツを出すよいな時期でした。

部屋を片付けねば……。

「まつたく、あんなのが怪談の種だなんて、やつてられませんよ」「つい愚痴を言いたくなる。すつかり日も暮れ夕方、廊下の窓からは夕暮れの明かりが差し込んでいた。僕達は保健室を後にして、再び学校内を歩いていた。

「往々にして、あんなのが、怪談の種つてことなのよ。ま、お弁当も美味しかったし上村さんの話も面白かったんだからよかつたじゃない」

恋歌さんの言つとおり、それなりに有意義な時間が過ごせたのは認めよう。けれど、わりと真面目に取り組んで七不思議なんて解決してやるぜー、なんて一人で息巻いていたこの気持をどこに落ち着けさせればいいのか、わからないのだ。

「残る七不思議は……。恋歌さん的にあるんですか？」

窓の外では楽しそうにはしゃぎながら下校する生徒たちの姿が見えた。時間も時間だけに、そろそろ今日の仕事は切り上げたいところだ。

正式な依頼でもあるし、今日のところは引き上げて後日また調査に来るというのもアリだけど、恋歌さんの表情から察するに事態はほぼ解決に向つているようだ。

「そうね、例えばトイレの鈴木さん、動く人体模型、13階段。なんてのはよくある怪談よね？ それに特に実害もない。この手のは大体錯覚だとか、七不思議にするための数合わせつてのが相場なんだけど。わざわざ私たちが捜査することではないわね。念のためお札の一つや一つ後日貼つてればすむ話でしょうし。と、なれば……もつたいたいぶつたように呼吸をタメ、恋歌さんは楽しそうに話を続ける。

「ジラを除けば、私達向けなのは、ベートーベンの絵画だの、切り裂き女、保健室の佐藤の怪談ってところが私の予想だったの」

「僕はそれも他の怪談と同じような、よくある話のよつて思いますけどね」

「そうね、たしかにそう。でも、I.Iの人の話を総合するに、保健室のベットからあるのはベートベンの絵画からは視線を感じる」ともあつたし、カバンを切り裂かれた生徒がいるって話もあつた」後できちんと調べてみないといけないけど、と続け恋歌さんが急に歩みを止めて、僕の方へと身体をすり寄せてきた。

「だから、私たちでできることをやりましょうってことだね。有理君、ちょっと職員室に行つて音楽室の鍵を借りてきてくれる?」突然の申し出に、ひとまず無言で頷く。

「にしてもなんで音楽室ですか? もう毎に一度行つたじゃないですか」

「あの時にいた人達、今はいないでしょ? 部活が終わつてつまり、恋歌さんは空の音楽室に用事があるということらしい。「妖怪やらお化けの対処も私たちの仕事だけれど、本質はもつと人間的問題の方でしょ?」

どうやら錯覚や、空想の類な噂話にまじつて、人の業が生み出した現実的な現象が混じつてているようだ。それは確かに僕たちの得意分野だつた。

五歌（11）（後書き）

ベートーベンではなく。
ベートーヴォンのが近い発音らしいですね。

これは恥ずかしい。

とはいっても外国の方の名前をカタカナ表記にするのは中々難しいらしいですが。

さてカレーを作るか。と意気込んでみる、休日の夕飯時でした。

「女子高ねえ……、もう生徒さんも帰っちゃったからあんまりありがたみないけど」

職員室で鍵を借りて、本日一度日となる音楽室に向かい廊下を歩く。

日が暮れ始め生徒たちの姿がなくなつた校舎内はどこか寂しくて、女子高だなんて甘い言葉が引っ付いていても、良い香りがするわけでもなくなんとなく幻想を打ち碎かれたような気分になつた。

「音楽室にもう一度来るつてことは、ここに何かあるんだろうなあ」
呟きながら状況を整理する。午前中に音楽室には一度情報収集にやつてきた、その場では他愛のない話に終始していただけれど、どうやら恋歌さんには音楽室という場所を確認する狙いもあつたようだ。音楽室での話、保健室での話……それぞれを頭の中で改めて思い出す。まず切り裂き女、というのが一番やっかいそうで生徒への実害がある怪談だ。

音楽室でも被害があつたらしく、吹奏楽の部員の人たちもやられたつていうのにきやぴきやぴと騒ぎながら楽しそうに話していた。察するに、この学校では怪談の出来事が『よくある事』になつてゐるんだろう。自分一人だけなら物騒な事件も、皆であれば怖くない。

むしろ、そんな非日常体験の共有がちよつとした学生生活の刺激や「ミミコニケーション」に一役かつていてますます止まらない始末。そしてさらに、出回り、拡散し、浸透した七つの怪談。それらは隠れ蓑でもあり、超常的な現象が力を得るための土台もある。

保健室の先生が、人体模型だのトレイの妖怪だの最近巷を賑わしているらしい吸血鬼事件だのを楽しそうに話していたのを思い出す。美形な吸血鬼が人を襲うだの、一番奥のトイレには何かがいるだの、夜の人体模型はすつごい速いだの、眉唾ものの話ばかりなのに、あ

あやつて数人でワイワイと話している分には、そんな人外な奴らがいてもよさそうな気がしてくるから不思議なものだ。

「あやしいのはベートーベンの絵画の怪談とかかな」

肩がけのショルダーバックに無理やり突っ込んでいた怪談の資料を取り出し確認する。誰もいない音楽室でふと絵画を見るとベートーベンの瞳が動いてこちらを見ていた。とかとか。

なんとも勘違いつぽい怪談だつた。そもそも歴史上の大偉人様がわざわざ動いてくれているんだから、感謝ぐらいしてもいい気さえする。特に音楽で成功したい人とかさ、御利益あるよ多分。

「恋歌さんお待たせしました」

どうにか頭の中がある程度まとまってきた所で音楽室に着いてしまつた。もつと時間をかけて考えて推理なんてそれっぽいこともしてみたかったが、所詮僕は恋歌さんの助手、事件解決を優先してプロフェッショナルらしくフォローに回りうと、これまたなんだかそれっぽいことを思つてみたりした。

「」苦労様、有理君。私の方も準備万端よ、車から持つてきたからね。あんまり遅かつたら、久々に頑張つて不法侵入しちゃおうかと思つてたところよ

「それ、たしか探偵七つ道具的な奴でしたっけ……」

恋歌さんはたまに依頼で使つてゐる探偵七つ道具的なもの（ピッキ グや改造スタ ガンなんてイリーガルな物も含まれる多分探偵とか関係ない代物たち）が入つてゐるバックパックを背負つてゐた。

「さ、名探偵、恋歌お姉さんの華麗なる推理をお披露目しよう」
とても自信ありげな表情で意氣込む恋歌さんを見て、どうせ名推理なんかないんだろうなあと嘆息しながら、僕は音楽室の力ギを開けた。

五歌（1-2）（後書き）

現在広島地方では雨です。

最近休日は雨がデフォルトな気がしてならない。

先日はカレーをつくりたので、今日はキムチ鍋を作りましょう。

なんか、最近料理の事しかあとがきで話していない気がするぜ……。

「ちーつて、お仕事、お仕事」

子供みたいな動作でウキウキ感を表現しているのか、恋歌さんは不自然にふわふわした動きで音楽室に侵入するとすぐさま奥の壁にぶら下げられた絵画たちの元に駆け寄った。

昼に訪れたような生徒さんたちによる賑わいもなく、入り口付近にあつた電灯のスイッチを押して電気の通つた音楽室の中は、どことなく寂しくて不気味さがある。

「有理君これ、なにかわかる？」

「なんですかこの黒いのは？」

黒い細長い橢円状の物体を取り出し僕の前で掲げられた。それなりの厚みの中心付近にはボタンがついていて、車のボタンキーに似ているような気がする。

「探偵七つ道具なんだから、探偵っぽいものに決まってるじゃない」あきらかに七つ以上の色んな道具が積み込まれたカバンを自慢気に見せびらかしながら、恋歌さんは断言した。僕はだまつて恋歌さんの掲げた道具を奪い取ると、早速ボタンを押してみた。

「なにも起きないです。壊れてます、これ？」

「真顔でよくも言うねえ。まったく」

恋歌さんはそんな僕の反応にあきれたように笑うと、わてつと仕切り直してベートーベンの絵画の方を指差した。

「使い方はそれで大丈夫なのよね。ボタンを押してなんか反応があればいいわけ、つてことであのベートーベンの近くでボタン押して欲しいんだけど、ねえ」

意味ありげな視線が僕に向けられる。ベートーベンの絵画の方を再び眺める、僕の上背の遙か上、あざ笑うかの如く歴史上の偉大な音楽家たちが並んでいた。

「僕じゃ無理ですね、主に身長的に、どうせチビですよ、ガキです

無表情で淡々と悪態をついて、恋歌さんを睨みつけた。

「「じめん」じめん、でもどうやって検査してもらおうかしら。椅子に乗つてつていうのも面白みがないし、ここは私が有理君を肩車するといつ方法を進言してみるわ」

「さすがにそれはちょっと……でも、え、肩車？」

「十歳も間近の大人として誰かに肩車されるといつのは恥ずかしかつたけれど、ちょっとぴり心惹かれている自分がいる。

「それとも、有理君が私の椅子になつてくれる？ 生足で踏んであげるけど」

「それもよだそつ……、いえなんでも。肩車でいいです、はい」普通に教室の椅子やら机やらを使うという発想はないよつて、肩車案が採用されてしまった。僕としてはちょっとぴり美味しい展開だつた、恥も外聞も捨てれば好意を寄せている女性に密着できるのだから嬉しくないはずがない。

できれば、男として下で持ち上げる役目に回りたいものだけど。

「さ、有理君。私の頭またいで、持ちあげるから」

そわそわしながらも、恋歌さんに背中を向けて、大きく股を開く。すぐさま恋歌さんは僕の股に頭をくぐらせる、軽々と持ち上げてしまつた。

ジーンズ越しに感じじるそらりそらの髪の毛とか、ふともものあたりをぎゅっと握る手のひらの感触とか、楽しめないこともなかつたけど、思ったほどじやない。これは選択を間違つてしまつたのかもしない、あんまりよくないじやん、肩車。

やつぱり、男が女性の股ぐらに頭を突つ込むといつ、今とは逆の立場で行われることに意味があるのであつ。

「ほら、有理君。はやく

「あ、すいません」

やつぱり恋歌さんの台座になつて、生足でふみふみしてもらつた方がよかつたかもしれないといつすら後悔していると、下から声を

かけられた。

氣を取り直して、ベートーベンの鼻先へと、橢円の機器を向けた。スタイリッシュな髪型が憎らしく、あんちきしょうに見つめられながら、ボタンをゆっくりと押しこむ。

ピーピーピーピー。

なんて間の抜けた電子音を響かせながら、黒い機械は赤色のランプを光らせ何かを僕らに伝えてくれた。しかし、この機械の用途を知らされていない僕にとってはなんとも実感に乏しい話だ。でも想像ぐらいはできる、よく見る探偵の仕事のじとく、こううので発見できるのは盗聴器とか危険なストーカー精密機械と相場は決まっている。

「どうやらい、ビンゴね。それ、盗撮発見器。ベートーベンの絵画の下になにやらとんでもないものがあつたみたい」

やつぱりね、と嬉しそうに頷く恋歌さん。

どうやらい、ベートーベンの怪談にはそんな、人工的な原因が潜んでいたらしい。文字通り、絵画の下から覗られていたというわけだ。けれど、そんなことよつ。

「恋歌さん、はやく下ろしてください」

恥ずかしさとか嬉しさが、今更のように押し寄せてくる。色々と都合が悪いので、とにかく早急に肩から下ろしてほしかった。

五歌（1-3）（後書き）

そろそろ五歌も終わりが見えてきました。

次の話が本題。最終章のはじまり、的な感じ。この五歌はわりかし日常寄りですが、思ったより文字数が膨らんでいく。まあこれは自分の書き方がちょっと変わってきてているせいでしょうけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2935t/>

有恋歌

2011年11月26日19時51分発行